最も勇敢に行動し突入に際しては小隊長と共に敵陣地に突入し赫々たる武勳を奏した。

九月二十七日以來は敗退する敵を黄河北岸地區に捕捉殲滅するの企圖に基き所屬部隊は德縣方向に前進したが十月十三十四日の平原城攻撃に於ては氏は小隊長と共に同城陣地の一角たる何堂の敵陣地に壯烈なる夜襲を敢行して之を占領し續いて平原城陣地の鐵條網を乗り越え地雷埋設地帯を突破し北門に突入して其の城門を占領し同月十八日鳴鶴店附近の攻撃にも勇敢機敏に彈藥を補給して輕機關銃の威力を發揚し中隊戰勝の一素因を與へた。

津浦線の敗殘部隊は十一月に入り新來の山東軍と合流し黄河北岸の地區に必死の抵抗を企圖して居た。皇軍は一齊攻撃の目的を以て十一月十三日行動を起した。所屬揚井中隊は尖兵中隊を命ぜられ同日の未明に前進を開始した。此の日天氣快晴霜は曠野に滿ち薄氷が張つて居た。所屬大隊の攻撃目標は濟南の西北方に當る一要衝安仁街であつた。安仁街の敵は東南側を除くの外部落の周圍を大水濠を以て圍み部落圍壁を利用して堅固なる陣地を構築し尚此の部落西北の小王莊附近にも側射用の陣地が出來て居た。所屬中隊は午前四時安仁街の西方正面に於て運河を渡河した。附近の部落に潜伏せる敵部隊は俄然猛射を浴びせて來た。我が尖兵は猛烈果敢に攻撃を續行したが大隊主力は敵火に妨げられ完全に渡河するを得ず氏の所屬中隊と隣中隊たる第四中隊のみが猛攻に次ぐに猛攻を續け敵前百米に達し日沒となつた。第四中隊は小王莊方面に中隊は安仁街の西正面に向つた。尖兵たりし松原小隊は水濠の間隙より安仁街の西側陣地に突入して其の一角を占領し全く孤立して文字通りの死闘を續けて居た。此の勇敢なる行動に依り悼ましくも小隊長以下十數名は尊き犧牲となつた。所屬清水小隊は其の間敵前を北行して西北正面に殺到したが水濠に阻まれて突入意の如くならず拂曉に至り漸く中隊攻撃正面の敵陣地を占領した。氏は其の間雨飛する敵彈を冒して一意西北正面に移動中午後五時半頃憎むべき敵の一彈は右胸部を貫通しどつと大地に打倒れた。されど氏は一語も發しなかつた。小隊長は第六感で「誰か」と尋ねた。分隊長は高橋ですと答へた。「どうか」と再び問へば氏は元氣よく「大丈夫です」と答へ小隊長は稍安堵して一戰友に介抱を命じ前進を續けたが氏は間もなく顏面に微笑さへ湛えて尊き人柱となつて居た。併し大隊主力は氏等の尊き犧牲に依りぐんぐん安仁街の東南側に展開し十五日早朝より友軍砲兵の支援射撃下に殲滅的大打撃を與へて安仁街を完全に占領した。敵は所屬中隊の攻撃正面のみでも百數十名の屍體を横たへ其の大隊長中隊長等の幹部も戰死を遂げてゐた。

氏は忠孝兩全の人而も居常修養を忘らず愛敬自づから身に蒐まるの趣きがあつた。今次聖戰に參加するや突破戰線實に百數十里其の間名狀すべからざる辛酸を克服し死線を越え默々として自己の職分に邁進し重傷を負ふも友軍の志氣を考へ一言苦痛を訴へず遂に清く尊く身命を君國に捧げ終つた。滅私奉公とは蓋し氏の如き人に適合する言葉であらう。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏が果次の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵八勳等功七級　田淵貞夫

輕機關銃手團河村戰闘に奮戰敵陣に突入して行宮の華と散る

氏は兵庫縣飾磨郡鹿谷村の人にして亡父を爲吉母をよねと云ひ大正五年四月二十六日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚眞面目にして孝心極めて深く事に當り眞摯勤勉爲し遂げざれば已まぬ氣概を有してゐた。昭和六年三月前之庄小學校高等科を卒業其の後は母を扶けて農業に精勵一意家運の挽回を圖り傍引續き農業補習學校後期に入學同九年三月同校を卒業

し更に續いて青年學校研究科に入り同十一年十一月之を修了した。補習學校青年學校共に毎年精勤皆勤章を附與せられ且部落後輩青年を指導誘掖し其の成績優秀にして校下第一賞を授けられた。昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し翌十二年六月には一等兵に進級した。

支那事變起るや南雲部隊第九中隊に屬し輕機關銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着し七月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は暗雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜勤務に精勵し克く其の任を完うした。次で七月二十六日所屬部隊は唐山出發列車に依り午後十一時黄村驛に下車し南苑を攻撃すべく行動を起すや中隊は其の尖兵中隊となり二十七日午後零時五十分黄村出發部隊の最先頭に在りて前進を開始した。此の日天氣晴朗無風にして氣溫百四十度に達し炎暑灼くが如かりしも之を冒し高粱茂る間を南苑に向つて前進し途中敵は團河村の東方行宮南方高地に陣地を占領しあるを知り中隊は此の敵を攻撃する爲直ちに第一第二小隊を第一線に展開し攻撃準備を整へた。敵は堅固に陣地を構築し其の陣地前には深さ胸にも達する水濠を繞らし重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。中隊が愈々攻撃前進を起すや丈餘の高粱は連續して我が戰場行動は頗る困難なりしが氏は火線分隊内にありて有ゆる困難を物ともせず敵彈降りしきる中を分隊長指揮下に前進又前進して勇敢に敵に近接し午後二時三十分より戰鬪を開始せらるゝや敵前至近の距離に於て一層熾烈なる敵火の下彈藥補充に活躍奮鬪し輕機の猛射に聊かも支障なからしめ以て其の威力を遺憾なく發揮せしめ又小銃を以て沈着正確最高度の火力を發揮しかくして小隊の突撃を準備し機熟して小隊長愈々突撃命令を下すや氏は分隊長指揮下に率先々頭に立ちて勇敢に敵陣地に突入之を占領し尚其の後方陣地に對し敵を猛射中無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより敵に多大の損害を與へ午後七時にはさしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏鄕に在るや至孝勤勉の人其の戰陣に立つや彈雨の下其の前進に彈藥補充に或は其の射撃に突撃に常に率先勇敢克く輕機關銃分隊の戰力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは忠孝一道一身を君國に捧げて斃るゝまで其の任務を遂行せんとせる靈忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも一戰玉碎は百戰功なき瓦全に優る。氏が此の一戰に奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　棚池留雄

身に數彈を受け尚奮闘して戰勝の途を拓き北滿海倫に玉碎す

氏は滋賀縣犬上郡大瀧村の人にして父を政次郎母をきぬと云ひ大正五年四月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性溫良眞摯にして氣概に富み孝心深く弟妹を慈しみ幼時より「花は櫻木人は武士」と書して柱掛にかけ座右の銘となし凡ての業

務に精進して居た。昭和四年三月鄉土の川相尋常小學校を卒業後川相實業補習學校へ入學し昭和九年三月同校後期を修了した。氏は同校在學間幹事に推擧され生徒の出席を督勵して良成績を擧げ殊に氏の居住部落たる大字一瀧は前後二回も表彰され尙實補機關誌湖泉を發行して後進の感謝を受けた。尙昭和八年四月以來は靑年訓練所に通學して熱誠勉學訓練生の模範生と謳はれて居た。昭和十年十二月現役志願兵として敦賀步兵聯隊留守隊へ入營し間もなく北滿派遣部隊に編入せられ海倫に駐屯し同地附近の警備に任じ乍ら初年兵敎育を受けて居た。氏は射擊劍術に習熟して各々其の賞狀を又兵精勤章をも授與せられ將兵一同の愛敬を受け尙滿洲事變に從事して勳八等瑞寶章を賜はつた。

海倫は元馬占山の根據地で北滿の寶庫と稱せらるゝ處である。滿洲建國以來大いに肅正せらたが縣東方の山岳地帶に巢喰ふ不逞匪は屢々所在に出沒して掠奪を擅にし殊に支那事變勃發前後より共產匪と合流して滿洲攪亂をも企圖するに至つた。玆に於て所屬部隊長は之が徹底的覆滅を企圖し其の時機を窺つて居た。昭和十二年八月六日海倫の東南約五里に當る哈拉巴山の東南地區に於て敵匪約三百名は警察分駐所を包圍攻擊したるも多大の損害を受け東方に退却し尙其の匪團は哈拉巴山及鹿馬山附近に徘徊するものゝ如しとの情報に接し所屬部隊長は應林討伐隊を編成し之が討伐命令を下した。氏はこの時討伐隊の機關銃第一分隊に屬し翌七日午前四時十分先頭の第一自動車に搭乘し勇躍海倫を出發し日章旗を翻飜と朝風にはためかせ乍ら北滿の曠野を腰房身に向つて疾走させた。午前六時卅分頃札克河を通過北進して腰房身の南方約半里の李綱燒鍋高地南端に達せる時俄然前方高地に敵影現はれ匪彈は我が第一車に集中して來た。討伐隊の將兵は躍り上つて喜び勇み直ちに攻擊部署に就き戰はざるに既に敵を呑んでかゝつた。匪團は地形を利用し小銃機關銃迫擊砲を以て三方面から亂射亂擊して來た。氏は敵彈雨飛の中に冷靜機敏に銃を卸して分隊長の指示せる地點に之を据え有效適切なる猛射を浴びせて敵を制壓し以て中隊の展開並に其の後の攻擊前進を容易ならしめた。敵は益々猛烈に我が第一線に火力を集中し來り分隊長以下逐次負傷し氏も亦重傷を負ひしに拘はらず氏は分隊長に代りて分隊を指揮し敵前至近の位置に進出して頑敵を猛射し以て突擊の動機を作り午前七時過ぎ中隊は遂に壯烈果敢なる突擊を行ひ敵陣地を占領した。敵は多數の死傷者を遺棄して東方及東北方に潰走するに至つた。然るに無念なるかな氏は此の激戰間頭部胸部及右手等に四彈を受け「中隊長殿！」と叫び更に幽かにも「天皇陛下萬歲」と唱へ、銃側に玉碎した。所屬中隊長以下は息をもつかず敵の退路を遮斷し午前十一時敵を捕捉して之に大打擊を與へ更に敗走せる敵の退路を遮斷し午後二時半再び敵を捕捉し之に殲滅的大打擊を與へて遂に起つ能はざるに至らしめ其の任務を達成するを得た。戰すんで斜陽に立てる中隊長は氏の尊き遺骸の傍に佇んで萬感胸迫り暗涙に咽びつゝ「棚池！有難う、よくやつてくれた、仇はとつたぞ」とソッと涙を拂つて居た。

氏は夙に靈忠報國の志に厚く積極進取の人、滿洲派遣以來柿風沐雨幾多の辛酸に堪え不逞の匪賊を討伐し治安維持の重責を全うした。而して身に重傷を受け乍ら尙奮鬪を續けて所屬中隊の爲戰勝の途を拓いて玉碎した。噫皇軍主力が支那大陸に活躍中人目もひかぬ北滿警備の礎石となつたが今次の討匪戰たるや暴支膺懲の聖戰と密接不可分の關係に在り殊に蘇滿國境の情勢は一觸卽發の危機を藏せる當時の情況下に於ける氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上兵等勳八等功七級　田中茂壽

孝悌の勇士津浦線燒窰盆に奮闘して遂に玉碎す（勇士哀話）

氏は鳥取縣氣高郡湖山村の人にして父を壽晴母をちよと云ひ大正五年三月四日に生れ未だ獨身であつた。性溫良眞摯にして謹嚴剛毅父母に事へて孝心深く特に弟に對する愛情濃かにして「此の弟丈は是非一人前に仕上げたい」と自己の就學を辭退し兩親に懇願して愛弟を鳥取中學校へ入學せしめ其の間精神的に弟を激勵し又自らも精勵刻苦して經濟的にも其の責任を負擔せしが如き村の人々の袖を絞らせ模範青年として推賞されて居た。氏は鄕里湖山小學校に學ぶや尋常科高等科を通じて品行方正學術優等の賞を受け卒業に際しては池田侯爵賞の榮冠を獲得し又青年學校在學間は生徒長たるの光榮に浴し前途有爲の人材として其の將來を矚目されて居た。昭和十二年一月徴兵として松江歩兵聯隊に入營し克く軍務に精勵し首席を以て上等兵候補者に選拔され諸上官よりも多大の期待をかけられて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月福榮部隊松原中隊に編入せられ第二小隊輕機關銃分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦線に沿ふ地區を南進し九月三日には大郝庄附近の敵陣地攻擊に參加し泥濘汎濫の地帶而も敵彈雨飛の中を物ともせず勇躍前進して機敏に彈藥を補充し續いて我が歩兵砲彈に肅接し遂に部落正面の敵陣地に突擊を敢行し頑敵に痛擊を與へて之を潰亂敗走せしめた。翌四日蠻庄の攻擊に於ては所屬小隊は中隊の豫備隊となり次で第一線に增加を命ぜらるゝや「ヨシ來た」の掛聲も勇ましく第一線に飛び出し敵情を監視して居たが優勢なる敵部隊は南方及西方から逆襲に轉じて來るを發見し機を失せず之を分隊長に報告し矢繼早やの猛射を浴びせて之を擊退し以て中隊の突擊を容易ならしめ午前十一時には早くも蠻庄一帶の敵陣地を占領するに至つた。

翌五日所屬大隊は午後零時三十分行動を起し馬廠陣地の一角たる燒窰盆の敵陣地を奪取する目的を以て午後二時同陣地の北方六百米の線に展開したが所屬中隊は大隊の左第一線であつた。この日朝來天氣快晴將兵の意氣頓に昂り高粱を押しわけながら勇敢に敵陣地へ肉薄した。敵は我が軍の接近を察知して忽ち小銃機關銃迫擊砲の亂射亂擊を浴びせて來た。前面の敵陣地は殆ど掩蓋を有する堅壘で數ケ月の日子を用ゐて構築せるものと云はれ其の陣前の地形は行動困難なる濕地であつた。掩蓋陣地の銃眼からは絶え間なく小銃機關銃の猛火を噴いて居た。所屬中隊は一發の應射もなさず躍進又躍進し將兵悉く是泥人形敵前百米に達して初めて一齊に火蓋を切つた。敵火は益々熾烈を加へて來た。然れども此の附近は軟弱なる泥沼同樣にして輕機關銃の適當なる射擊位置は見當らなかつた。斯くと見たる氏は單身前進して射擊位置を偵察し手

を擧げて分隊長に報告し銃の到着を待ち機關銃の脚を固定すべく努力中無念一彈飛來氏は胸部に貫通銃創を受け「後は賴んだ」と叫びかすかにも「天皇陛下萬歲」と奉唱し壯烈なる戰死を遂げた。其の後友軍砲兵は敵陣地に對し猛砲擊を開始し一彈又一彈見る見る要點を破壞して行つたが夕闇迫る頃敵は遂に馬廠河の堤防を決壞して陣地直前の凹地を氾濫地帶と化せしめ水深首を沒するに至つた。翌朝午前五時半別命に依り所屬大隊は攻擊を中止して唐官屯攻擊の爲同地に向ひ轉進

した。

氏は郷に在ると軍に從ふとを問はず一點私心なく赤誠を捧げて自己の尊き職分に邁進し參戰以來幾辛酸に逢ふも常に明朗進んで難局に當り慧眼敵情を看破しては中隊戰勝の途を拓き挺身九死の中に輕機關銃分隊の威力發揚の爲適切なる陣地を選定し遂に玉碎するに至つた。其の壯烈眞に鬼神を泣かしむるものがあつた。氏戰死の悲報を當時危篤の病床に在りし愛弟に漏らせば愛弟は「兄ちやんの所に行くんだ」と氏の名を呼び續けて愛弟亦不歸の客となつた。其の人を知ると知らざるとを問はず誰か同情哀悼の情を禁じ得やうか。さり乍ら今次聖戰に於ける氏の赫々たる武勳は皇軍戰史に輝きて芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守り又愛弟の靈と共に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　田中義雄

模範兵津浦線に活躍し德州郊外に傳令の重任を果して玉碎す

氏は島根縣八束郡大庭村の人にして母をシゲノと云ひ大正五月三日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして孝心深く祖父母及母を扶けて家運挽回に努め品行方正孝養至らざるなく郷土青年の模範として信望厚かつた。昭和六年三月大庭小學校高等科を最優等を以て卒業し其の後は家事を手傳ひ乍ら大庭村の實業公民學校に二ヶ年又青年訓練所へ約三ヶ年半の間通學し學術技能共に優秀にして模範生として推賞せられ早くも同地青年團の支部長として郷土青年の風敎刷新を企圖し自ら未明より薄暮に至る迄家業たる農業に精勵し諸集會の時間を勵行し各種の義務履行を嚴正にして範を垂れ私費を寄附して讀書會を組織し休日或は閑散期の夜間を利用して讀書修養を奬勵する等其の功績は顯著なるものがあつた。昭和十二年一月徴兵として松江歩兵聯隊へ入營し一意軍務に精勵して優秀なる成績を擧げ上等兵候補者に選拔せられた。

支那事變起るや間もなく中井部隊永島中隊に編入せられ中隊指揮班員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘を冒し津浦沿線を南下した。而して八月二十二日より九月六日にかけ獨流鎭二堡王口鎭東子牙鎭劉莊附近の戰鬪に參加したが九月五日東子牙鎭の戰鬪に於ては薄暮尖兵が同部落の一角を占領するや氏は彈雨を冒して之に重要なる命令を傳達して所屬中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ又劉莊の攻擊に方りては所屬中隊は午後零時半行動を起し所屬大村大隊の左第一線として展開し午後二時二十分より戰鬪を開始したが戰場は浸水膝を浚し敵彈は嵐の如く飛來し行動極めに困難であつたに拘はらず氏は命令傳達の重任を帶び迅速確實に之を完了し又高粱畑に潛伏しある敵を發見するや機を失せず之を報告し中隊長は突擊に依り之を殲滅し引續き中隊長と共に劉莊に突入して其の一角を奪取したが氏は實に其の戰勝の素因を與へた者であつた。次で九月七日よりの馬廠會戰に於ては所屬部隊は敵を牽制して兵團主力の攻擊を容易ならしむべき目的を以て子牙河畔を破竹の勢を以て南進し東辛庄南趙扶鎭附近の敵陣地を席卷したが氏は依然各種の難局を突破して傳令勤務の重任に服し所屬中隊の爲貢献せる所頗る大であつた。南趙扶鎭占領後は他兵團の部隊と交代

し津浦沿線の主力方面に復歸したが所屬中隊は砲兵部隊を初め其の他の車輛部隊の掩護を命ぜられ氏も亦各種の警戒勤務に服して居た。氏は疲勞の色も見せず常に積極的に活躍を續け衆兵の模範となり克く其の重任を果した。

九月廿六日滄州の激戰終末を告ぐるや所屬部隊は德縣方向に猛追擊を始めた。斯くて所屬中隊は十月三日德縣附近の敵陣地攻擊の爲迂回隊の尖兵中隊を命ぜられ所在の敵を驅逐しつつ急進し午前十一時頃十二里莊内に據る敵陣地を攻擊するに至つた。敵は部落の圍壁に據り頑强に抵抗したが所屬中隊長は第二小隊を北正面より第一小隊を東面より第三小隊を西方より敵の退路を遮斷する如く部署し敵前百乃至五十米に近迫した。此の時氏は中隊長より第一小隊長に對する重要命令の傳達を命ぜられ敵彈雨飛の中を疾驅して之を傳達した。然るに傳達終りし一刹那一彈飛來氏は左鎖骨より左側胸部にかけ貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。時に午後零時五十分であつた。併し其の後間もなく第一小隊は當面の敵陣地に壯烈果敢なる突擊を敢行し敵陣地の一角を占領し續いて部落内の掃蕩を行ひ所屬中隊は午後一時十二里莊を奪取するを得たのであつた。

氏は鄉土の模範青年にして又所屬中隊の模範兵であつた。今次聖戰に參加するや選ばれて指揮班員の榮職を命ぜられ駐軍に行軍に又戰鬪に中隊長の手足となり或は跋涉困難なる泥濘の高粱地帶に或は電劍彈雨の中に重要命令を迅速確實に傳達して中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。是實に生死を超越せる赤誠の士にして初めて能くし得べき所眞に軍民の鑑と云ふべきであつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史を飾り其の芳名は後世に謳はれ不滅の英靈は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　田中由雄

津浦線丁莊の夜襲に奮鬪し臨終尙戰況及戰友を案じて散華す

氏は兵庫縣飾磨郡飾磨町の人にして父を彌平母をきわと云ひ大正五年八月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして孝心深く又人に接して同情心に富み貧民を勞はり公務に盡力し事に當るや熱誠勇往而も不屈不撓の氣魄を具へて居た。昭和三年三月郡内の英賀保等常小學校を卒業し其の後は漬物商に從事し熱誠家計を扶けて入營時に及んだ。昭和十二年一月徵兵として姫路步兵聯隊へ入營し誠意軍務に勉勵し同年七月一等兵に進級した。

支那事變起るや同年八月沼田部隊平塚中隊に編入せられ第一小隊第三分隊兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進した。所屬大隊は先づ三間房及馬廠河畔四黨口の敵を擊破する目的を以て八月二十四日天津を出發し翌二十五日三間房の北方約千米の路上に兵力を集結した。氏は此の際泥濘の難路を意とせず克く給養掛を助けて糧秣の運搬に從事し翌二十六日午後十一時大隊の主力部隊に屬し三間房を出發し夜暗を利用し北部四黨口に向ひ前進を起した。途中の進路は一定の道路もなく水深膝を沒する一帶の汎濫地區、凹地は水深往々丈餘に達し危險千萬であつたが氏は率先水先を偵察して戰友を誘導し翌朝午前八時半頃敵前約五百米の線に達した。此の時敵は一齊に小銃機關銃の火蓋を切つて猛射を浴びせ來り我が第一線部隊に漸次死傷を生ずるに至つた。氏は之に屈せず尙前夜來の水中行軍と空腹に疲勞甚だしかつたに拘はらず志氣益々旺盛分隊長の掌握下に勇戰して北部四黨口を奪取した。其の後氏は小隊長の命令に依り敵彈雨飛の中に傷者の收容に任じ克く其の任務を完うした。所屬大隊は四黨口方面の敵を擊破して之を馬廠河以南に驅逐せる後陳官屯方面に轉進するに至つたが氏は其の際屢々進路の偵察側方の警戒に任

し又部隊の駐留に際しては暗夜敗走兵の蠢動する中を豪膽不敵にも屢々巡察に出で常に積極的に活躍を續けて居た。

馬廠本陣地に對する總攻撃開始せらるるや所屬部隊は敵陣地の一鎖鑰たる丁莊の堅壘を攻略すべき命令を受領した。所屬大隊は九月九日桃家庄南端に集合し午後九時行動を起し東部丁莊東南地區より攻撃すべき任務を與へられた。當時肅々として闇の中より進み來れる軍旗の下に部隊長は言々肺肝より悲壯の訓示を與へた。氏等將兵は唯感激に聲もなく決死の決意を胸に祕め心を罩めて捧銃、軍旗に訣別を告げた。將兵は水盃を擧げて固き握手を交はし身は輕裝となり左腕には白布をつけ泥水の畑地を一路敵陣地に邁進した。其の夜午前四時十分敵前百五十米附近に接近するや待ち構へて居た敵兵は大蛇の火を吐くが如く小銃機關銃は宛ら驟雨の如く飛來し迫撃砲彈は附近に落下炸裂して土砂高粱を中天に舞ひ上げ硝煙漠々地上を掩ふて物凄かつたが將兵一同は之を物ともせず默々として泥畑を匍匐し遂に敵前五十米に肉薄した。氏は其の間分隊長の命に從ひ小隊長との連絡に勉め又率先險難を冒して敵前至近に埋設せる地雷を發見して之を爆破せしめて小隊のため進路を開き今や突撃號令一下敵前の水濠目がけてサッと跳入らんとする一刹那無念敵の猛射を浴び身に數彈を受けて其の場に打倒れた。併し氏は自身の苦痛も訴へず戰況を案じ戰友の安否を尋ね戰友に抱かれつつ眠るが如く息絶えた。所屬中隊は氏等の勇戰に依り其の後東部丁莊の敵陣地を粉碎し破竹の勢を以て午前五時十分西部丁莊の敵を撃破し赫々たる武勳を奏した。折柄北方正面より南下攻撃せる所屬部隊長も來り合し戰場を鮮血に染めて打斃れし尊き犧牲に默禱を捧げ溢頰に一杯の涙を湛え「有難う！　よくやつて呉れた」と切なる言葉を投げかけて咽び入つて居た。

氏は志操正純難局に當りて不屈不撓の人、今次聖戰に參加するや終始一貫泥中に奮闘し有ゆる辛酸を克服し一意自己の職分に邁進して中隊の任務遂行に大なる貢献を致し遂に丁莊の激戰に戰勝の一素因を作つて玉碎した。寔に是良兵良民の鑑と謂ふべきである。斯かる忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜に堪えざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　田口善市

獨斷挺身敵監視哨を撃退して大隊の衛河渡河成功の端緒を拓く

氏は栃木縣河内郡姿川村の人にして父を春吉と云ひ明治四十五年五月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性活潑誠實にして孝心深く事に當り實直勤勉進取の氣概に富んでゐた。昭和二年三月姿川小學校高等科を卒業其の後上京し材木商店員となり誠實勤勉店主の信用厚かつた。昭和八年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營在隊間滿洲事變に出動し各地に轉戰功を樹て勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり翌九年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊山本中隊に屬し第二小隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月中旬永定河畔楡垈鎮南方地區の戰闘及同河畔南公由の戰闘引續き拒馬河畔揚家屯附近並に平漢線西側地區の戰闘に九月下旬には東釜山附近及大册河畔王谷莊堡附近の戰闘に次で十月上旬は滹沱河の渡河戰闘に參加

同月十日石家莊を占領し引續き敵を急追して元氏附近滹沱河に敵を擊破し順德邯鄲滋縣を經て臨漳に到達した。此の間氏は連日不眠不休の急行軍にも屈せず志氣益々旺盛其の敵と戰ふや每戰奮鬪克く歩兵の本領を完うし中隊の任務達成を容易ならしめた。次で十一月八日より大名城の攻擊開始せらるるや同日は院堡集の敵を擊破し翌九日は岸上の敵を十日は大名城の西側城壁を攻擊して奮戰し午後八時遂に大名城を奪取した。

十二月十二日范家堤附近の攻擊に際しては所屬中隊は第一線渡河部隊として寒月冴え渡り凄愴の氣滿てる同夜十一時衞河に向ひ前進し月の落つるを待ち午前二時三十分漕渡により敵前渡河を敢行した。此の時舟の都合により中隊長は第二小隊及配屬重機關銃を指揮し第一回に渡河して對岸に達するや前方百二十米にある堤防の線に迄速かに進出せんとし中隊の前方に所要の警戒兵を配置して前進し約九十米程進出せしと思ふ頃堤防上の敵監視哨より「誰何」を受けた。此の時中隊の前方右側方に在りて前進せし氏は獨斷物をも言はず敢然敵監視哨を目掛けて突擊し遂に之を擊退し堤防上を占領した。然るに增援隊らしき敵の一團は右前方范家堤の部落方向より前進し來るを目擊し機を失せず大聲にて之を中隊長に報告し聽て急進せる中隊と共に奮戰該堤防を確保せしが其の際惜しくも頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏の勇敢なる行動と時宜に適したる報告とにより機先を制し敵を擊退して大隊の渡河を容易ならしむることを得た。

氏素と誠實の人柔には滿洲事變に功を樹て今次亦召されて戰陣に臨むや大小幾多の戰鬪に參加し每戰勇敢克く小銃兵たる本分を完うして遺憾なかりしのみならず中にも衞河の渡河戰に於ては獨斷挺身堤防を占領確保し大隊渡河成功の端緒を拓いた。實に斯くの如きは旺盛なる攻擊精神の發露にして是畢竟盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。聖戰中途氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮戰して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は後世不朽武人の華として謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　田名網清一郎

戰鬪慘烈の間に傳令の重任を果して中隊の危機を救ひ惜しくも東釜山の空爆に散る

氏は栃木縣安蘇郡植野村の人にして父を鶴太郎母ふげんと云ひ大正四年十二月五日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚業務に忠實にして不屈不撓爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。昭和三年五月植野尋常小學校を卒業引續き葛生農商學校に入校同六年三月同校を卒業し其の後家業に從事し傍植野青年團副支部長として團の向上發展に盡瘁してゐた。昭和十二年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營同年七月には初回に精勤賞を附與せられ專心軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや坂西部隊第七中隊に屬し中隊傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同

月十三、十四日は檢埜領南方永定河畔の渡河戰鬪に參加し次で南公山の敵を擊破し之を急追して十五日拒馬河畔に進出した。敵は水深胸に達し而も急流の拒馬河を陣前の障碍として其の右岸北相附近一帶に堅固に陣地を占領し我が進擊を極力阻止すべく待構へてゐた。所屬部隊は同日午後砲工兵援助の下に此の敵を攻擊すべく敵前渡河を敢行した。中隊は强行渡河後左第一線に進出するや氏は終始中隊長傳令として雨下する敵彈下を東奔西走戰場を駈け廻りて命令通報の傳達に任じ中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめつつ逐次敵に近迫中中隊は左右より敵側防火の十字火を被り而も敵は北相部落南方より優勢なる兵力を我が左翼に移動し攻擊し來れる爲最左翼中隊たりし所屬中隊は遂に我が左翼を敵に包圍せらるるに至り頗る危險の狀態に陷るに至つた。依つて中隊長は其の際渡河中の大越小隊を招致して左翼に增加すべく氏に之が傳達を命じた。當時敵彈は益々烈しく死傷續出戰鬪慘烈を極むるに至つたが氏は勇躍任に就き篠つく雨の如き敵彈下を躍進し幸に微傷だに負ふ事なく見事中隊長命令を小隊長に傳達した。時恰も河岸に到達せる大越小隊長は取敢へず手裡に集まりし一ケ分隊を提げて我が中隊を包圍攻擊中の敵の外翼に向つて急襲的に猛射を開始せるを以て敵は遂に其の企圖を挫折するに至り漸く中隊の危機を脱せしむる事を得た。爾後中隊は逐次攻擊近迫して翌午前七時頃北相部落を奪取することを得た。

次で九月十八十九日南北義安の戰鬪には暗夜未知而も困難なる地障の介在せる地形に於て氏は傳令として活躍奮鬪克く其の任を果し爾後敵を急追中氏は對空監視として中隊の先頭に在りて前進し東釜山臨路口附近に差懸るや敵機の襲來を發見逸早く之を大聲報告し中隊をして機を失せず之が對應の處置を講ぜしめ中隊は直ちに對空射擊を以て之を擊退せしが敵機より投下せる爆彈附近に落下炸裂し氏は兩大腿部に爆創を受け直ちに隊編帶所に收容せられ手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく二十四日午前零時五十分惜しくも護國の華と散つた。

氏や素と忠實の人、其の戰陣に臨むや選ばれて中隊長の傳令となり每戰彈雨の下積極活躍中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめて遺憾なかつた。殊に拒馬河畔に於て危險を冒して重任を完うし中隊の危機を救ひし如き是畢竟一身を君國に捧げて斃るる迄其の職分を果さんとせる盡忠至誠の發露にして正に傳令の鑑と謂ふべきである。參戰幾何ならずして氏の如き良傳令を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも滅私奮鬪以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　田淵三郎

小行李馭兵不屈不撓克く其の任を果して拒馬河畔に散る

氏は栃木縣河內郡姿川村の人にして父を忠作母をハルと云ひ明治四十四年十一月十五日に生れ妻タイとの間に一兒忠江を擧げた。資性溫和頗る眞面目にして孝心深く兄弟間圓滿且友情厚く事に當り勤勉にして不屈不撓遂行せざれば已まざる氣概を有してゐた。大正十三年三月姿川村第二尋常小學校を卒業し其の後宇都宮市外國本村郵便局に勤務し同十五年四月より同郡城山村大谷石材採掘場に石工として働いてゐた。昭和七年十月一日輜重特務兵として宇都宮輜重兵大隊に入營二

ケ月の軍隊教育を受けて同年十一月二十五日除隊し其の後前記の職業を繼續してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第二大隊に屬し小行李の馭兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十三十四日永定河畔の戰鬪に於て大隊が胡林より南公由に向つて追擊するや馬を勞はりつつ不屈不撓克く長途の嶮難惡路の難行軍を續け就中永定河の渡河に當りては河幅三百米濁流渦卷き水深胸にも達し且兩岸遏地にして行動頗る困難なりしにも拘はらず萬難を克服して大隊に跟隨し適時第一線に彈藥を補充して大隊の戰鬪に支障なからしめた。

九月十五日所屬大隊は南公由の敵を猛擊し戰鬪愈々酣となるや小行李は拒馬河左岸地區に集結し軈て行李長は步兵部隊に引續き渡河すべく其の渡船準備の爲河岸まで彈藥の運搬を命令した。當時戰鬪激烈を極め第一線のみならず河岸一帶敵の銃砲彈は雨か霰の如くであつた。氏は之を物ともせずしかも急追飢渴の爲疲勞困憊其の極に達せるにも拘はらず率先先頭に立ち勇躍して重き彈藥箱の運搬に從事せしが河岸より約三百米附近に達するや敵の砲彈身邊に落下炸裂し其の爆創により惜しくも重傷を負ふて倒れた。氏は直ちに收容せられ手厚き醫療を受けたが其の甲斐もなく戰死を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや孝子であり出でて戰陣に臨むや又忠良の兵であつた。克く馬を愛護し惡路飢餓の萬難を克服し終始一貫不屈不撓彈雨の下常に率先勇敢克く小行李の任務を果した。元より自身銃を執り戰ひしにはあらざるも每戰第一線戰鬪兵の戰力を遺憾なく培養せし隱れたる功績は沒すべからざるものであつた。僅か二ケ月の軍隊教育を受けし身を以てかくの如きは全く忠孝一道の傳統に徹し國難に一身を捧げんとせる靈忠至誠の發露にして皇軍輜重の軌範とすべきである。參戰幾日ならずして氏の如き忠良の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも死力を竭し奮鬪して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　高田正五

大行李員有ゆる困苦辛酸を克服して尙且難局に當り遂に大册河畔に散る

氏は栃木縣宇都宮市旭町の人にして父を松次郎母をツルと云ひ大正三年二月九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實孝心深く事に當り積極恪勤不屈不撓の氣概があつた。大正十五年三月宇都宮小學校高等科一年を修了して縣立宇都宮中學後に入校同七年三月卒業其の後父母を輔けて家業に從事し傍母校の爲謝恩奉仕克く校勢の進展に盡瘁してゐた。昭和十年六月一日輜重兵特務兵として宇都宮輜重兵大隊に入營二ケ月の軍隊教育を受けて同年七月二十六日除隊した。

支那事變勃發し昭和十二年八月充員召集令狀を受くるや氏は寸陰を惜しみて家業を整理し後顧の憂を斷ちて應召坂西部隊第二大隊に屬し大行李員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十三日永定河畔の敵を擊退し引續き拒馬河畔に向ひ敵を急追するや氏は班長指揮下に水深胸部に達する濁流永定河を渡河し車輛の通過至難なる

嶮難惡路と闘ひ車輛の保全愛馬の保護に萬全の努力を拂ひつゝ克く班長を輔佐して圓滑に輸送の任務を完うした。次で九月十五日より拒馬河畔の戰闘開始せられ部隊は强行敵前渡河を敢行激戰の後之を擊退し大冊河畔に向ひ急追するや皇軍破竹の進擊に伴ひ敗殘兵は各所に出沒し危險極まりなき環境に於て氏は班長指揮下に常に勇敢に行動し惡路を克服し不眠不休の疲勞困憊に屈せず支障なく第一線に跟隨して二十一日大冊河畔舫上部落に達した。

引續き部隊は二十一日夜半大冊河右岸の敵を夜襲し拂曉北相の頑敵を擊破して猛追擊に移るや大行李は大隊に急追すべき命を受け二十二日未明舫上を出發し午前六時頃大冊河々岸に到達した。然るに大冊河は河幅百數十米餘水深胸に達し敵岸に近づくに從ひ頸にも達する所あり而も急流なりしを以て車輛部隊の渡河は蓋し容易ではなかつた。殊に我が第一線が昨夜半より猛擊突破の後には所々敗殘兵殘存せるのみならず彼等は皇軍との正面戰闘には脆くも敗れつゝしかも戰闘力なき後方部隊を襲ふことは常套手段なりしを以て大行李班長は我が困難なる渡河中敵の襲擊を受くるの危險を顧慮し若干の兵を割きて先づ渡河掩護に當らしめた。氏は選ばれて戰友と共に此の重且至難なる任務を命ぜられ勇躍して率先濁流を渡り對岸に取り着くや他の二名は正面及右側面に對し氏は左側方に對し警戒監視を擔當せしが此の附近據るべき地物とてなく剛膽にも暴露して最も危險なる左側方至近距離に介在せる高粱畑に着意し熱心警戒中突如該高粱畑中に潛伏せる敵の狙擊を被り無念腹部に貫通銃創を受け其の場に倒れた。流石剛氣の氏も重傷に再び起つ能はず軍醫に收容せられ衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐もなく二十五日遂に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。併し氏の剛膽なる警戒掩護により大行李は困難なる渡河を完うし滯なく急追中の部隊に追隨することを得た。

氏鄕に在るや孝子にして勤勉其の戰場に臨むや進路到る處惡路嶮難而も皇軍破竹の進擊に追隨するの辛酸は到底餘人の想像以上でありしにも拘はらず不屈不撓有ゆる困難を克服し默々として其の任務に奮闘し殊に大冊河の渡河に當りては勇躍難局に當り克く其の重任を果して遺憾なかつた。實にかくの如きは忠孝一道一身を君國に捧げ斃るゝまで其の本分に邁進せる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何ならずして大冊河畔に散りしは洵に痛惜に堪へざるも皇軍戰勝の裡に隱れたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　田鳥（たうす）正武

忠誠敢爲の運轉手重任を果し京漢線曲陽討伐戰に玉碎す

氏は福井縣遠敷郡小濱町の人にして亡父を武三郎母をきくと云ひ明治四十一年十一月廿四日に生れ妻ともとの間には未だ子寶がなかつた。性溫良着實にして孝心深く弟妹を愛護善導し且義俠心に富み克く困苦缺亡に堪え自己の信念を確立し意志極めて鞏固であつた。氏は又少年時代より手工に長じ精巧なる玩具を作りては弟妹に與へ喜ばせて居たが長ずるに從ひ器械器具の故障發見並に之が修繕には特有の技能を持つに至つた。大正十二年三月今富小學校高等科を卒業し其の後は

家庭に在りて父を扶け農具の製造販賣業に從事して居たが昭和二年頃敦賀自動車學校に入學し三ヶ月の課程を卒業し自動車運轉手の免許證を下附せられ爾來自動車運轉手として就職し大いに手腕を認められ後援者を得て乘合自動車營業を營み粒々辛苦の結果タクシーを購入して自營するに至つた。徴兵檢査の結果第一補充兵歩兵に編入せられ依然家業に精勵して著々成果を收め母を慰めて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召高橋部隊中原中隊に編入せられ第三小隊第三分隊に屬し勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月下旬北支豐臺に到着し爾來泥濘惡路を克服し常に車輛を愛護し進んで難局に當り其の都度完全に任務を遂行し將兵一同より厚き信頼を受けた。偶々京漢線定州の西方に當る曲陽方面に蠢動する敗殘兵を討伐するの任務を有する歩兵部隊の行動を容易ならしむる爲所屬部隊より自動車一小隊を派遣する事となつた。此の時氏は選抜を受け所屬小隊と共に十月二十一日未明石家莊を出發し三日間連日連夜不眠不休或る時は敵彈雨飛の中を其の卓越せる操縱技術を以て勇猛果敢に突破し以て兵力輸送に支障なからしめ又何等遮蔽物もなき地形に於て敵彈を冒して徒歩疾走して第一線に彈藥を補給し以て第一線の戰力を維持せしむる等殘敵掃蕩に貢献せる處甚大であつた。殊に十月廿三日行唐城附近に據る敗殘兵の掃蕩に當りては午前七時半歩兵隊を乘車せしめ東長壽部落を出發し勇躍北方に向ひ驀進した。午前十時頃行唐城の南方に在る北村附近に到着して歩兵隊を下車せしめた。此の附近の地形は行唐城に通ずる三條の道路ありて北村と行唐城との中間地區には東西に横はる水溝れの無名河があつた。此の河の北岸地區より行唐城に到る間は森林點在し行唐城は土壘に圍まれ壘上の敵は附近の地形を俯瞰し得るの關係に在つた。歩兵隊は中央及西方道路に依り北進し自動車小隊は東方道路に依り行唐城に向ひ前進した。氏は其の際最先頭車に乘車し前進路の警戒をなしつゝ午後零時廿分行唐城壁の南々東約二百米の無名河に到達せる時右前方の獨立家屋附近に敵兵を發見し速かに大聲を以て小隊長に報告すると共に更に豪膽にも附近の敵情を確めんと伸び上つた其の瞬間右前方約五十米の獨立家屋前の敵より狙撃を受け頭部に貫通銃創を受け其の場に打ち倒れた。小隊長は此の報告に依り直ちに自衛戰鬪を開始し小隊の損害を防止し得たるのみならず小隊一同は奮然として猛射を加へて敵を撃退し次で勇敢なる追撃に移り遂に行唐城内の敵をして砲撃開始の遑なからしめた。氏は其の後昏睡狀態に陷つたが二十四日惜しくも護國の華と散つた。

氏は温情人に接し而も奮鬪努力の人今次聖戰に參加するや未だ正規の軍隊教育をも受けあらざる身を以て克く軍人精神に透徹し泥濘及山間の惡道に幾多の辛酸を克服し又敵彈雨飛の巷に其の優秀なる運轉技術を發揮して兵力輸送の重任を全うし又尺寸の眼前に敵を發見するも更に驚かず小隊全般の運命の爲に敢然危險を冒して姿勢を大にして附近の敵情を展望し遂に不幸玉碎するに至つた。蓋し一死報國の赤誠に燃ゆるの士にして初めて能くし得る處にして眞に皇國軍人の鑑と云ふべきである。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰傷の日歩兵一等兵に進級したが戰死の日更に歩兵上等兵に進められ次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　田坂嘉信

羅店鎭方面の激戰に重任を果して致命傷を受け戰況を案じつゝ殪る

氏は愛媛縣松山市出淵町の人にして父を弘一母をヤス代と云ひ大正元年八月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして孝心深く弟妹を愛護善導し事に從ふや熱心勉勵不屈不撓の氣概を持つて居た。大正十五年三月鄕里の小學校を卒業後直ちに同縣々立商業學校へ入學し昭和六年三月同校卒業昭和八年一月徵兵として善通寺騎兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵して良成績を擧げ翌九年十一月滿期除隊となり歸鄕後は老年の父を助けて印刷業を營み眞に父の片腕となつて居た。

北支の風雲急を告げ縣下にも召集令を受領せる者あるを耳にするや氏は勇心勃々店先に椅子机を出し認印迄準備し鶴首召集令を待ち焦れて居た。昭和十二年八月愈々令狀を受領するや欣喜雀躍心を罩めて送られし千人針にも南無阿彌陀佛と記入し肌身に着けて應召田邊部隊の機關銃小隊に編入せられ彈藥馬馭者として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月下旬上海戰場に到着し羅店鎭と劉河鎭との中間地區にある一要衝西金家村、陳宅附近の線に於て北方の敵に對し陣地を占領し爾後の戰鬪を準備して居た。此の附近には東西に横はる水流ありて此の水流の北側には本道の西側に扁家橋陳宅の部落、本道の東側には西金家村の部落點在し水流の南側にも本道の東西地區に無名部落があつた。所屬部隊の主力は西金家村北端の線に又第一中隊及氏の所屬小隊は水流南側に沿ひ陣地を占領し氏は九月五日手馬の警戒と兼ねて手馬位置と第一線間との連絡勤務に服務して居た。同日午後一時過ぎ兵力未詳の敵兵は主力を以て西金家村に向ひ一部を以て扁家橋南側地區に向ひ攻擊して來たが我が水流南側の部隊は敢然之を擊攘するに決し第一中隊長は機關銃小隊を併せ指揮し既設陣地に就かしめ午後一時三十分頃より戰鬪を開始した。午後四時五分第一中隊長は手馬の掩護兵をも速かに第一線陣地に就くべき命令を下し氏は傳令となり其の命令を手馬指揮官たりし村上曹長に傳達する事となつた。此の時敵の銃砲彈は猛烈に氏等の陣地附近に飛來して物凄かつたが氏は之に怯まず迅速確實に之を傳達し同曹長等と共に所命陣地に進入し更に氏は同曹長より陣地に在りて敵情監視並に好機に投じて敵の自動火器を狙擊すべき任務を受けた。當面の敵は本道の西側に在る堆土を中心として展開し且堆土上に重機關銃、堆土の右前方に輕機關銃左に重機關銃を配置して猛烈なる火焰を噴いて居た。氏は先づ所屬部隊主力の側面を猛射しありし敵の輕機關銃を狙擊して之を沈默せしめ續いて堆土上の重機關銃を狙擊して之を撲滅して敵の攻擊前進を阻止し更に其の左の機關銃を狙擊せんとする一刹那憎むべき一彈飛來氏は左顏面に盲貫銃創を受けて打ち倒れた。傍なる戰友は「田中どうした確つかりせい！」と勵ませば氏は鮮血にまみれながら「敵はどうした。味方は勝つたか」と息も絶え〳〵に戰況を案じて居た。氏は直ちに野戰病院に收容されたが翌六日惜しくも江南戰線の華と散つた。併し所屬部隊は氏等の勇戰奮鬪の結果陣地前に於て敵に壓倒的の打擊を與へ次で水流を越へて出擊して之を擊退し午後八時再び原陣地に復歸した。

氏は志操堅實克く家業に精勵して孝養を盡し今次聖戰に參加するや騎兵科の機動を許さゞる上海戰場に晝夜の別なく飛來する敵銃砲彈下に曝されつゝも常に愛馬の保護飼育に細心の注意を拂ひ又屢々不眠不休の警戒に任ずる等所屬部隊の任

務遂行に寄與せる所甚大であつた。而して陳宅附近に激戰を惹起するや沈勇機敏傳令の任務を完遂し精到なる射擊技能を發揮しては我が軍に重大なる利益を與へ而も致命傷の苦痛に耐へつゝ尚も戰況を顧念して息まず眞に皇軍精兵の眞價を發揚して餘す處もなかつた。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名を後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日騎兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　田中吉久

責任觀念旺盛なる鐵道機關兵機關車を死守して郎坊驛に玉碎す

氏は長崎縣西彼杵郡野母村の人にして父を龜松母をマスと云ひ大正五年十月十二日に生れ未だ獨身であつた。性温良にして孝悌友愛の情深く事を處するや機敏、屢々身を犧牲に供して難局に危急を救ひ而も其の功を誇らず多くを語らず寔に床しき風格を持つて居た。昭和六年三月野母小學校高等科を卒業後直ちに野母實業補習學校後期に入學し同八年三月同校を卒業し其の後は鹿兒島縣甑島に出漁し滯在間寸暇を惜しみて同地補習學校に通學して居た。昭和十一年十二月徴兵として關東軍鐵道隊へ入營し同年三月選拔を受け機關員教育隊に派遣せられ鐵道機關術を專修するに至つた。氏は此の光榮を深く感激し心を罩めて弟妹に書を送り皇恩の有難さを述べ又留守中兄に代りて兩親に孝養を盡すべき事を頼み尚弟妹の心身の鍛練を切望する等其の心境の麗はしさは讀む者をして感激せしめて居た。

蘆溝橋事件勃發し北支の風雲日を追ふて險惡となるや昭和十二年七月戸澤部隊眞下中隊に編入せられ機關乘務の鐵道員として勇躍北滿より天津方面に南下し七月十四日より天津東站—豐臺間の運輸を擔當し或は停車場勤務に或は列車勤務に活躍し皇軍の豐臺北平方面に於ける軍事行動に協力した。當時支那第二十九路軍並に其の變裝公安隊等は所在に抗日意識を煽り物情騷然として氏等の運輸行動たるや全く敵の包圍圈内に大なる危險に曝されて居たのであつた。而も七月下旬以來は北寧鐵道沿線に駐屯せる支那軍隊の形勢は我が軍を劣勢と見て取り愈々露骨となつて來た。

七月二十八日氏は機關員として郎坊に在りて勤務中であつたが其の夜午前二時頃公安隊に變裝せる正規軍は北寧線の沿線各所を目ざし一齊に我が軍を襲擊して來た。郎坊驛に於ても機關銃を有する有力なる敵兵より襲擊を受けた。敵の兵力は實に我に數十倍して居たが氏等守備兵は敢然として之に應戰した。氏は機關車と運命を共にすべく決意し機關車に立て籠り死闘を續けた。優勢なる敵は機關銃を猛射しつゝ逐次肉薄して我を包圍し多大なる損害を受けつゝも新手を以て噛みつくが如く殺到し手榴彈を雨霰となげつけて來た。されど氏は泰然自若寄せ來る敵を射殺して一歩も機關車に侵入せしめず數時間に亘りて克く大敵を支へた。然れども今や銃器は機能を損し彈藥將に盡きんとし戰友亦兇彈に斃れた。斯かる悲境の戰況下に立ち乍ら氏は尚も七生報國の赤心に燃え最後の奮闘を續けて居たが憎むべき兇彈飛來氏は頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併し氏等の奮戰力闘に依り其の後頭敵を擊退して機關車を確保し闘後の輸送に

至大なる貢献を與ふるに至つた。

氏は至誠一貫の人、今次聖戰に參加するや任務の存する處水火をも辭せず日夜異常の緊張を以て敵中に軍事輸送に任じ而して不時の敵襲に遭ふや鐵道員の本務に鑑み機關車を死守して玉碎するに至つた。眞に是皇軍鐵道兵の本領を全うして遺憾なく一般軍人の模範と謂ふべきである。聖戰の初期に早くも斯る忠誠にして有爲の士を喪ひたるは痛恨哀悼極まりなしと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級　高橋小一郎

小寨村に突如不敵の奇襲を受け決死自動車を燒却して玉碎す

氏は神奈川縣足柄郡眞鶴町の人にして亡父を好藏亡母をキタと云ひ明治三十三年五月二十八日に生れ妻トメとの間に邦雄、喜三雄、定彦及陸郎の四兒を擧げた。資性溫順にして友情厚く事に當り積極熱心にして遂げざれば已まざる氣概を有し六歲の折箱根登山を爲し一同を驚かした事もあつた。大正三年三月眞鶴小學校高等科を卒業して小田原に出で內野醬油釀造家に奉公し常に二宮尊德先生の敎訓を遵奉實踐し店主の賞を受けし事屢々であつた。大正九年十二月徵兵として折衝輜重兵大隊に入營し熱心勉勵翌十年十月喇叭手を命ぜられ十二月には一等兵に進級し同十一年十一月善行證書を附與せられて滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年七月應召兵站自動車隊大島部隊矢島中隊に屬し中隊傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月上旬北支に到着し直ちに豐臺北平南口北柳樹林附近次で九月には南口懷來宣化附近の補給業務に從事せしが此の間氏は中小隊間の連絡に克く積極活躍し以て中隊長の意圖の如く部下各小隊を行動せしむることを得せしめた。

九月二十一日所屬隊は宣化を出發同日蔚縣に着し彈藥糧秣を積載して二十四日夕長城線附近靈邱の南方八里小寨村に到着して三浦部隊に之を交付し其の夜は同村附近に露營した。此の頃第一線は戰況刻々急を告げしを以て中隊は至急歸還し靈邱より新銳の步兵部隊を前線に增加すべく其の兵力輸送の任務を受け二十五日早朝行軍序列を整へ午前九時靈邱に向ひ同地を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き寒氣身に泌む朝であつた。露營地を後にして進むこと二粁其の先頭谷間の道に差懸るや往路此の附近には全く敵影を見ざりしに拘らず敵は我が輜重の行動を察知してか昨夜の雨を衝いて竊かに遠く後方に迂回せるものの如く午前九時十五分俄然敵と遭遇するに至つた。依て部隊は直ちに之に應戰したが敵は追擊砲重輕機關銃を有する正規軍にして千五百を下らざる大部隊なるに我は新庄中佐以下僅かに百七十六名殊に其の大部分は輜重兵である。加之敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及兩側の三方面より攻擊し來り我は忽ち全く敵の重圍に陷るに至つた。斯かる狀況の下氏は終始中隊長と行動を共にし其の命令意圖の傳達に活躍中午後零時二十分頃中隊本部直後より敵機關銃の急射を受くるや氏は機を失せず之と應戰し敵彈雨飛の下沈着克く每發必中の射擊を爲して敵を制壓し聽て中

隊は愈々血路を開いて三浦部隊に合せんとし中隊長は其の直前敵彈の爲破損し運行不能に陷りたる自動車を敵手に委せざる爲燒却するに決したが此等自動車の附近は敵彈雹霰の如く飛來して容易に近づき得る業ではなかつた。依つて寺村伍長を長とする決死隊を編成せるに氏は直ちに志願して之に加はり篠つく雨の如き敵彈を物ともせず駈け廻りて或は携行燃料を用ひ或は油槽の蓋を脱して火を放ち所命の如く多數の自動車を燒却して其の重任を果したるも午後零時四十分頃無念頭部に盲貫銃創を受け自動車と運命を共に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の決死奮鬪と尊き犧牲とにより寡兵克く衆敵を支へ且自動車を敵手に委することなく間もなく其の包圍線を突破し三浦部隊に合することを得た。

氏今次聖戰に從ふや選ばれて中隊長の傳令となり勞苦危險を顧みず積極忠實不眠不休の活躍を續けて中隊長を輔佐し克く近代輜重の眞價を發揮せしめしのみならず偶々寡兵衆敵と遭遇し惡戰苦鬪危機迫るや彈雨の下志願して決死燒却の重任を果した。壯烈實に斯くの如きは一身を君國に捧げ斃れて後已まんとせる靈忠至誠の發露にして正に皇軍輜重の鑑と謂ふべきである。參戰幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛恨盡きざるも氏が奮鬪玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は後世不朽に武人の華として讃はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日輜重兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　田中嘉雄

腹部貫通の重傷を負ひながら尙任務に邁進し遂に羅店鎭郊外に殉る

氏は高知縣安養郡北川村の人にして父を藤次母を安と云ひ明治四十三年五月十三日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして氣慨に富み事に從ふや熱心勉勵克く責任を重んじ人に接しては誠實謙讓諸人の愛敬を受けて居た。大正十四年三月北川小學校高等科を卒業後直ちに高知縣立安藝中學校へ入學し熱心勉學して居たが家庭の都合に依り第四學年修了後中途退學し巡査を志願して兵庫縣巡査を拜命した。而して昭和五年徵兵檢査の結果補充兵輜重兵特務兵に編入せられ引續き警察勤務に精勵し昭和十年には同縣巡査特選隊員として拔擢せられ昭和十二年八月巡査部長に昇進した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召山室部隊本部に編入せられ大行李馭兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は間もなく上海戰線の一角に到着し我が第一線部隊は優勢なる敵を擊破しつつ羅店鎭方面に對し戰果を擴張した。就中第一線の急先鋒たりし永津部隊は息つく暇もなく水田中に壯烈なる白兵戰を交へ猛進又猛進八月二十八日正午には羅店鎭近傍の要點を占領し後續部隊も續々到着し羅店鎭總攻擊の諸準備を整へた。氏の所屬大行李も部隊本部の推進に伴ひ敵彈を冒し糧秣其の他の器材を運搬し諸給與に支障なからしめ又馬匹の愛護飼育に全幅の注意を拂ひ常に積極勇敢に馭兵の本分を遂行した。然るに氏等の前進地域は敵の敗殘部隊隨所に横行しありし爲氏等も亦日夜に亘る直接警戒の勤務に服し其の勞容易ならざるものがあつた。九月三日所屬部隊本部は羅店鎭の北方部落たる周家村附近に位置して居たが氏は當日和泉少尉の指揮を以て貴縣灣方向の補給所に赴きて糧秣を積載し揚家宅蘇家宅を經由し周家村に向ひ歸還すべく前

進中揚家宅附近にさしかかつたが此の時突如同村の東南方部落猛家宅方向より機關銃を有する優勢なる後方擾亂の部隊現はれ氏等の部隊を目がけて猛射を浴びせて來た。不幸其の際氏は敵彈の爲腹部貫通の銃創を受けたが豪膽にして責任觀念に燃ゆる氏は自ら手當を施し苦痛を忍びつつも一語も訴へず默々として尙も邁進し殿者の本分を盡して周家村に程近き蘇家宅に到着せしが急性腹膜炎を併發し午後五時四十分頃從容として護國の華と散つた。江南の平野は風蕭々として吹き渡り我が第一線方面には或は遠く或は近く銃砲聲が斷續して居た。大行李長以下は氏の尊き遺骸を取り圍み昨日迄も今日迄も默々として所屬部隊の任務遂行の爲に献身的の努力を捧げ而も一言私事に及ばざる氏の莊嚴なる臨終に唯暗然として深く其の冥福を祈り續けて居た。

氏や夙に報國の赤誠燃ゆるが如く今次聖戰に參加するや一意君國の爲に一身を捧げて餘念なく幾多のクリーク及泥濘の惡路を突破し又彈丸雨飛の下克く馬匹を鎭靜愛護しつつ部隊給養の爲糧秣の補給を圓滑ならしめ以て殿者の任務を完遂した。而して未だ正規の軍隊教育をも受けあらざる氏が斯くも軍人精神に透徹せるは眞に皇軍輜重の誇とも謂ふべく氏が平素修養の程も偲ばれて床しき極みであつた。今や參戰幾何もなく斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も士の戰場に臨むや素より生還を期せず其の尊き犧牲は將兵及馬匹の戰力維持に大なる貢献を致したる功績と共に天晴れ皇軍戰史に牢記せられて芳名は千載に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　辻出演一

優秀なる觀測手率先重任を遂行して團河村に散る

氏は奈良縣生駒郡生駒町の人にして亡父を久正母をサトと云ひ大正五年八月二十三日に生れ未だ獨身でめつた。責性温順孝心深く事に當り勤勉にして責任觀念旺盛であつた。昭和六年三月生駒小學校高等科を卒業し引續き郡山中學校に入校七年八月父死亡の爲中途退學し其の後大阪市古村工場に勤務し入營時に至つた。昭和十一年十二月徴兵として平壤歩兵懸隊に入營歩兵砲隊に編入爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして三月には上等兵候補者となり且中隊初年兵觀測手三名中の一人に選ばれ專念修業に努め其の技倆は優秀であつた。

支那事變起るや鯉登部隊佐内歩兵砲隊に屬し戰砲隊第一小隊觀測手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。而して北支に到着し七月二十六日には郎坊の戰鬪に參加し翌二十七日所屬部隊は午後一時三十分黄村を出發し南苑に向つて前進した。然るに途中行宮附近に敵あるを知り午後三時三十分先づ此の敵を攻撃すべく行宮に向ひ攻撃前進を開始した。敵は土壁及墓地等有利なる地形地物を利用し銃眼掩蓋等を堅固に構築し重輕機關銃迫撃砲等を配備し頑强に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく而も當日は炎熱百四十度に達して灼くが如く加ふるに丈餘の高粱連續繁茂して我が戰鬪行動は頗る困難であつた。其の時所屬小隊は第一線歩兵大隊に協力を命ぜられ陣地を占領するや氏は機を逸せず觀測所を設置し迅速且正確に敵情を偵察して射撃諸元を測定報告し以て小隊の射撃を有效ならしめ戰鬪當初第一線大隊の展開並に其の前進を容易ならしめた。爾後第一線歩兵の前進に伴ひ小隊は前方に陣地變換を命ぜらるゝや其の陣地偵察の爲氏は小隊長と共に最先頭にありて前進せしが敵陣地に近接するに從ひ敵は一層烈しく機關銃迫撃砲彈を浴びせ

来り小隊長は遂に負傷するに至りしも氏は之に屈せず「小隊長殿傷は浅いから大丈夫ですしつかりして下さい、辻出は先に行つて中隊長殿と連絡をとり陣地を偵察します」と涙を呑み小隊長を後にして猛火の中を急進し中隊長の許に至り先づ小隊の情況殊に小隊長の負傷を報告した。此の時氏は小隊長より迅速に観測所の設置を命ぜられ直ちに敵情を捜索して射撃諸元を測定し小隊砲車の到着を待つた。間もなく小隊は前進し来り陣地進入を終るや氏の測定諸元により直ちに射撃を開始し機を失せず歩兵の攻撃に協力することを得た。軈て第二小隊亦陣地を占領するや之と直ちに連絡すべく氏は現位置より移動せんとせし際無念敵弾頭部を貫通し其の場に倒れた。氏は收容せられて衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく黄村より天津に輸送中七月二十九日遂に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏家に在るや孝子、其の軍隊に入るや良兵今次戰陣に臨むや砲隊の最も重要且困難なる観測手として彈雨の下沈着勇敢克く平素の優秀なる手腕を發揮し砲の威力を十分に發揚せしめて遺憾なかつた。

實にかくの如きは観測手たる重任の存する所忠孝一道家を忘れ身を忘れ驚るゝまで其の任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。参戰日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも氏が奮戰玉砕して以て開戰劈頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尚も皇國を守護し一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中西一夫

忠誠豪膽の傳令馬落坡の難戰に重責を完うし護國の華と散る

氏は兵庫縣摂保郡御津村の人にして父を辰之助母をこずゑと云ひ大正四年十月十五日に生れ未だ獨身であつた。性温厚質實にして孝心深く人に接するや明朗圓滿、事に當るや責任觀念厚く正義を愛好し常に修養を怠らず模範青年として其の將來を囑目されて居た。昭和五年三月御津小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業に從事する傍同村坪田醤油株式會社に職工として約二ヶ年間勤續し後志す所ありて大阪に出でて勞働し入營時に及んだ。昭和十一年一月徴兵として姫路歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月沼田部隊山本大隊本部傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進し八月下旬四當口附近の戰闘には第四中隊との連絡を擔當し九月上旬より の馬廠本陣地の攻撃に於ては十日午後九時挑家庄北側に於て軍旗に訣別して同夜十一時丁莊に向ひ勇躍前進を起した。翌朝午前四時乃至五時の間に第一中隊は丁莊の東南側より又第三中隊は丁莊の背後より攻撃を開始した。敵は之を察知して各種銃砲を以て亂射亂撃を浴びせて來たが我が第一線中隊は彈雨を冒して水濠を躍り越え喊聲諸共果敢なる突撃を決行して敵陣地を占領し續いて西部丁莊に戰果を擴張した。氏は此の際第三中隊との連絡を擔當し突撃に方りては第三中隊と共に突入し敵陣地の一角を占領するや敗殘兵各所に蝟集しある中を豪膽にも連絡の南部上等兵と共に之を突破し速かに大隊

本部に歸還して狀況を大隊長に報告した。尙第三中隊が西部丁莊奪取後更に南方の敵を攻擊するに當りては南方水濠の線或は高粱畑の殘敵より絶始狙擊を受けしに拘はらず連絡長三國伍長を輔佐し平然として彈雨を冒し中隊間の連絡を確保した。

所屬部隊は其の後豆店に進出し滄州本陣地の總攻擊の爲待機中であつたが九月二十一日夜襲を以て馬落坡の堅壘を奪取すべき命令を受け所屬大隊は第一線部隊として同日午後八時半頃部隊長の悲壯なる訓示を受け軍旗に訣別し皇居を遙拜し水盃を擧げて豆店を出發した。下弦の月は中天に懸り秋風蕭々として高粱の葉を波打たせ決死の白襷隊は步一步と敵陣地に近づいた。之を察知せる敵の第一線部隊は一齊に猛射を浴びせて來た。所屬大隊の進路は泥濘膝を沒し行動困難であつた。之が爲所屬大隊と部隊本部との連絡は全く杜絶した。銃砲聲熾んなる中に我が第一線には時々喊聲が聞えて居た。是敵の第一線陣地を突破し今や第二線陣地に向ひ肉薄中なのであつた。然れども敵陣地前には大なる水濠ありて障碍をなし又對岸には鐵條網をめぐらし且敵陣地は恰も我を包圍しある關係に在りて篠つく雨の如く猛射を浴びせ來たり遺憾ながら我が第一線の死傷續出し玆に突擊は頓挫した。敵は得たりと屢々側方より逆襲を反覆し時には大隊長以下自ら銃を執り應戰するの苦境に陷つた。氏は此の間三國伍長と共に猛火と泥濘を冒し部隊本部間を往復して連絡を確保した。二十二日午後二時部隊長より「最前線の情況を調査報告すると共に敵陣地砲擊の爲友軍第一線の戰線を標示せよ」との命令が下つた。氏は三國伍長を護衛し難局を突破し躍進又匍匐遂に所屬大隊本部に之を傳達し完全に其の任務を完うした。氏は可兒大隊副官の當番兵であつたが部隊本部より辛ふじて數名分の辨當を携へて歸來した。戰友等は「早く伏せ」と叫び氏を壕內に引ずり込み「無事でよかつた」と胸なで下ろし且氏の豪膽さに將兵は涙を以て迎えてくれた。折しも午後七時、大隊副官も今銃を執つて戰鬪中であつた。副官殿！　食事して下さい。射擊は自分が代りますと辨當を渡して一彈を發射した。折しもあれ憎むべき一彈飛來！　氏は頭部に貫通銃創を受け「やられた」の一語を叫んで人事不省となつた。副官は「中西！傷は淺いぞ確かりせい！　と叫んだが哀れや答はなかつた。傍なる軍醫は顏曇らして一語も發しなかつた。同夜午前零時四十分一語だに發し得ざりし氏は夢か現か「萬歲」の一語を拳切れ〳〵に口から漏らし顏面には微笑さへ漂はせて息絶えた。戰友等は合掌して「中西！　自分等も後から行くぞ」と瞼をしばだゝき玉の如き涙をこぼして居た。

氏は至誠一貫職分の前には水火をも辭せざる人であつた。今次聖戰に參加するや選ばれて大隊本部指揮班員となり各戰難局を突破し旺盛なる氣力卓越せる體力を以て克く其の重任を果し而も己が事へし上官の爲荷厄介となる辨當を携行し九死の地を突破したる心根に至りては至誠神に通ずるものと謂はねばならぬ。あゝ斯かる忠誠豪膽の士を喪ふ痛恨哀悼極まりなしと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝き其の芳名は千古に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中西茂治

忠勇なる小隊長傳令涿州會戰に奮闘し惜しくも靈壽附近尹凡同に殪る

氏は和歌山縣伊都郡戀野村の人にして父を松太郎母をスエノと云ひ大正五年七月十日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして孝心深く又弟妹を愛撫誘掖し事に當るや熱誠眞摯遂げずんば已まざるの氣概を有し模範青年として世人の賞讃を受けて居た。昭和六年三月拔群の成績を以て戀野小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて家業たる農業を手傳ひ乍ら青年學校へ通學し同十一年三月同校本科の課程を修了し引續き入營時まで同校研究科に學び常に顯著なる成績を擧げて居た。氏は弟妹思ひにて是非弟妹は上級學校に入學せしめたしとて父母へも懇願して居た。同十一年十二月徵兵として龍山歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵し常に良成績を擧げて居た。

北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月中旬森本部隊平田中隊に編入せられ小隊長傳令要員として同月下旬勇躍北寧線方面に出動し唐山天津南苑等の警備を經て九月上旬には良鄕附近に待機し爾後の戰鬪を準備して居た。涿州會戰の戰備漸く熟するや所屬部隊は九月十四日夜半良鄕を出發し同月十六日午前八時半靈店鎭附近敵陣地の北方約千米の高粱畑の線に攻擊準備を整へた。敵は部落の北端より東方鐵道線路にかけ堅固に陣地を占領して居た。此の日天氣快晴暑熱灼くが如く特に黃塵に苦しんだが氏は志氣旺盛勇敢に活躍して小隊長の指揮掌握を容易ならしめた。所屬中隊は午前十一時頃攻擊前進に移つたが友軍飛行機は爆音勇ましく上空に飛び敵彈亦切りに氏等の頭上を掠めて飛び戰況は刻一刻活氣を呈して來た。午後一時頃より敵迫擊砲彈は氏等の身邊に蝟集炸裂し土砂爆煙渦卷き死傷續出するに至つた。豪膽沈勇なる氏は毫も之に屈する事なく彈雨を冒して傳令の重任を全うし午後二時頃敵前百五十米に達した。敵は三方面より十字の猛射を浴びせ來り彼我の銃砲聲喧噪を極め號令も命令も徹底せざるに至つた。氏は萬死を賭して雨下する敵彈下を馳驅して貴重の命令號令を傳達し午後四時小隊長と共に敵陣地に突入して敵を擊破し靈店鎭部落の西南地區を占領し之を確保した。翌十七日には更に破竹の勢を以て琉璃河鎭部落附近の敵を粉碎して鼓に涿州會戰の終結を告げ赫々たる武勳を奏した。

所屬部隊は其の後連日連夜の强行軍を以て敗敵を猛追し滹沱河畔に於ける敵陣地帶の一要衝たる靈壽附近に進出した。敵は京漢線方面に於ける最後の抵抗線として靈壽附近の防衛には特に意を用ゐ北崗上及其の南方の尹凡同高地に堅固なる陣地を構築して居た。北崗上附近の敵陣地は部落の圍壁を利用せるは勿論部落の西北正面及南方高地を利用して斜射側射縱射の設備を完了し多數の重輕機關銃及迫擊砲を配置し手ぐすね引いて待ち構へて居た。所屬中隊は大隊の右第一線となり北崗上の東北角の敵陣地に對し展開し午前十時頃より愈々攻擊に移つた。果然敵は銃口火を吐いて篠つく雨の如く猛射を浴びせ迫擊砲彈亦釣瓶擊ちに集中して來た。第一線諸隊は友軍砲兵の支援射擊に膚接して逐次敵陣地に近迫し午前十一時稍過ぎ遂に果敢なる突擊を敢行した。氏は此の際も勇敢に傳令の重任を果したる後小隊長と共に圍壁の東北角に突入し敵の側背に迫り敵の指揮官を射殺せんとする折しもあれ憎むべき一彈飛來頸部に貫通銃創を受け其の場に打倒れた。然れども氏等の勇敢なる行動に依り間もなく敵を擊破して壘上高く日章旗をひるがへすを得た。氏は其の後野戰病院に收容せられ手厚き治療を受けたが同月十五日惜しくも華北戰線の華と散つた。

氏は孝悌に厚く而も報國の赤誠五體に溢れ往く所悉く諸人の敬愛を受けて居た。今次聖戰に參加するや選ばれて小隊長傳令となり慧敏豪膽彈雨の中に諸任務を完遂し以て小隊長の戰鬪指揮を輔佐せる所至大であつた。而も北崗上の一戰には疾風迅雷逸早く圍壁に突入して小隊の進路を開き肉彈となりて接戰中遂に兇彈に打倒れた。忠烈眞に鬼神を哭かしむべく天晴れ皇軍精兵の鑑と稱すべきであつた。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　內藤義忠

勇敢なる機關銃手皇壽附近の攻擊に決死奮鬪戰勝の端を拓く

氏は島根縣飯石郡來島村の人にして父を虎一母をトヨノと云ひ大正五年六月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして品行方正思慮亦周密であつた。又事に當るや責任觀念厚く不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和六年三月來島小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひながら同地の靑年學校へ通學し昭和十一年三月其の課程を修了した。氏は在學間成績優等にして尋常小學校卒業時には飯石郡敎育會長より表彰せられ又靑年學校修了時には同校長より善行賞を附與せられた。昭和十一年十二月徵兵として龍山步兵聯隊へ入營し第二機關銃中隊へ編入せられ克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや間もなく森本部隊家森機關銃中隊に編入せられ逸早く北支に出動したが不幸虫樣突起炎に罹り天津病院に入院し脾肉の歎を呻ちつつ靜養して居た。九月十八日全快退院となるや勇躍所屬部隊へ追及し第八分隊二番銃手として保定南方への追擊戰鬪に參加した。氏は退院後幾日も經ざる身を以て或は警戒に或は敵情偵察に活躍し九月二十五日沈家佐附近の戰鬪に於ては氏の分隊は抱陽山方向より猛射を受けたるに拘はらず克く分隊長を輔佐し他の銃手に協力して有効適切なる猛射を敵に浴びせて之を壓倒し第一線部隊の戰鬪を有利に進展せしめた。

皇軍は敵が多年防禦工事を增强しありし工業都市たる石家莊正定を攻略すべく十月初めより行動を起した。所屬森本部隊は此の企圖に基き十月七日早朝より行動を起し先づ敵の前進陣地の一部たる石家莊の西北方靈壽附近の陣地に向ひ攻擊を開始した。敵は其の第一線陣地を北崗上附近に設け頑强に抵抗したが所屬中隊は迅速果敢に進出し我が第一線中隊に適切なる支援を與へ激戰の後之を奪取するを得た。然るに第二線陣地は尹凡同の高地帶に在りて頗る頑强に防戰し我が砲兵及步兵砲は第一線陣地占領後の陣地變換容易ならずして我が第一線諸隊は全く其の協力を缺くに至つた。敵は尹凡同部落の圍壁に多數の機關銃を配置し又其の圍壁前には堅固なる散兵壕を設け我が第一線の近づくを待ち一齊に火蓋を切つた。小銃機關銃はバリバリ火を吐き迫擊砲は豫て周到なる射擊準備をしたものと覺しく氏等の身邊に物凄く落下炸裂し土砂爆煙に渦卷き遺憾ながら我が第一線は爾後の攻擊前進頗る困難となりしのみならず射擊さへも不能となつた。

此の時氏の小隊は憤然として敵前百五十米に挺進し我が第一線を猛射中の敵機關銃を制壓せんと必死の奮戰を續くるうち射手奥村上等兵は右大腿部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。斯くと見たる氏は獨斷射手となつて銃把を握つた。敵の銃砲火は氏の小隊目がけて集中射を浴びせて來た。激戰正に最高潮に達した。氏は正確機敏に敵を壓倒しつつあつたが午後四時三十五分頃憎むべき一彈飛來し氏は左頰部に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。然れども氏等の勇戰奮鬪に依り我が砲兵及歩兵砲は逐次陣地變換を完了して猛火力を以て頑敵を壓倒震駭し遂に所屬大隊の突擊を決行し尹凡同の敵陣地を奪取するを得た。

氏は志操正順にして克く上官の教訓を迎へ劍電彈雨の中と雖も任務に邁進するの士にして上下の信頼特に厚かつた。今次聖戰に參加するや病後にも拘はらず克く困苦缺乏に堪え疾風迅雷の追擊戰に參加し殊に京漢線西部山岳地帶に所在の殘敵を粉碎しつつ一意南進遂に要衝靈壽附近の激戰に其の職分を完遂して玉碎した。寔に皇軍精兵の龜鑑と謂ふべきである。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは痛惜措く能はずと雖も氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中谷源三

良兵良民の範、輕機射手として勇戰奮鬪揚子崗の華と散る

氏は三重縣度會郡七保村の人にして父を幸松母をときゑと云ひ大正五年一月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚寡言力行の人にして常に默々として動勞し而も公共の觀念强く又質素儉約にして小學校時代よりの貯金實に三百十四圓に達して居た。氏は今次出征に際し父に「自分戰死せば貯金の內金百圓を居村在鄕軍人分會に寄附し殘りの二百十四圓は國防獻金する事」を遺言し父は氏戰死の報に接するや其の通り寄附獻金したのであつた。氏は昭和五年三月七保村第一小學校高等科を卒業し引續き七保村第一青年訓練所に入り同八年三月同所後期第三學年を卒業して其の後農業に從事し入營時に至つた。昭和十一年十二月徵兵として朝鮮大邱歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し學術の成績優秀中隊の模範兵として上下の信望厚かつた。

支那事變起るや鈴木部隊第一中隊に屬し第三小隊第二分隊輕機關銃射手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し間もなく七月二十七日團河村の戰鬪に際しては所屬中隊は大隊の豫備隊であつたが敵兵五六十名我が聯隊砲に向ひ襲撃し來るや中隊は直ちに之に向つて攻撃し其の際氏は分隊長指揮下に勇敢に奮鬪して之を撃退し翌二十八日南苑の戰鬪に際しては所屬中隊は依然大隊の豫備隊たりしが大隊が敵の第一線を突破するや中隊は第一線に增加し氏は其の中央第一線小隊の火線分隊內にありて勇敢に追撃前進し適時適切なる射撃を實施し特に敵兵營の中央附近に進出後は敵司令部附近に向つて敗走する敵を猛射して大なる損害を與へた。其の後北平周邊の掃蕩及長辛店附近集中掩護間氏は不眠不休斥候、警戒勤務及陣地構築等に積極的に活躍し克く分隊長を輔佐して中隊の任務達成を容易ならしめた。

八月二十日我が軍は揚子崗東西の線に陣地を占領せる二個師の敵に對し攻撃を實施し鈴木部隊は其の中央揚子崗附近の敵を攻撃することゝなつた。此の時所屬中隊は午前二時良郷出發闇を衝いて前進中午前八時四十分尖兵は敵の第一線より猛射を受くるに至つた。中隊は直ちに大隊の右第一線となり展開して攻撃前進を開始した。敵は河の右岸高地及揚子崗附近に堅固に陣地を構築し且敵陣地前には四流の河川があり我が攻撃は容易ではなかつた。中隊が攻撃前進を開始するや待ち構へた敵は一齊に猛射を開始し殊に中隊の右側面よりする敵迫撃砲機關銃火は猛烈であつたが中隊は勇進又勇進し腰を沒するばかりの急流三流まで渡河して前進した。此の際氏は分隊長指揮下に躍進に躍進を續け其の停止に際しては沈着克く優秀なる射撃技倆を發揮して敵を制壓しかくして遂に敵前三四百米に達することを得た。然るに揚子崗村端に敵の重輕機關銃不意に現出して我に猛射を浴びせ來り之が爲小隊の前進甚だ困難となるや氏は其の身の危險を顧みることなく機を失せず之に對し必死となりて其の火力を最高度に發揚して之を制壓し小隊の前進誘發に努めて居たが恰も午後四時二十分前面より輕機關銃火を蒙り無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。氏は戰死前分隊長に「私が死んだら戰死した樣子だけ家に知らして下さい」と賴んでゐた。其の言葉は平凡なるも氏の胸奥故郷に飾るべき赫々の武勳を樹て君國に殉ぜんとせる堅き決意ありしを窺ひ知らるゝのである。

氏郷にあつては默々として勤勉身を持する質素勤儉、其の小學時代よりの貯金は擧げて寄附獻金を遺言し軍隊に入りては中隊の模範兵と謂はれ戰陣に臨むや積極勇敢萬難萬苦を排し輕機射手たる重責を完うして遺憾なかつた。畢竟一身を君國に捧げ全力を傾倒して偉勳を遺し其の任務に斃れんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして此の至誠忠烈の勇士を喪ひしは眞に痛惜に堪へざる所である。併し士は百戰功なく瓦全を恥づ。氏が揚子崗の一戰に奮戰玉碎して樹てたる拔群の武功は萬世に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は良兵良民の鑑として千古に傳へらるべく、英靈は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途並に遺族の將來に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　中村康興

忠孝兩全の士拒馬河畔に偉勳を樹て惜しくも東釜山追擊戰中空爆に散る

氏は栃木縣下都賀郡家中村の人にして亡父を和一郎母をマサと云ひ大正二年十月一日に生れ未だ獨身であつた。責性眞面目にして快活幼にして父を喪ひ姉妹あるも唯一人の男子として母の愛を一身に蒐め氏亦母に仕へて至孝常に母の笑顏を見るを唯一の樂しみとして居た。氏は亦勤勉にして爲し遂げざれば已まざる氣概を持つてゐた。昭和三年三月家中小學校高等科を卒業其の後は農業に從事し傍青年訓練所に通學し同九年三月其の課程を修了した。昭和九年六月徵兵として龍山步兵聯隊に入營在隊間軍務に精勵特に射撃及劍術の成績優秀にして賞狀を受くること四回に及び同年十二月一等兵に進級し翌十年十二月歸休除隊した。其の後は青年團幹部として團の向上發展に盡瘁し在郷軍人の模範と讃へられてゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊永井中隊に屬し第三小隊第三分隊小銃手として勇躍征途に就いた。其の出征に當り「爆彈三勇士以上の働きをする、決して負けない積りだ」と述べ村民の見送に對し熱烈なる決意を披瀝し其の燃ゆるが如き挨拶は今尙郷閭の語り草となつてゐる。斯くて北支に到着し九月十四日永定河畔胡林南方地區の戰鬪に於ては常に分隊の中堅として勇躍奮鬪し特に東莊に於ては所屬小隊が中隊の左第一線となるや氏は篠つく雨の如き彈雨の下終始沈着正確なる射撃を爲し奮戰以て敵を撃退し引續き之を急追して十五日拒馬河畔に達した。然るに敵は水深胸部に達し而も

急流の拒馬河を陣地前の障碍と爲し對岸に一連の堅固なる陣地を構築し我が渡河に乘じ皇軍を撃滅せんと待構へてゐた。之に對し部隊は十五日此の堅陣を突破すべく敵前强行渡河を敢行するに決するや所屬中隊は最右翼たる第一渡場より午前三時を期し渡河することゝなり第一第二小隊を第一線渡河部隊とし所屬小隊は之が掩護に任ずることゝなつた。愈て豫定の時刻となり所屬小隊は高粱畑を通過して河岸に進出し第一線小隊亦愈々渡河せんとするや對岸の敵は俄然熾烈なる射撃を開始し掩護隊亦敵に猛射を浴びせ玆に忽ち激戰は展開せらるゝに至つた。氏は篠つく雨の如き敵彈を物ともせず分隊長指揮下に沈着剛膽毎發必中の射撃を爲し以て對岸の敵を制壓し遂に第一線小隊の渡河を成功せしむることを得た。依つて所屬小隊は之に續いて渡河するや直ちに當時最も苦境にありし中隊主力の左翼に增加を命ぜられ第一線に進出した。然るに敵は其の右翼據點より兵力の優勢を恃みて數度逆襲し來りしが氏は常に沈着正確なる射撃を以て敵を猛射制壓し好機に乘じ小隊と共に突入格闘して其の都度敵に多大の損害を與へて之を撃退し遂に十六日午前七時には敵の堅陣を奪取した。

其の後九月十八日西義安の敵を撃退し九月二十一日東釜山附近追撃戰中突如敵機三機上空に現はれ中隊は對空射撃部隊として之と交戰し氏は勇敢沈着敵機を射撃中其の投下せる爆彈の破片により頭部に爆創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

因に氏の母は日頃全身の愛を注ぎてかけ換なき氏の戰死の報に接するや靈前に向つて「康御前はよく御國の爲に働いて呉れた。母さんは悲しいけれども本當に嬉しく思ひます、お前の魂は皇軍の武運を護りなさいそれがお前の務めですよ」と生前の氏に諭すが如く斷腸の思ひの中に滅私奉公の赤誠を吐露したのであつた。之實に萬邦無比眞に大和民族の血から出た尊き言葉である。

氏や至孝の人、片時も母を思ふて已まざりしに其の一度召集令狀を受くるや忠孝一道一切の私心を棄て殉忠の決意固く其の戰陣に立つや彈雨の下率先勇敢其の在隊間精進鍛練せる優秀なる武技を發揮し毎戰中隊戰勝の因を爲して遺憾なかつた。然るに聖戰中途空爆の犠牲となりしは洵に痛惜に堪へざるも永定河畔の緒戰以來母の赤誠を繼承して奮戰力闘殉忠以て大孝に換へたる芳名は赫々として家門を飾れる拔群の武功と共に忠孝兩全の士として萬世不朽に傳へらるべく其の不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に老母の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　中口恭一

北滿地局子に不慮の敵襲を受け孤軍奮闘其の本分を盡して玉碎す

氏は和歌山市雑賀崎の人にして父を愛之助亡母をしなと云ひ大正五年二月十九日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして情誼に厚く幼にして慈母に死別し父に事へて孝養を盡し妹を愛撫善導し朋友と交はりて友情に厚く事を行ふや熱心勤勉且義務心旺盛であつた。昭和三年三月雑賀崎尋常小學校を卒業し其の後和歌山市南海晒粉會社に勤務し熱心精勵上下の信賴を受け給料は悉く父に提供して家計を助け又老後の安定を考慮して巨額の保險に加入し又雑賀崎青年會員及同警備

班員として熱誠忠實會員たるの本分を盡し模範青年として推賞されて居た。昭和十二年一月徴兵として和歌山歩兵聯隊へ入營し同年四月滿洲派遣部隊に編入せられ奉天省遼陽警備を經て三江省湯原縣に駐屯し北滿警備の重任に服するに至つた。同地警備間選ばれて軍犬兵として修業したが氏の軍犬に對する慈愛心は恰も子に對する親の情の如く軍犬が疲れたと見ては我が水筒の水を頒け與へ食餌も自ら味ひし後ならでは軍犬に與へぬ程の注意を拂ひ又その訓練は恰も老練なる教師の如く克く軍犬の性格技能の程度を明察し妄りに難きを責めず根氣克く漸進的に訓練を積ませ倦む事を知らなかつた。されば軍犬も絶對氏に服從し極めて良好なる成績を擧ぐるに至つた。斯くて七月中旬より下旬にかけ亮子河附近の討伐に際しては第一小隊第一分隊に屬し討伐に參加したが氏は晝夜に亘り斥候及側方警戒の勤務を命ぜられ熱心豪膽且慧敏に活躍し優秀なる成果を收め所屬小隊の戰鬪に寄與せる處甚だ多かつた。

十月初旬より十一月上旬にかけては軍犬兵として竹蓮鎭附近の警備に就いたが龜井中隊長の指揮下に日夜警備に精勵し警戒に連絡に克く軍犬の全能力を發揮せしめ中隊長の指揮連絡に甚大なる便益を與へた。十一月四日龜井中隊長は三道流に分駐せる和田小隊に糧秣を輸送すべく部下堂垂中尉に部下二十五名を附し支那馬車三十七輛に滿載せる糧秣を護送すべき命令を與へた。氏は此の時池上分隊の小銃手として此の一隊の要員となり二輛の自動貨車に分乘せしめられ午前八時竹蓮鎭を出發した。途中は常と變りもなくなだらかな波狀地を疾走し午前十一時半目的地三道流に到着、無事糧秣を交付し堂垂中尉は歸情其の他の狀況通報の交換を行ひ午後二時頃再び自動貨車に分乘せしめ歸途に就いた。午後二時三十分頃三道流を距る約一里半、地局子の北方約千米の凹地に差しかかりし時前方の丘の上に地局子部落より突如輕機關銃の猛射を受けた。此の地域は守備區域内の事とて斯かる不祥事の起らんとは夢想だもせざりし處であつたが敵匪は前夜此の部落の東北方地局子北と云ふ部落に宿營し氏等の小隊が北方に通過せるを確認するや南方森林の小山を經て地局子本部落の前端を占領し更に同部落の北方本道兩側に在る集團家屋に配兵し其の兵力合せて約二百名各々輕機關銃を要點に配置して待伏せて居たのであつた。敵の集中火を受くるや堂垂中尉は直ちに下車應戰を命じた。氏は敵彈雨飛の下冷靜機敏に本道左側に下車し左側方約五十米の家屋檐端に占據しある敵に猛射を加へ小隊主力の下車を掩護した。本道の兩側よりは各五十米の近距離より又前方約四百米の丘の上より小銃及輕機關銃の十字火を受け惡戰苦鬪四十分間に及び全員相次で傷き斃れ悲愴凄慘名狀すべからざる狀況となつた。氏は其の際無念にも右耳部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。其の後三道流の和田小隊又竹蓮方面より龜井隊の救援到着するに及び匪賊等は雲を霞と何れへか姿を消した。

氏は志操堅確にして克く孝悌の道を守り軍に從ひては一意上官の教訓を迎へて軍務に精勵し以て北滿警備の重任に寄與せる處多かつた。今次聖戰勃發に關連して抗日反滿の不逞匪は共產匪の使嗾を受け相合流して滿洲各地に蜂起蠢動し他面滿ソ國境の情勢は一觸卽發の危機を蔵し氏等の警備は實に聖戰と密接不可分の關係があつたのである。不幸不慮の敵襲に遭ひ衆寡敵せず萬死の中に毅然として奮鬪を續け皇軍將兵の本領を完うして玉碎するに至つた。眞に痛恨哀悼を禁じ得ざるも氏等の尊き犧牲は滿洲國治安の礎石を成し又支那大陸に作戰する皇軍の背後を安定せしめたるもので其の功績は天晴れ皇軍戰史に牢記せられて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　長恒政四

沈着勇敢の擲彈筒手毎回敵の側防火器を制壓して唐官屯に散る

氏は岡山縣眞庭郡川上村の人にして亡父を傳一母を古與と云ひ大正三年十月二十一日に生れ未だ獨身であつた。資性快活にして剛毅勇敢正義の觀念強く又業務に熱心勤勉であつた。昭和四年三月德田小學校高等科を卒業引續き同村青年訓練所に入所同十年一月其の課程を修了し同月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績良好にして翌十一年一月一年歸休として除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊第十一中隊に編入第二小隊第三分隊擲彈筒手として同月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支戰線到着後八月二十日より津浦沿線附近の戰鬪開始せらるるや所屬隊は逐次府君廟白揚樹東五里庄口子の各戰鬪を經て八月二十四日靜海城の攻擊に參加し午後零時三十分入城するに至つた。氏は以上の各戰鬪に何れも參加し此の間小隊長の命により敵の自動火器を索めて擲彈筒攻擊を實施し其の適切有効なる射彈は克く敵を制壓し小隊の戰鬪に大なる貢献を爲した。就中東五里庄の攻擊に際しては最も多く我に危害を加へて我を惱ませる右前方の敵の側防火器を制壓して小隊突擊の動機を作爲し本攻擊奏功の素因を作つた事は偉大なる功績であつた。

九月三日唐官屯附近敵陣地の攻擊に際しては所屬中隊は大隊の右第一線中隊として午後六時三十分より行動を起し夜間敵に近迫して翌拂曉の攻擊準備の位置に就いた。愈々天明となるや我が砲擊は開始せられ氏は右第一線小隊の火線分隊内に在りて唐官屯北方凸角陣地に對し午前八時十分より我が砲彈に膚接しつつ敵火を冒して勇敢に前進し逐次敵に近迫せしが右側方に敵の自動火器現はれ猛威を逞しふし大いに我が前進を妨害するに至つた。之を知つた氏は猛火の下機敏に筒を据へ沈着正確なる射彈を浴びせて忽ち之を撲滅し中隊の前進を容易ならしめた。爾後躍進又躍進して遂に突擊距離まで肉薄するや此の頃敵彈は一層熾烈となりしも更に屈することなくその身の危險を忘れ益々沈着して中隊の攻擊目標たる獨立家屋の敵チェッコ機銃目がけて猛射を加へ之を制壓し午前九時十分愈々突擊命令下るや率先勇敢に突進せしが敵陣地前五十米に於て無念左胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより敵に多大の損害を與へ午前九時十五分には凸角陣地を同九時五十分には唐官屯驛を占領することを得た。

因に氏の母は氏戰死の報に接するや「既に覺悟はして居りましたので只今戰死を聞いてよくやつて呉れたと云ふ以外に何もありません」と健氣に滅私奉公の赤誠を吐露してゐた。

氏の戰陣に臨むや選ばれて擲彈筒手となり彈雨の下勇敢に率先前進し戰鬪慘烈の境にありて沈着適時的確なる射擊を加へ以て皇軍擲彈筒の威力を發揮して遺憾なかつた。實にかくの如きは叙上の如き母の子として一身を君國に捧げて其の重任に斃れんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして津浦沿線に散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり

其の神靈は尚も皇國を守護し一家殊に母の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　中川貞吾

大册河夜襲に勇戰奮鬪敵陣内に玉碎す

氏は栃木縣都賀郡南犬飼村の人にして亡父を幸右衛門母をスイと云ひ大正三年九月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實しかも事に當り勤勉且几帳面にして爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。昭和四年三月南犬飼小學校高等科を卒業其の後東京市神田區虎屋印刷所に勤め入營時に至つた。昭和九年十二月徴兵として滿洲遼陽獨立守備歩兵大隊に入營し熱心勉勵克く警備討伐の任を完うし同十二年三月滿期除隊し事變の功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊猪野中隊に屬し小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十三十四日永定河畔の戰鬪には氏の中隊は部隊の豫備隊として參加し十六日拒馬河畔の戰鬪には第一線渡河部隊たる第五中隊に協力して其の渡河掩護に任じ次で夕刻渡河し續いて暗夜尚前進せしが途中突如敵の射撃を受けた。所屬中隊は大隊命令により直ちに此の敵に對し夜襲を敢行撃退せしが此の際氏は分隊長指揮下に率先敵陣に突入し勇戰奮鬪其の活躍は洵に目覺しきものであつた。

九月二十一日坂西部隊は保定攻略の爲敵を急追して同日夕刻王谷花堡附近大册河の左岸に達した。然るに敵は大册河右岸に長年月を費して堅固に數線の陣地を構築し鐵條網戰車壕を繞らし掩蓋機關銃座を設備し加ふるに大册河は河幅百數十米水深胸を浸する濁流にして敵は此の障碍を利用して我が進撃を阻止せんとしてゐた。此の時所屬中隊は大隊の左第一線として此の敵陣地を夜襲奪取すべき任務を受け直ちに之が準備に着手し其の夜零時紡上部落を出發し河岸に攻撃準備を整へ午前二時三十分恰も十七日の月光を背に浴びつゝ大册河の渡河を開始した。然るに敵は逸早く我が夜襲を察知し死物狂ひに我に猛射を浴びせて來た。しかし氏は之を物ともせず勇敢に濁流を渡り對岸に取り着くや敵陣地まで數十米此の間に鐵條網あり水田あり戰車壕あり正面側面には輕機及掩蓋重機關銃を巧に配備し一層猛烈に射彈を浴びせ來り我が死傷續出するの狀態であつた。此の際氏は敵情地形の偵察を命ぜらるるや雨下する敵彈の下深さ膝以上に及ぶ水田を匍ふ如くして敵陣地に近迫し中隊の進路を偵察して報告した。中隊は其の結果に基き鐵條網を破壞して敵陣地に突入したのであつたが其の際氏は分隊長指揮下に敵陣に突入して勇戰奮鬪當るを幸ひ突き捲りつゝ戰果の擴張に努めありしが其の間惜しくも右腕に貫通銃創を受けた。併し氏は尚も屈せず陣内に格鬪を續けありしに又もや敵の投擲せる手榴彈は眼前に炸裂し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は多數の死傷者を生じたるに拘はらず氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより敵に甚大なる損害を與へ同日午前十一時には完全に敵陣地を奪取することを得た。

氏の戰陣に臨むや常に勇敢殊に大册河畔に於ける夜襲に於ては率先活躍勇戰格鬪皇軍歩兵の本領を發揮し中隊戰勝の因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ斃るゝまで其の任務を遂行せんとせる靈忠至誠の發露にして

正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくして氏の如き勇士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力鬪して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に鄙き芳名は武人の華として千古に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神鑒尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に昇叙せられ青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（H.S.）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　中西仁

勇敢忠誠なる指揮班員馬落坡に奮鬪し軍歌を愛誦して散華す（戰場悲話）

氏は兵庫縣赤穗郡矢野村の人にして父を辰一母をはると云ひ大正五年一月二十四日に生れ未だ獨身であつた。性明朗且溫良着實にして義務心厚く不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和五年三月鄕里の高等小學校を卒業後直ちに兵庫縣立農學校へ入學し同八年三月同校卒業、其の後は大連市西山會臺山屯農和園に就職し其の間支那語學校へ通學し又日本語家庭教師として雇はれて居たが都合に依り同十年九月歸國、同十二年一月姫路步兵聯隊へ入營し幹部候補生として採用せられ誠意軍務に勉勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月沼田部隊米澤中隊へ編入せられ中隊指揮班員となり勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進し八月十四日以來三間房四黨口の戰鬪を經て陳官屯の警備に就き九月五日馬廐本陣地の一角たる丁莊の陣地攻擊には所屬大隊の右第一線中隊に在りて午後十一時行動を起し翌十日未明より攻擊を開始し午前七時には滕庄子を占領した。其の間氏は終始第三小隊との連絡を擔當し敵彈下に克く其の重任を完うし殊に中隊が丁莊の西端に進出するや左側方の高粱内に遮蔽しありし頑敵より猛射を受け中小隊間の連絡は甚だ困難となつたが氏は進んで此の難局に當り克く中隊長の意圖命令を傳達して重任を果し尙滕庄子北端に活躍せる敵の輕機關銃を發見して速に之を報告し突擊時には第三小隊第一分隊内に入り率先果敢なる突擊を敢行する等戰勝の獲得に貢獻せる處甚大であつた。

九月十九日所屬部隊は滄州附近に於ける前進陣地の一部たる豆店を攻擊する爲午前三時雪官屯を出發した。此の時所屬中隊は右第一線部隊に屬し敵陣地に近迫したが敵彈猛烈にして而も其の射彈は正確であつた。氏は之を意とせず迅速確實に傳令勤務の重任を完うし又突擊に方りては中隊長と共に勇躍敵陣地に突入して其の驍名を謳はれた。其の所屬部隊は豆店に於て滄州本陣地攻擊の爲待機中であつた。

九月二十一日滄州本陣地を爆擊せる我か荒鷲も夕空遠く雄姿を沒し殷々たりし我が砲擊も夕闇と共に砲聲絕え時折斥候戰の銃聲のみが聞えて居た。此の時部隊長は一同を集め嚴然として「命に依り本夜午後八時半行動を起し馬落坡の敵陣地を夜襲する。護國の華と散つた戰友達の弔合戰だ！　よいか！　予は忠勇なる諸氏に信賴する。骨は戰友が拾つてくれる。この血染の名譽ある軍旗に恥ぢぬ樣確かりやつてくれ！」と訓示し終つて皇居を遙拜し軍旗に最後の敬禮を行ひ別れの盃をあげた。氏等將兵は感激に胸打たれた。中西！　俺が死んだらお前のよい聲で元氣に「あゝ我が戰友」を歌つて呉れ、それが幾卷の

お經にも勝るぞと誰からともなく叫ばれた。「滿目百里雪白く、廣莫山河風荒れて、枯木に宿る鳥もなく、唯上弦の月青し」云々の軍歌は氏の愛唱する所であつた。今宵は下弦の月中天に懸り秋風蕭々として高粱の葉に波打たせ豫定の時刻到るや中隊は尖兵中隊として動き出した。氏は中隊長に隨ひ依然傳令勤務に服しつゝ前進した。敵前七八百米に達し敵の監視哨たる約廿數名の敵を驅逐して攻擊準備の線に就いた。午後十一時攻擊前進を開始したが泥濘膝を沒する惡地形我が第一線の前進に伴ひ敵の銃砲火は愈々猛烈となり死傷續出するに至つた。かゝる中にも氏は平然として彈雨の中に指揮班長の命に從ひ戰場に活躍して重任を遂行し午前三時半頃敵前約百五十米の水流の北岸に取りついた。この水流は幅五米深さ三米と云ふ大障碍で對岸一帶は蜿蜒たる鐵條網を帶の如く張りまわし其の後ろには數線の塹壕ありて嚴重監視の目が光つて居た。曉かけて敵陣地を占領せんと白襷をかけた決死の米澤中隊、中隊長の軍刀は晉もなく鞘を走れば突擊の合圖、黑影は動き出した。それと察してか對岸からは銃口火を吐いて集中火を浴びせて來た。無念なるかな此の時氏は致命傷を受けて打倒れた。戰友大城戸は足をやられて氏の傍に倒れた。大城戸は「中西！　傷は淺いぞ確かりせよ！」と勵ました。氏は「もう駄目だ。構はず行つてくれ、中西は日本軍人として笑つて死んだと傳へて呉れ」と答へた。「何を言ふか、確かりせよ！　敵は全滅だぞ」「そうか嬉しい、滿目百里雪白く……」と聲も絶え絶えに歌つた。「おう中西！　聞いたぞ、中隊長殿に傳へて置くぞ」と云へばさも滿足氣に微かにも「萬歳」と唱へて息絶えた。戰すんで中隊長は氏の尊き遺骸に佇み乍て双頰を傳はる涙を拳で拂ひ「中西！　よくやつてくれた。折々俺を慰めてくれたあの軍歌を歌うて逝つたか、忘れはせぬぞ。皆よ！　中西や其の他の亡き戰友の爲中西の軍歌を歌つてやつて呉れ」と將兵一同は涙聲にふるへて軍歌を合唱してやつた。

氏は志操堅確、頭腦明敏常に職責を重んじ泥濘汎濫、不眠不休等幾多の辛酸に堪え明朗克く將兵を慰め劍電禪雨の中に率先難局に重任を全うし又流暢なる支那語に依り幾多給養に戰鬪に便益を與へ以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ天晴れ指揮班員の模範たる者であつた。而して臨終に方りては尙凜然皇軍精兵の面目を發揮し一言私事に及ばなかつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや皇軍戰史を飾り芳名は後世に謳はれ不滅の英靈は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　永見朗

勇敢機敏敵の側防機關銃を發見して戰勝の素因を作り遂に清河鎭に散華す

氏は長崎縣長崎市銅座町の人にして父を恭四郎母をミツと云ひ大正五年十月二十日に生れ未だ獨身であつた。責性寡默眞面目にして難事を斷行するの氣概に富んで居た。昭和六年三月東京市第一荏原高等小學を卒業し其の後は商業に志し實姉の婚家に在りて米穀乾物商を見習つて居た。昭和十二年三月徵兵として滿洲獨立步兵聯隊に入營爾來日夜熱心軍務に勉勵し良好の成績を擧げつゝあつたが同年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや千田部隊に編入され機關銃手として七月中旬勇躍出發し長城線古北口の國境を越へ北京東方懷柔附近に應急派兵され待機警備に就いた。此の間所屬部隊は連日連夜不眠不休炎天下百三十度の灼熱を冒して强行軍を續け人馬共に疲勞困憊其の極に達したが氏は常に志氣旺盛有ゆる困難を克服し夜間は至嚴の警戒に任じ終始積極的に活躍して克く其の責務を完うした。

蘆溝橋事件を契機とする北支の風雲は帝國の現地解決不擴大方針に拘らず北支にありし第二十九路軍は益々暴戾なる挑

戰行爲を敢てし遂に我が北支駐屯軍は獨自の行動をとるの已むを得ざる情勢に立至り七月二十七日夜此の旨支那側に通告すると共に聲明を發し翌二十八日拂曉より空陸相呼應して一齊に起ち北京周邊の第二十九軍に對する膺懲戰は開始された。當時千田部隊方面の敵は清河鎭北側より小營西側地區を經て清河鎭附近に亘り堅固に陣地を占領し其の兵力歩兵約四大隊を基幹とするものと判斷された。又此の附近の地形は局部には多少の凹凸起伏あるも所謂北支の大平野にして丈餘の高粱繁茂し運動及通視を妨げ加ふるに豪雨の爲大小の河川は一時に氾濫して平野一帶は泥濘と化し人馬車輛の通過は至難の狀況であつた。此の日所屬部隊は清河鎭附近の敵を攻撃する爲午後一時三十分小營附近に展開した。氏の所屬第二小隊は大隊の左第一線たる第八中隊に配屬され第三分隊三番銃手たる氏は銃手缺兵の爲彈藥箱一箱を背負ひたる儘二番銃手と協力して銃を搬送しつゝ泥濘を冒し敵の狙撃を潛りて機敏に高粱畑を通過し配屬中隊と共に小營西方に向ひ攻撃前進した。而して午後二時半頃小營西南方約四百米の堆土附近に陣地占領を命ぜらるゝや氏は四番銃手と協力し敵彈を冒して勇敢に所命の位置に銃を据へ分隊をして迅速に射撃を開始し得しめた。敵は前方約二百米の凹地前岸上に一連の散兵壕を構築し多くの自動火器を配備し尙迫撃砲を加へて熾烈なる猛火を浴びせて來た。氏は堆土の後方に位置して敵情を監視し時々刻々變化する敵の動靜を分隊長に報告して居たが堆土後方に於ては視界不十分なるを感知した氏は勇敢にも堆土上に進出し身を敵火に暴露して廣く敵情を視察した。然るに忽ち斜右前方約二百米の關帝廟附近に陣地直前の凹地を側射する如く

敵の機關銃配備しあるを發見して分隊長に報告し分隊長は直ちに射向を變換し之に穿貫的の猛火を集中して制壓し爲に爾後に於ける中隊の攻撃前進を大いに容易ならしめた。斯くして中隊は益々敵に接近し彼我の火戰は刻一刻熾烈となつたが氏は依然沈着勇敢に任務を續行して居た。然るに午後四時三十分頃氏は惜しくも敵彈の爲腰部に重傷を負ひ復起つ能ず。聽て收容せられ後送の上野戰病院に於て手厚き醫療を受けたが其の甲斐もなく翌々三十日午前十時惜しくも北支の華と散つた。併し氏等の奮戰に依り第八中隊は前面の敵に大損害を與へ敗退せしめたのであつた。

氏は今次聖戰に參加するや敵彈雨注の下勇敢機敏に活躍し就中自ら進んで身を死地に入れ關帝廟に潜みある敵の側防機關銃を發見し所屬分隊をして偉功を奏するに至らしめ延いて協力中隊戰勝の素因を作るに至た。其の功績は正に拔群と謂うべきである。參戰幾何ならずして斯かる忠烈勇敢の士を喪ひし事は洵に痛恨の至りであるが士は百戰功なく瓦全を耻ぢ一戰玉碎して名を殘すに如かず。氏や清河鎭の一戰に散華せしも拔群の功績は燦として皇軍戰史に飾き芳名は千古に謳はれ不滅の英靈は護國の神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TM）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　仲廣吉

敵陣地直前逆襲に對し奮戰之を制し南范の陣前に散る

氏は和歌山縣東牟婁郡七川村の人にして父を恒一亡母をてるゑと云ひ大正五年十月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順寡言孝心深く事に當り不屈不撓默々實行の人であつた。昭和四年三月七川尋常小學校を卒業し引續き七川青年學校

に入り同九年三月同校卒業其の後家業に従事し昭和十一年十二月徴兵として平壌歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優良にして翌十二年三月上等兵候補者に選ばれ專心修業中であつた。

支那事變起るや輕登部隊小橋中隊に屬し輕機關銃彈藥手として勇躍征途に就いた。其の際家郷に寄せたる書面に「どうで機關銃は一番第一線だから一番目標になるそうですから今度の戰爭には生きて歸ることは何うかと思ひますから此の上は身を捧げ一意君國の爲郷土の爲且東洋平和の爲盡す考です。どうぞ何も心配せぬ樣にして下さい又家内一同に喜ばせたいと思ふて覺悟してゐます」とあり又「此の身は國家に捧げし身だから君國の爲東洋平和の爲且郷土の爲息の續く限り盡す覺悟です」とあり一死奮戰の牢固たる覺悟を披瀝してゐた。かくて所屬部隊は七月中旬北支に到着するや同月二十六日郎坊の戰鬪に參加し翌二十七日團河村の戰鬪に氏の中隊は第二線たりしを以て直接戰はざりしも後方も前線同樣雨下する敵彈に曝されつつ勇敢に前進し勃々たる勇心を押へながら時期の到來を待ち夜に入つた。

翌二十八日所屬部隊は南苑攻擊の爲午前五時より行動を起し拂曉までに攻擊準備を整へ午前八時三十分より戰鬪を開始した。敵は高さ五米の土壁に據り幅五米深さ三米の水濠を繞らし堅固に陣地を占領して頑强に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく當日は前日同樣無風にして氣溫百四十度に達し炎熱灼くが如くしかも渴すれど水はなく加之丈餘の高粱連續繁茂して我が戰鬪行動は頗る困難であつた。中隊攻擊前進に移るや所屬小隊は當初大隊の豫備隊として高粱畑中をしかも敵彈は雨の如く注ぎ來る中を第一線に跟隨して前進又前進し遂に敵前五六十米の地點に進出して側方を警戒しつつありしが其の際氏は左方向より敵が逆襲し來るを發見直ちに之を分隊長に報告し分隊は機を失せず之に對し射擊を開始した。氏は迅速に彈藥補充を爲し輕機の射擊効力を最高度に發揚せしめ遂に敵は停止するに至つた。而して機熟し愈々小隊突擊を起すや氏は分隊長指揮下に勇敢に劍を揮つて突進せしが其の途中敵前僅かに十米の地點に於て惜しくも胸部に盲貫銃創を受け「やられた」と叫び其の場に倒れた。氏はこれまでなりと思ひしか東の方を向き　天皇陛下の萬歳を奉唱したが再び起つ能はず蹌て收容せられ衞生部員の手厚き看護により一時元氣を回復せしも遂に醫療の甲斐もなく黄村より天津に輸送途中七月三十一日惜しくも護國の華と散つた。しかし中隊は氏等の奮戰により午後一時さしも頑强なりし敵に多大の損害を與へ遂に南苑の敵陣及兵營を奪取することを得た。

氏郷に在るや孝子にして寡言實行の人其の戰陣に臨むや不屈不撓有ゆる困難を克服し彈雨の下彈藥補充に突擊に率先勇敢活躍し其の本分を完うして遺憾なかつた。實にかくの如きは出陣時決意披瀝の如く忠孝一道一身を君國に捧げ力の續く限り其の任務に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして河北の野に散りしは洵に痛惜極まりなき も奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國の前途を守護すると共に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　中井勝義

率先勇敢彈藥補充の任を完うして行宮の陣前に散る

氏は香川縣綾歌郡川津村の人にして父を榮吉母をイサと云ひ明治四十三年九月三日に生れ妻キクヱとの間に未だ子はなかつた。資性率直明朗孝心極めて深く克く弟妹を慈しみ且友情厚く事を爲す忠實勤勉且責任觀念旺盛の人であつた。大正十四年三月川津小學校高等科を卒業引續き川津農業補習學校に入り昭和四年三月同校を首席にて卒業した。小學校卒業時は部落部長として勤勉に付校長より部長賞を附與せられた。昭和六年一月徴兵として丸亀歩兵聯隊に入營在隊間軍務に精勤模範兵であつた。又同七年上海事變には聯隊通信班に編入せられ通信兵として活躍奮闘し其の功により勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。除隊後は渡鮮し同八年四月より朝鮮運送マルホシ仁川支店に勤め同十二年六月仁川沿岸組合に轉職勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召鯉登部隊佐内歩兵砲中隊に編入彈藥小隊彈藥手として同月十二日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し七月二十七日所屬部隊は午後二時黄村出發南苑に向ひ前進した。然るに途中行宮附近に敵あるを知り先づ此の敵を攻撃することゝなつた。敵は土壁及墓地等有利なる地形地物を利用し銃眼掩蓋等を堅固に構築し重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく而も當日は炎熱百四十度に達して灼くが如く加ふるに丈餘の高粱繁茂し我が行動は頗る困難であつた。所屬中隊は第一線の前進に伴ひ攻撃前進し敵前五百米附近に達するや敵は機關銃迫撃砲彈を雨や霰の如く浴びせ來りしが猛火を冒して敵前二百米附近に達して陣地に進入し猛射を開始した。此の時氏は第一小隊に彈藥補充を命ぜらるゝや敵彈雨飛の下毫も之に屈せず炎暑を冒し高粱を分け率先して勇敢に彈藥を搬送し第一小隊の射撃に支障なからしめ爾後第二小隊が亦陣地を占領するや氏は彈藥小隊より該小隊に對する連絡並に彈藥補充路の偵察を命ぜられ勇躍其の任に就き彈雨を冒して第二小隊の位置に復歸し更に彈藥分隊を誘導して其の偵察せる進路を前進中無念頸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより彈藥に顧慮なく砲の最大威力を發揮して第一線歩兵に協力し午後七時十分には行宮の一角を奪取し同七時三十分には全部の敵を撃滅することを得た。

氏家に在りては至孝軍隊に入りては模範兵と謂はれ嚢には上海事變に出征して武功を樹て今次再び戰陣に立つや彈雨の下率先勇敢連絡に誘導に彈藥補充に適時的確に其の任を完うして遺憾なかつた。實にかくの如きは忠孝一道斃るゝまで其の任務に邁進せんとする盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして敵彈に斃れしは洵に痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て樹てたる拔群の功績は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華として傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尚も皇國の前途を守護すると共に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　中村芳雄

輕機射手奮戰數度の逆襲を擊退して西保障に敵る

氏は長野縣上高井郡須坂町の人にして父を袈裟太郎母をいわと云ひ大正三年六月八日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして沈着剛膽而も事に當り熱心忠實且責任觀念旺盛の人であつた。昭和四年三月日瀧小學校高等科を卒業引續き實業補習學校に入り同九年三月同校卒業尙續いて青年訓練所に通所し同十年一月其の課程を修了した。其の間氏は村の青年團役員に推され團の向上發展に盡瘁してゐた。小學校高等二年當時全國小學生成績展覽會に手工品を出品し伏見總裁宮殿下より停等の褒狀を賜はつた。昭和十年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵して翌十一年七月歸休除隊し其の後同十二年一月青年學校指導員に推され居村青年の教導訓育に盡瘁してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遠山部隊第二中隊に編入せられ輕機關銃第一彈藥手として勇躍征途に就いた。其の門出に當り「國の爲散りて花咲く此の身也」と遺書を殘し一死報國の固き決意を披瀝して出陣した。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月中旬南泊附近の戰鬪を初陣とし大石橋涿縣附近の戰鬪に所屬中隊は尖兵中隊となりて前進し次で下胡村の敵陣を攻擊するや一擧之を突破し引續き大石橋の敵を攻擊するや勇戰遂に之を占領し續いて敵の逆襲に對し奮戰以て之を擊退し更に大冊河畔黃村附近の戰鬪に於て所屬小隊は沿村附近に於て優勢なる敵と遭遇したが此の時も氏は勇戰奮鬪之を擊退し爾後保定附近の殘敵掃蕩に任じ十月上旬滹沱河の渡河戰鬪を經て下旬光祿鎭に向つて追擊し其の際該地に集結しありし敵の列車に對し夜襲を敢行敵中に突入奮戰して之を占領した。

十月二十日所屬部隊は西保障附近の敵陣地に對し午前二時より行動を起し二十一日午前四時より其の攻擊を開始した。

此の時所屬小隊は中隊の左第一線となり氏は當日輕機關銃射手として其の最左翼火線分隊内にありて攻擊前進を起した。敵は猛烈なる射擊を我に浴びせ來りしが氏は彈丸雨飛の下之を物ともせず分隊長指揮下に率先して勇敢に滔々たる滹河の寒流に躍り込み其の急流を渡河して對岸に取り着き一擧嶮峻なる河岸の絶壁に攀ぢ登り一意猛烈果敢に前進して遂に西保障西北方高地の一角を占領した。然るに衆を恃める敵は間もなく該高地の西方より逆襲に轉じ我を河中に壓倒殲滅せんと猛進し來つた。早くも之を發見したる氏は優勢なる敵をも懼れず沈着克く之に正確なる猛射を加へて多大の損害を與へ遂に其の企圖を挫折せしむることを得た。然るに敵は之に懲りず逐次優勢なる兵力を以て恰も狂人の如く執拗に再三再四逆襲を反覆し來りしが其の都度最高度の火力を發揚して勇戰奮鬪し敵に甚大なる損害を與へて之を擊退せしが其の際右方高地よりする敵機關銃射擊の爲臍部腰部背部等に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより午前九時には同高地を完全に占領確保し爾後の戰鬪を有利ならしむることを得た。

氏や鄕の中堅居村青年の指導者であつた。而して其の戰陣に臨むや彈雨の下輕機彈藥手として將た又同射手として剛膽沈着常に勇敢に奮戰し克く輕機の威力を發揮して中隊の戰勝に貢獻せし所甚大なるものがあつた。實にかくの如きは出陣時決意披瀝の如く固より生還を期せず一身を君國に捧げて其の任務に斃れんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。聖戰中途氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも氏が奮戰力鬪して以て樹てたる拔群の武功

は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級　中村金次郎

勇敢なる傳令南口攻擊に重任を果して散華す

氏は長崎縣壹岐郡勝本町の人にして父を佐助母をコトと云ひ大正五年二月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性謹直にして積極敢爲の氣概に富み至孝の人であつた。昭和四年三月勝本高等小學校を卒業し其の後は父母を扶けて家業に專念し同十二年三月徵兵として滿洲獨立守備騎兵隊に入營爾來日夜軍務に精勵良好の成績を擧げつゝあつた。

同年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや森澤部隊に編入され細谷隊の機關銃手として同月中旬勇躍出動し長城線古北口の國境を越へ北京東北方懷柔附近に到り待機警備に就いた。此の間所屬部隊は灼熱百三十度の炎天下に連日連夜不眠不休の强行軍を續け人馬共に疲勞困憊其の極に達したが氏は元氣旺盛にして有ゆる困難を克服し馬匹を愛護して行軍を完うしたるのみならず此の間警戒及搜索に任じ克く其の任を遂行した。然るに北支の風雲は愈々險惡となり我が軍の隱忍自重に支那軍は益々增長して暴戾なる挑戰行爲を敢てし遂に我が北支駐屯軍は獨自の行動をとるの已むを得ざる情勢に立到り七月廿七日夜聲明を發し翌二十八日拂曉より空陸相呼應して一齊に起ち北京周邊の第二十九軍に對する膺懲戰は開始された。斯くして我が軍は疾風迅雷的に南苑、淸河鎭及沙河鎭附近の敵を擊壞し僅か一日にして北京周邊の第二十九軍に大打擊を與へた。此の時氏の所屬中隊は高麗營西方小湯山附近に位置し南方に敵を攻擊する酒井兵團の右側を掩護し且北京北方地區の搜索に任じて居たが其の後京綏線方面に在りては閻錫山麾下の大部隊及湯恩伯麾下の中央軍は長城線に向つて進軍し八月十日頃には南口附近にまで進出するに至つた。玆に於て北支皇軍の一部兵團は此の新敵に對し最初の鐵槌を下す事となつた。當時所屬中隊は昌平附近に位置し京綏線方面の敵情搜索に任じて居たが氏は連日連夜搜索及警戒の諸勤務に

服し克く其の重責を完うした。而して十一日我が兵團は天險たる南口附近の敵に對し攻擊を開始し我が第一線步兵部隊は此の日同地東方龍虎臺附近の敵第一線陣地を擊破し續いて南口附近の主陣地に猛攻を加へ夜を徹して交戰翌日に及んだ。十二日朝所屬中隊は森澤支隊長の指揮に屬し德勝口の隘路附近を占領しある敵を攻擊すべく午前九時十五分紅馬村附近を出發し隘路口に向つて前進した。氏は機關銃小隊第一分隊銃手として此の戰鬪に參加した。隘路口附近の敵は高地及部落を據點として堅固に陣地を占領し有力なる砲兵及機關銃を以て其の陣地前に我を擊滅すべく待ち構へて居た。所屬小隊は第一線となり龍門村北方無名部落の北端附近に射擊陣地を占領し射擊を開始した。敵は優勢を恃んで頑强に抵抗したが勇敢にして機敏なる氏は篠つく雨の如き敵彈下に沈着剛膽遺憾なく重機關銃の威力を發揚し逐次敵を制壓し爲に戰鬪は有利に進展するに至つた。午前十一時四十分頃小隊長は敵情に關する重要報告を直接支隊長に提出すべく氏に命じた。氏は敵彈雨飛の下に勇躍危險を冒して支隊長の許に疾驅し仔細に報告を終り再び彈巢地帶を潛つて小隊長の許に向ひ歸還の途に

就いた。斯くて小隊長を距る三百米の所に達せし時無念！頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は今次聖戰に參加するや分隊の中堅となり常に積極的に活躍し殊に戰鬪慘烈を加ふるに從ひ益々沈着し其の剛膽にして勇敢機敏なる活躍は遺憾なく機關銃隊の威力を發揮し延いて小隊戰勝の素因を爲すに至つた。殊に傳令として機を失せず支隊長への報告を完うし支隊爾後の戰鬪指導を有利に導きたる功績は正に拔群と謂うべきである。然るに參戰幾何ならずして此の忠烈勇敢の士を喪ひたるは洵に惜しみて尙餘りある次第である。併し士は百戰功なく瓦全を恥づ。氏や南口の一戰に玉碎せしと雖も其の拔群の功績は芳名と共に赫々として皇軍戰史に輝き不滅の英靈は靖國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日騎兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　上原政義

輕機關銃手負傷するも尙奮戰を續け遂に居庸關に玉碎す

氏は鹿兒島縣姶良郡栗野町の人にして亡父を衣吉母をマサマツと云ひ大正五年十二月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性溫和にして謹直上下の親愛を受けて居た。昭和六年三月栗野高等小學校を卒業し其の後は一家の柱石となり農業に精進し傍青年學校に通ひ四十二年二月研究科を修了し翌月徵兵として滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し選ばれて上等兵候補者となつた。

昭和十二年七月七日北支盧溝橋事件勃發するや間もなく千田部隊に編入され鈴木隊の輕機關銃手として勇躍出動し北支懷柔附近に至つて待機警備に就いた。當時北支の風雲は益々險惡となり皇軍は遂に獨自の行動をとることゝなり七月二十八日より空陸相呼應して一齊に起ち北京周邊の第二十九軍に對する膺懲攻擊を開始した。此の日千田部隊は清河鎭附近に堅固に陣地を占領しある敵を攻擊することゝなつた。此の時所屬中隊は大隊の右第一線となり正午頃より攻擊前進を開始し氏は第一小隊第二分隊の輕機關銃手として參加した。待ち構へた敵は我が攻擊前進と共に一齊に機關銃及迫擊砲の十字火を集中して來たが中隊は一進一止勇敢に攻擊前進を續けた。此の間氏は彈丸雨注の下沈着勇敢に必中の射擊を以て敵を制壓した。斯くして所屬隊は激戰約四時間の後遂に敵の堅陣を突破し大損害を與へて潰走せしめた。其の後所屬部隊は所在の殘敵を掃蕩し萬壽山附近に兵力を集結して爾後の攻擊を準備した。當時蕩恩伯の指揮する有力なる中央軍は京綏線に沿ひて前進し來り八月に入るや長城線を越へて我が側背を衝かんとするの狀況にあつた。玆に於て北支の皇軍は此の新敵を擊破すべく軍を進め所屬部隊は難攻不落を誇る南口附近の險要に據る敵を攻擊すべく八月九日萬壽山を出發し十一日拂曉よりの友軍砲兵の支援射擊の下に攻擊を開始し晝夜激戰の後十二日午後八時遂に之を攻略し息つく暇もなく敵を西北方に急追し十六日には居庸關東南方約一吉米の線に進出した。敵は山岳重壘の天險居庸關附近を堅固に占領し頑强に我が軍を拒止せんとし皇軍は續いて之を攻擊した。此の時所屬中隊は左第一線大隊の右第一線となり居庸關東南方約五百米の騰山高地を占領せる敵を攻擊すべく十七日夜同高地南方約三百米の稜線に進出した。然るに騰山高地上の敵は全く我を瞰制

する陣地に多數の火點を構築して多くの機關銃を配備し十八日天明となるや一齊に射擊を開始し其の火力は熾烈を極めた。我は仰いで戰ふの不利あり加ふるに山岳は霧に蔽はれ砲兵の協力は期待し得なかつたが中隊は敵に猛火を集中して激戰を續けた。斯くして午前九時五十分大隊長より臍山の敵の堅壘を奪取すべき命を受けた。玆に於て中隊長は第一線兩小隊は現位置に各一分隊を殘置して前進掩護に任じ直ちに攻擊前進する事を命じた。氏の分隊は現位置に留まり右小隊を掩護することゝなつたが敵は我が第一線が前進を起すと見るや益々猛火を逞しふして前進を妨害した。中隊は鋭意猛攻を續けたが全く暴露し且岩石質よりなる斜面の攀登は意の如くならず遂に前進困難に陷つた。此の間氏は沈着勇敢に敵の機關銃制壓に努めたが此の頃左方の谷を隔てたる高地上より突如重機關銃の側射を向けられ全く十字火を受くるの苦戰に曝されたが氏は自若として猛射を續け前進掩護に全身の力を傾注しつゝ奮戰中敵の集束彈に依り遂に受傷するに至つた。氣丈の氏は應急手當を爲し頑として後退せず尚も射擊を續行しつゝあつたが敵の一彈は更に頭部を貫通し壯烈なる戰死を遂げた。時に午前十時四十分であつた。併し氏等の奮戰と尊き犧牲に依り中隊は猛攻を續け臍山の堅壘に肉彈突入して之を奪取し山上高く日章旗を翻すに至つた。

氏は今次聖戰に參加するや克く分隊長を輔佐して每次沈着勇敢に輕機關銃の威力を發揮し敵に大損害を與へ中隊の戰勝に貢献する所甚大であつた。特に臍山堅壘の攻略戰には敵彈雨飛の下に身命を顧みず中隊主力の前進掩護に任じ受傷するも不屈不撓斃るゝまで射擊を續けて突擊成功の素因を作爲した其の功績は正に拔群にして軍人の龜鑑とするに足るものである。斯かる忠勇の士を喪ひしは洵に長恨の極みであるが氏の樹てたる赫々たる武勳は燦として皇軍戰史に輝き芳名は萬古に謳はれ不滅の英靈は靖國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TM）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　上野正一

指揮班員京漢線及正太線方面に奮戰し遂に娘子關附近に玉碎す

氏は和歌山市和歌浦の人にして父を常太郎母を歌代と云ひ大正五年一月一日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして思慮周密言動常に敬虔にして而も豪氣果斷の人であつた。昭和六年三月和歌浦小學校高等科を卒業後直ちに和歌山縣立和歌山工業學校染料科に入學し昭和十一年三月同校を卒業し其の後は京都市西陣川島織物所に勤務して居た。氏は在學間相撲部選手として全國中等學校相撲大會にも出場し體力氣力に於て衆に勝れて居た。同十一年十二月徵兵として龍山步兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵し特に銃劍術の成績は優秀にして賞狀及賞品を授與せられた。

北支の風雲愈々急を告ぐるや昭和十二年七月中旬森本部隊佐野中隊に編入せられ中隊指揮班員として勇躍北支へ出動した。斯くて所屬部隊は七月十九日以來北寧線要點の守備に任じ所屬中隊は天津郎坊蘆溝橋等の警備を經て九月上旬良鄕附近に進出し第一線部隊として爾後の戰鬪に備へて居た。九月十二日には友軍部隊が房山近傍の閑古庄に於て優勢なる敵軍の壓迫を受け危殆に瀕したる際氏の所屬中隊は之が救援の任務を受け前方並に左側面に大敵を控へ乍ら寡兵克く馬各庄の逆襲部隊を猛攻して救援の目的を達し爾後涿州會戰の戰機熟するや所屬部隊は九月十四日良鄕附近を出發し疾風迅雷の勢を以て夏村寶店鎭等の敵陣地を突破し更に京漢線西側山地を敗敵に尾して猛追擊に移り保定陣地の西方據點を席卷して京漢線方面の戰況進展に重大なる素因を與へ尙晝夜兼行の强行軍を續けて石家莊の西北鎭鑰たる靈壽方面に殺到した。敵は北崗上及尹凡同高地等の要衝に據り頑强なる抵抗を試みたるも所屬部隊の猛攻擊に依り遂に潰亂敗走の已むなきに至り延いて滹沱河畔敵陣地瓦解の端となつた。氏は以上の諸戰鬪間克く長途追擊の困苦缺乏に堪え又熾烈なる敵の彈雨を冒して

命令傳達の重要任務を迅速確實に完遂し以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

石家莊附近の會戰終末を告ぐるや所屬部隊は爾後正太線の南方地區を迂回して娘子關附近の敵の側背に出で同線方面を西進する主力部隊の進出を容易ならしむべき重要任務を與へられて十月二十一日石家莊附近を出發し翌二十二日測魚鎮に到着した。其の際所屬中隊は左縱隊の先遣隊として險難なる山谷を踏破し敵情地形を捜索しつつ前進したが翌二十三日には東石門附近に於て有力なる山西軍に遭遇し之を撃破したる後捜索隊の任務を解かれた。翌廿四日は七亘村附近の敵を撃破し其の夜馬山村に露營した。翌二十五日所屬中隊は再び左縱隊の最先頭部隊として前進し午前十一時半木暮村に到着せる時敵の一部は東回鎮の東方約千五百米の高地上既設陣地に據り我が左縱隊の進路を扼しあるを知り進路の兩側高地を占領して細部の敵情地形を偵察した。此の結果を綜合し所屬部隊は午後二時より攻撃を開始するに決した。所屬中隊は第一線部隊となり之に重機關銃隊歩兵砲隊も加はり敵前近距離に展開して猛射を開始した。此の山は海拔約千二百米の高地にて地形險難交通甚だ困難なりしにも拘はらず氏は彈雨を冒して豪膽機敏に諸命令を傳達した。斯くて午後二時五分我が第一線は敢然前進を起すや敵は小銃機關銃を以て必死と猛射を浴びせ來り更に我が近迫に伴ひ手榴彈の雨を降らして來た。中隊は之に屈せず急斜面を攀登して午後二時三十分頃敵陣地に突入して白兵戰を交へた。此の時早や携行手榴彈も盡き石を拾つて敵に投げつける等阿修羅の如く入り亂れて死鬪を續け約千名の敵に徹底的の大打撃を與へて遂に敵陣地を占領するを得た。此の間氏も亦指揮班員として中隊長に尾して突入し得意の銃劍術に依り數多の敵兵を殺傷したが無念にも腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は志操堅確にして豪膽機敏の人、今次聖戰に參加するや涿州保定滹沱河々畔の三大會戰に參加して毎戰赫々たる武勳を奏し更に支那三大難關たる娘子關方面の山岳戰に活躍し常に中隊長の意圖の如く活躍して指揮班員たるの重責を全うし遂に肉彈となり中隊長と共に堅壘に突入し其の卓越せる武技を遺憾なく發揮して玉碎するに至つた。寔に皇軍精兵の鑑たる者であつたが今や此の忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜に堪えざるも其の累次の功績たるや皇軍戰史に輝き其の芳名は永く後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國玆に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　梅村昇太郎

戰鬪慘烈を極むるも不屈不撓奮戰戰勝の端を拓きて大册河畔に散る

氏は栃木縣那須郡狩野村の人にして父を五郎母をモトと云ひ大正二年四月一日に生れ妻ツナとの間に未だ子はなかつた。責性温厚篤實孝心深く事に當り勤勉不屈不撓の氣概に富み農村として得難き有爲の士であつた。昭和三月三月狩野小學校高等科を卒業其の後は農業に從事し傍青年團幹事として團の向上發展に盡瘁してゐた。昭和九年一月徴兵として岐阜歩兵聯隊に入營在隊間滿洲事變の爲出動し九月十五日密家宅附近の戰鬪に於て奮戰右臂に貫通銃創を受け武勳を樹て勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり同十一年一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊成島中隊に屬し第三小隊第四分隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十五十六日は拒馬河畔北相附近の戰闘に次で十八日日沒より十九日拂曉に亘りては南義安の戰闘に參加し爾後敵を急追して九月二十一日大冊河左岸に到達した。

大冊河は河幅百數十米水深一米三四十糎敵は此の天嶮を利用し河中には水雷敵岸には地雷を敷設し其の後方には鐵條網及水濠を繞らし其の陣地は數線に設け掩蓋を設備し頗る堅固に占領して極力我が進擊を阻止すべく待構へてゐた。從つて此の堅陣に對する晝間攻擊は徒らに損害を多くするに過ぎざるを以て所屬部隊は夜襲に依り之を奪取するに決し直ちに渡河準備に着手した。此の時所屬中隊は部隊主力に先んじ王谷莊堡大冊河の渡河點を確保すべき任務を受け中隊長代理佐藤少尉以下一同は義に拒馬河畔の戰闘に於て戰死したる成島中隊長の弔合戰を爲すべく決死の覺悟を固め未だ戰はざるに意氣衝天の概があつた。同夜午前二時恰も十七日の皎々たる月光を背に浴びつつ渡河を開始するや敵は逸早く我が夜襲を察知し果然猛烈なる射擊を開始せしが氏は分隊長指揮下に之を物ともせず率先して勇敢に濁流に躍り込み而も敵岸に近づくに從ひ所々頸にも達する流線を押切り敵岸に取り着き河岸陣地に勇敢に突入して之を擊退せしが此の附近一帶は平坦なる砂地であり彼我の中間地區には僅かに黍畑があるのみで而も敵の陣地は百米内外にして正面及側面の輕機關銃掩蓋重機關銃迫擊砲彈は恰も霰の如く我が死傷者は續出するの狀態であつた。併し氏は更に屈せず中隊の左第一線小隊の火線分隊内にありて分隊長指揮下河岸より約五十米前進して主力の渡河掩護の爲陣地を構築せしが驚て陣地側背の警戒を命ぜらるるや勇躍其の任に就き敵前至近の位置に於て剛膽勇敢に行動し敵情監視中不幸遂に左上膊部に骨折貫通銃創を受けた。併し氏は尙も任務を繼續し敵逆襲の兆を發見して速かに之を報告し分小隊長をして之が對應の處置を講ぜしめたりしが剛氣の氏も遂に任務に耐へざるに至り爾後收容後送せられ衛生部員の手篤き醫療を受けしも看護の甲斐なく二十九日午前二時錦州陸軍病院にて護國の華と散つたのであつた。而して中隊は惡戰苦闘殘員僅かに二十九名となりしも氏等の勇戰奮闘と尊き犧牲とにより午前十一時には敵陣地を奪取し全軍戰勝の端を拓き時の軍司令官より光輝ある感狀を附與せられた。

氏鄕に在るや至孝勤勉にして衆の模範と謂はれ義には滿洲事變に功を樹て今次亦召されて戰陣に臨むや大小交戰五回突擊三回毎戰彈雨の下勇敢殊に大冊河畔に於ては戰闘慘烈の極所に立つも不屈不撓而も傷つくも屈せず其の重任を完うし戰勝の端を拓いた。實に斯の如きは忠孝一道良兵良民の軌範にして是畢竟家を忘れ一身を君國に捧げ斃るるも尙已まざる盡忠至誠の發露と謂ふべく參戰幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　上野柾夫

沈着勇敢の重機装塡手戰闘惨烈の局所に奮闘して東邊庄に散る

氏は岡山縣後月郡高屋町の人にして父を代治郎亡母を古曾野と云ひ大正二年八月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして沈着孝心深く地方稀に見る勤勉努力の青年であつた。昭和三年高屋小學校高等科を卒業其の後高屋町丹生合資會社に入社勤務し岡山縣模範職工表彰狀を附與せられ又消防組賞狀をも授けられた。昭和九年一月徴兵として京都伏見歩兵聯隊に入營し同年四月滿洲に派遣せられ黑河省に駐屯して北滿警備の任に服し同十一年一月内地に歸還滿期除隊した。在隊間は軍務に精勵特に劍術に長じ大隊長より賞狀を又除隊に際しては善行證書を附與せられ尙事變の勳功により勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊第一機關銃中隊に編入せられ第四小隊第八分隊一番銃手として同月十日勇躍征途に就いた。而して所屬部隊は北支に到着し八月二十一日には良王莊を出發して畢庄子の敵を攻擊し同日午後三時三十分同地を占領し翌二十二日引續き東邊庄の敵を攻擊する爲午前三時より行動を起し同七時所屬中隊は大隊の第一線中間附近に展開し氏の屬する第四小隊は右第一線中隊に配屬せられた。此の附近一帶は連日の豪雨に泥濘膝を沒し剩へ高粱は丈餘に繁茂ししかも敵は豫てより陣地を構築し戰場の地形に精通し正面及兩側面より猛射を浴びせ來り爲に我が將兵は心焦れども行動頗る困難にして我が攻擊は實に容易ではなかつた。しかし氏は之を物ともせず至難の狀況下に於て絶えず萬難を排して熱心敵情監視に任じ屢々有利の目標を發見して分隊長の射擊指揮を容易ならしめつゝありしが二番銃手平田一等兵負傷するや進んで二番の位置に就き友軍の死傷續出する中にありて猛火に屈せず克く沈着彈藥の裝塡に專念し射手の猛射擊に聊かの支障をも生ぜしめず分隊をして配屬歩兵中隊の前進を容易ならしめかくして分隊亦第一線歩兵の前進に伴ひ逐次陣地を變換推進して敵前七十米にまで達せる頃彼我の戰闘は愈々激烈となり敵彈は篠つく雨の如く死傷相次ぎ戰闘惨烈を極めたが氏は更に之に屈せず第一線歩兵と同線上にありて友軍突擊準備の爲機關銃の火力を最高度に發揮せしむべく極力奮闘中午後六時頃無念敵彈頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏や勤勉努力青年の模範と謂はれ今次召されて戰陣に臨むや至誠一貫彈雨の下或は熱心重要目標の發見に努め或は沈着裝塡に任じて聊かの支障をも生ぜしめず克く皇軍機關銃の威力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは良民即ち良兵の示範にして是畢竟一身を君國に捧げて斃るゝまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして津浦沿線に散りしは洵に痛惜に堪へざるも士は百戰功なき瓦全を愧づ氏が一戰玉碎して以て遺せる芳名は萬世不朽に武人の華と謳はれ其の樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　道滿丈夫

傷つくも機關銃彈藥を匍匐搬送し死期迫るも敵を連呼馬廠河畔に散る

氏は岡山縣都窪郡山手村の人にして父を嘉平治母をイシノと云ひ大正五年十二月一日に生れ未だ獨身であつた。資性剛膽沈着不屈不撓の精神に富み孝心極めて深く業務に頗る勤勉であつた。氏は現役在隊間外泊歸省に際しては兵營より四里半の道を乘物を利用せず徒歩にて歸宅し寸暇を惜しみて農事を扶け村民一同の等しく敬服せし所であつた。昭和七年三月養素小學校高等科を卒業し其の後は家業に從事しつゝ傍青年訓練所に通ひ入營時に至つた。氏は小學校在校時には勤勉家業を扶くる故を以て校長より賞狀を又青年訓練所在所中は査閲官より成績最優秀者として賞詞せられた。昭和十二年一月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營此の時既に氏は其の前年聯隊區司令官より時局重大なる講演を聽き心密かに決意する所あり遺髪及爪を家族に遺して入營し爾來一意軍務に精勤中であつた。

支那事變起るや赤柴部隊第一機關銃中隊に屬し彈藥小隊の馭兵として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。此の際氏は「自分は　陛下に捧げし軍人なれば生還は元より期せず」とて時計を形見として弟に與へ且零細なる給料の貯金總額を家計の補助にもと父に渡し出發した。而して所屬隊は北支に到着するや八月下旬より九月上旬に亘る津浦沿線の戰鬪に參加した。當時北支は連日の豪雨に道路は泥濘膝を沒し車輛の行動頗る困難言語に絶するものありしが氏は不屈不撓有ゆる困苦辛酸を克服して輓馬を叱し中隊の任務達成を容易ならしめ更に九月三四日唐官屯附近の戰鬪に際しては正面就中左側凸角陣地よりする敵の猛射を冒して勇敢に一意前進し數回に亘り困難なる彈藥補充を爲し戰銃隊をして彈藥の顧慮なく戰鬪を繼續することを得せしめた。次で九月七日午後五時中隊は大隊の中央に展開し靜官屯寺院高地に對し攻擊を開始するや

氏は敵の猛射を冒して彈藥補充に任じ戰銃隊の戰鬪に支障なからしめた。

九月八日氏は彈藥小隊より戰銃隊第三小隊に配屬換となり五番銃手として靜官屯寺院高地の警備に就き十日所屬中隊は第三中隊と共に赤柴部隊長の直接指揮下に入り第二大隊の馬廠河渡河掩護の目的を以て運河左岸第二大隊方面に轉進し約五百米を前進するや猛烈なる敵火を受けしも氏は之に屈せず克く分隊長の指揮に從ひ所命の區署に就き戰況急迫するに及び所屬中隊は第三中隊と共に赤柴部隊長より馬廠河對岸に進出して第六中隊の戰鬪を援助すべき命を命けた。當時の戰況は眞に苦戰の狀態なりしを以て將兵一同は今こそと死を決し軍旗に最後の拜禮を爲して工兵隊の發動艇に乘船し敵彈雨下する運河を急速力にて遡航し午前六時三十分馬廠河の分岐點より上流二百米の敵前百五十米の地點に上陸した。此の間敵は側防火器により猛烈なる射擊を浴びせ來り未だ上陸せざるに我が死傷は相當多數に達したが氏は彈藥箱を背に負ひ勇躍舟より飛び下り小隊長の命により彈藥搬走の爲分進せんとするや敵彈は恰も篠つく雨の如く忽ち氏は敵の側防機關銃の爲

臀部に貫通銃創を受け其の場に顚倒した。併し氏は尙も自己の任務を果さんとし匍匐して約二十米前進し將に銃側に彈藥を補充し終りし時無念又もや第二彈を胸部に受けた。氏は苦しき胸部を押へながら　天皇陛下の萬歲を奉唱し分隊長より言ひ遺すことなきやと云はるゝや苦しき口を又開き「敵を／＼」と呼び續け分隊長より「敵は退却したぞ、勝つたぞ！」の言葉を聽き蒼白の顏面に微笑を浮べ再び全身の力を絞りて　天皇陛下と奉唱し萬歲の聞は早や消えて鼓に壯烈なる戰死

を遂ぐるに至つた。

氏の郷に在るや至孝にして勤勉、其の戰陣に臨むや惡路軛馬を馭して撓まず彈雨の下亦勇敢克く彈藥補充の任務を果して遺憾なかつた。殊に馬厩河敵前上陸時の行動の如き傷つきて尙彈藥を搬送し死期迫るや唯々敵に勝たんとする一念のみであつた。實にかくの如きは豫て決意の如く忠孝一如一身を君國に捧げて生還を期せざる燃ゆるが如き盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰日ならずして氏の如き忠勇義烈の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも氏が奮戰力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　野村兼義

決死隊に加りて堅壘に突入負傷するも尙格闘を續けて居庸關の華と散る

氏は鹿兒島縣日置郡郡山村の人にして父を兼二母をキワと云ひ大正七年五月五日に生れ未だ獨身であつた。資性快活にして率直而も氣力充溢し如何なる難事をも斷行するの人であつた。昭和八年三月郡山高等小學校を卒業し其の後は父母を扶けて農業に精進しつゝ傍青年學校に通ひ十二年三月現役志願兵として滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し良好の成績を擧げつゝあつた。昭和十二年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや千田部隊に編入され第二中隊小銃手として間もなく出動し北支懐柔附近に到り待機警備に就いた。當時北支の風雲は益々險惡となり我が軍は遂に獨自の行動をとることゝなり七月二十八日より空陸相呼應して一齊に起ち北京周邊の第二十九軍に對する膺懲攻擊を開始した。此の日所屬部隊は清河鎭附近に陣地を占領せる敵を擊破し續いて西苑附近の殘敵を掃蕩したる後萬壽山附近に兵力を集結し爾後の攻擊を準備した。此の間氏は克く分隊の中堅として有ゆる危險困難を克服して奮戰力闘し中隊の戰勝に寄與する所甚大であつた。然るに其の頃蕩恩伯の指揮する有力なる中央軍は京綏線に沿ひて前進し來り八月に入るや長城線を越へて我が側背を衝かんとするの狀況にあつた。玆に於て皇軍は此の新敵を擊破すべく軍を進め八月九日所屬部隊は萬壽山を出發して南口に向ひ前進し十一日拂曉より友軍砲兵の支援射擊の下に攻擊を開始し實夜猛攻の後十二日午後八時頃南口を攻略し息つく暇もなく敵を西北方に急追し十八日には第一線所屬大隊は居庸關東南方皺山附近の堅陣を夜襲して之を奪取したが尙前方近くには大小の山岳聳立し岩石の各山悉く火點式陣地を構へ翌天明となるや彼我の戰闘は開始され激戰正午過ぎに及んだ。特に所屬中隊前方の最高峯には數十名の敵兵岩石を利用して掩蓋を設け機關銃を配備して頑强に抗戰し此の天險に據る敵を擊破するにあらざれば大隊爾後の攻擊は進捗困難なる狀況にあつた。玆に於て大隊長は肉彈戰に依り最高峯を攻略すべく決心した。然るに岩石露出する高地斜面は狹少にして多くの兵を進め能はざるに依り大隊長は第二中隊より少數人員の決死隊を出し肉彈戰を敢行すべく命じた。氏は眞先に志願し遂に重松軍曹以下氏等五名之に當ることゝなつた。午後一時三十分より我が砲兵は最高峯に射彈を集中し且現位置よりも掩護射擊を加へ敵陣地は恰も粉碎されたかの如くに見へ

たが決死隊の中腹に達したる時掩蔽部内に潜みありし敵は俄然急射撃を集中し且手榴彈を投擲して來た。決死隊員は彈雨を冒し爆煙に蔽はれ我が砲彈に肩接して敵に肉薄し勇猛果敢に堅壘に突入した。此の時氏は手榴彈の破片にて左大腿部に受傷したが氣丈の氏は毫も屈することなく奮戰格鬪を續け遂に決死隊は最高峯の一角を占領したが後方至近の位置には輕機關銃を配備せる他の火點あることを發見した。此の敵は死物狂ひに亂射を浴びせて來た。

軍曹以下は敵彈を潜りながら全く獅子奮迅の勢を以て敵を突き拂ひ最高峯を完全に奪取し尙餘威に乘じて一擧第二の火點に肉薄した。氏は更に勇氣を振ひ起して不自由にも猛進したが殘念にも上半身に二彈の貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。併し氏等の奮戰と尊き犧牲に依り最高峯の二堅壘は見事に奪取され大隊爾後の攻撃を容易ならしめたのであつた。

氏は今次聖戰に參加するや克く分隊長を輔佐して勇戰奮鬪し其の活躍は實に顯著であつた。特に決死突撃隊に加りたる力鬪振りは全く身命を君國に献げて傷くも尙肉彈戰を續け最高峯の鎖鑰陣地を奪取して敵の死命を制し大隊攻撃奏功の素因を作爲した拔群の功績は眞に軍人の龜鑑と謂ふべきである。參戰幾日ならずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひしは洵に長恨の極みであるが氏の樹てたる赫々たる武勳は燦として皇軍戰史に輝き芳名は萬古に讃はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TM）

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　野崎野一

忠孝兩全の士、北寧線落岱驛に孤軍奮鬪して玉碎す

氏は兵庫縣尼崎市雜波本町の人にして父を雄三郎亡母をまつと云ひ大正五年四月七日に生れ未だ獨身であつた。性溫良素朴にして孝心特に深く毫も輕佻浮薄の時流に染まず毅然として正義の道を斷行して息まなかつた。昭和五年三月尼崎小學校高等科第一學年を修了後暫らく家庭に在りて農業を手傳つて居たが其の後同市西雜波浪華カーテン會社に入社し熱心業務に勉勵して同會社上下の人々より愛顧を受け又其の給料は其のまゝ父親に提供して居た。氏は父より小遣錢を與へらるゝとも自己の享樂に使用する事なく父の好む煙草などを買求めて之を勸め其の喜びを以て我が喜びとして居た。氏は青年學校へも通學し所定の課程を修了したが模範生として賞揚されて居た。昭和十一年十二月徴兵として關東軍鐵道聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ上下一同の厚き信頼を受けて居た。

蘆溝橋事件勃發し北支の風雲日を追ふて險惡となるや昭和十二年七月中旬戸澤部隊眞下中隊に編入せられ北滿方面より急遽天津方面へ南下し同月十四日より北寧線天津豐臺間の停車場勤務並に列車勤務に從事した。當時京津地方には第二十九路軍を初めとし變裝せる公安隊便衣隊等は抗日意識に燃え傲岸不遜の態度を以て包圍圈を作り殊に七月下旬以來は北寧線沿道に駐屯する支那軍は我が軍の劣勢を侮り愈々露骨なる行動に出で來たり北寧線は全般に亘り大なる危險に曝さるゝに至つた。

七月二十八日氏等の分隊は天津を距る約十里の地點なる落岱驛の勤務員として該驛の守備を命ぜられ嚴重警戒に當りつゝ夜を徹する事となつた。其の夜午前二時半頃敵は氏外五名の戰友の詰めありし室に突如猛烈なる機關銃火を集中して來

た。氏等は憤然として各自の持場に就き奮戰數時間に及んだ。味方は僅かに六名なるに敵は百餘名の大敵にして更に其の後方には增援隊さへも續々來着し總勢三百五十名に垂んとするの狀況となつた。然れども氏の念頭には任務の重きを知り身を鴻毛の輕きに比し斃れて尙息まざるの赤誠に燃ゆるの外餘念なく一歩も守地を退かず根限り精限りの苦鬪を續けて居た。あゝ氏等勇戰の姿こそは正に鬼神を哭かしむる悲壯なものであつた。今や氏の執れる銃も故障を起し彈藥も殘彈幾何もなく得たりとつけ入る憎むべき敵兵は氏等に肉薄して手榴彈を投げつけ又機關銃の猛射を浴びせて來た。戰友の一名は名譽の戰死を遂げ二名は重傷を負ふた。悲憤の涙さへ拂ひ得ぬ氏は銃の故障を排除しつゝ尙も奮鬪中無念一彈飛來左胸部に貫通銃創を受けかすかにも「天皇陛下萬歲」と奉唱し壯烈なる戰死を遂げた。同停車場の白壁をドス黑く染めた血痕と千餘に達する彈痕は當時の激戰苦鬪を物語るものであるが氏等の尊き犧牲に依り其の後北寧沿線の敵部隊を掃蕩し軍事輸送に宏大なる貢献を與ふるに至つた。

氏は忠孝の道に透徹し而も沈勇剛膽の人、今次聖戰に參加するや逸早く京津地方の軍事輸送に從事し日夜不安の情況下に毅然として列車勤務に將た又停車場勤務に全魂を傾倒して鐵道兵の本領を發揮した。偶々落岱驛に於て大敵の來襲に遭ひ孤軍奮鬪軍人の本分を全うして玉碎した。寔に是軍民共に鑑みとなすべき良兵良民であつた。今や其の壯容に接すべくもなく痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は永く後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　野田定太

清河鎭の決死砲兵隊員重傷に屈せず頑敵を撲滅して重任を完うす

氏は福岡縣飯塚市大字飯塚の人にして父を多吉母をタマキと云ひ大正五年三月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして不屈不撓の氣概を有し父母に事へて孝養到らざるなく又妹等を慈しみ世人に親切にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和三年三月飯塚尋常小學校を卒業後直ちに飯塚商業學校へ入學同七年三月同校卒業其の後は家庭に在りて家業たる青果市場の事務に從事し傍飯塚青年學校へ通學し入營時に及んだ。昭和十二年三月徵兵として錦縣砲兵隊へ入營し日夜軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

昭和十二年七月七日蘆溝橋事件勃發するや間もなく入江砲兵部隊土岐中隊に編入せられ第一分隊二番砲手の榮職を命課せられ勇躍屯營出發山海關天津及通州を經て板橋村に進出し七月二十八日には奈良歩兵部隊に續行して清河鎭方向に向ひ前進した。附近一帶の地形は高粱繁茂して全く通視を許さず指揮連絡は極めて困難であつた。酷熱百二十度餘に達すれど飲料水を得る能はず連日連夜不眠不休の强行軍を續けたが午前九時十五分俄然前方に銃聲起ると思ふ間もなく輕機關銃の音も氣たたましく響いて來た。所屬中隊は命に依り直ちに後屯南側に放列を布置し永泰莊の敵陣地に對して猛砲擊を開始した。敵は此の砲擊に一たまりもなく退却したが地理に明るき敵は高粱畑に潛伏して狙擊を加へ友軍には相次で死傷を

出すに至つた。退却せる敵は永泰莊の後方なる清河鎭の既設陣地に遁入した。清河鎭の敵兵力は約四箇聯隊とも稱せられ部落周圍の土壁外壕を補修增强し其の陣前の高粱畑を障碍となし短小距離の射界のみを清掃して居た。我が第一線歩兵は危險を冒し高粱畑の緣端まで出たが圍壁に據る無數の輕機關銃や良好なる觀測所を有する迫擊砲の敵銃砲火に射すくめられ萬策盡きて一地に膠着して居た。午後二時半所屬中隊長は當面の歩兵大隊に協力する爲悲壯の決意を以て第一小隊長遠藤准尉に氏の所屬分隊を指揮せしめ第一線に陣地變換を命じた。小隊長以下九死に一生だも期待し得ぬ難局に直面し重責を双肩に擔ふに至つた。「では唯今より出發します」と中隊長に挨拶を述べ勇躍死地に赴いた。中隊長は「成功を祈るぞ」と其の眼には涙が光つて居た。氏等は途中から臂力前進に移つた。砲車の進路は一列動く高粱の波、暫しも息まぬ敵銃砲の亂射亂擊其の射彈は氏等の身邊に蝟集して來た。豪膽不敵の氏は神色自若默々として一意畑の緣端目ざして前進を續けた。小隊長は緣端の後方間近く分隊を止めて發射準備を完了し更に氏等一部の要員を緣端に招きて敵情竝に射擊目標を指示しそつと砲口を畑の緣端に押出した。此處は敵前四十七米、圍壁に據る敵機關銃を物の見事に吹つ飛ばし續いて機關銃二銃迫擊砲三門を撲滅しその上四條の突擊路を完成した。是實に氏の正確機敏なる照準に俟つ所多大であつた。友軍歩兵は欣喜雀躍將に突擊に移らんとしたが此の有樣を見て取りし敵の機關銃は斜左に現はれて必死と我が第一線を猛射した爲又もや損害續出するに至つた。小隊長は憤然之に射向を變換し猛射を浴びせて居たが此の時右前方にも新たに敵の機關銃

並に迫擊砲現はれ氏等の分隊目がけて十字の集中火を浴びせて來た。之が爲氏は右肩及腹部に貫通銃創を受けたが後退の命にも耳を籍さず尙若干發の射擊を繼續したが精魂盡きて遂に其の場に倒れた。時に午後四時頃であつた。後野戰病院に收容されたが手當の甲斐なく同日午前一時微かにも萬歲を奉唱し護國の華と散つた。本戰鬪に於て所屬分隊は四名の戰死者を出したが氏等の尊き犧牲に依り我が第一線は二十八日午後七時半清河城の一角を占領し翌二十九日拂曉までには附近一帶の頑敵を掃蕩するを得た。

氏は三人兄妹の唯一人の男兒、幼より修養に努め更に軍隊敎育に依りて其の本來の德性を助成し鄕に在ると軍に從ふとを問はず模範的の人物であつた。今次聖戰に從ふや平津地方に蟠踞し而も傲岸不遜抗日意識に燃ゆる十數萬の敵の大軍の眞只中に堂々皇軍砲兵の眞價を發揚し以て友軍歩兵に適切機敏なる協力を與へ遂に嵐の如き敵火の中に玉碎した。其の尊き犧牲的精神の發露其の壯烈鬼神を哭かしむる武勳寔に軍人の龜鑑と謂ふべきである。今や氏が壯容慈顏に接すべくもなく痛惜禁ずる能はずと雖も不朽の武勳は天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名を後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　黑岩誠一

斥候兵積極活躍奮戰して小隊の戰鬪を有利に導き南愆遠に散る

氏は德島縣美馬郡東祖谷山村の人にして亡父を豐次母をカネと云ひ大正五年二月十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫

順なるも事に臨み勇敢にして職分に積極勤勉居村青年の模範であつた。昭和六年三月和田小學校高等科を卒業し其の後は兄を助けて家業に勵み青年の中堅として率先村の公共事業に盡瘁し貢献せる所尠くなかつた。昭和十一年十二月徴兵として大邱歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや鈴木部隊蒔浦中隊に屬し輕機關銃四番彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着し同月二十七日には團河村二十八日には南苑の戰鬪に參加した。此の兩戰鬪共氏は第一線となり彈丸雨飛の間彈藥補充に活躍奮鬪し輕機關銃の射擊威力を遺憾なく發揚せしめ又突擊に際しては日頃優秀なる劍術伎倆を發揮して勇戰奮鬪以て中隊の攻擊を有利ならしめた。其の後所屬隊は馬堂店附近の警備に任じ八月上旬以降崗窪及大柴草附近の守備に服し此の間氏は敵前至近の距離に於て日夜警戒搜索の諸勤務に活躍奮鬪し中隊の任務達成を容易ならしめた。

八月下旬中隊は其の一小隊を大柴草南方千米の南壺遠に派遣し警戒中八月二十三日午前四時突如敵の一部隊は該警戒小隊に向つて攻擊し來つた。氏の所屬小隊は之が救援の爲午前四時五十分大柴草の守備地を急遽出發南壺遠に向つて急進した。此の際小隊長は分隊長大野伍長に兵四名を屬し下士斥候となし先行して南壺遠警戒部隊との連絡に任ぜしめ併せて西炊方面の敵情搜索を命じた。氏は選ばれて此の斥候の一員に加はり勇躍任に就き克く分隊長を輔佐し率先々頭に立ちて積極活躍搜索に任じ午前五時十分南壺遠西側に達した。此の時不意に敵の斥候に遭遇し斥候長之を攻擊するに決するや氏は勇敢に此の敵を攻擊し戰鬪十數分間の後之を擊退し我が警戒小隊の所在に到り連絡の任を完うし一旦小隊に復歸せしが爾後更に西炊方向に前進し該方面の偵察中約四五十名の敵兵我が方に向ひ攻擊し來るを見るや氏は斥候長指揮下に小隊の攻擊と相俟つて率先々頭に立ち敵中に突入し敵數人を刺殺し續いて敗走する敵を追及せんとせる其の刹那無念敵彈頭部を貫通し午前十時三十分遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし氏の積極勇敢なる行動と尊き犧牲とは小隊をして南壺遠警戒部隊救援の任務を有利に達成することを得せしめた。

氏鄕に在るや居村青年の模範と稱せられ出でて戰陣に臨むや每戰彈雨の下勇敢克く奮鬪せしのみならず中にも斥候となるや積極活躍奮戰して小隊の任務達成を有利ならしめた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ斃るるまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして河北の野に散りしは洵に痛惜極まりなきも氏が活躍奮戰して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　黑川登一郎

忠烈勇敢の傳令彈雨の下克く其の重任を果して永定河畔に散る

氏は栃木縣芳賀郡中村の人にして父を七郎母をリサと云ひ大正三年十一月二十四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして剛膽殊に孝心深く弟妹を慈しみ又事に當り積極勤勉責任觀念旺盛の人であつた。昭和四年三月中村小學校高等科を

卒業引續き中村公民學校に入り一學年修了の後家業に從事してゐた。昭和十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵同年十二月一等兵に進級し同十一年十一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第二歩兵砲小隊に屬し通信手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十三日より楡垈鎮南方永定河畔の戰闘に參加し十四日大隊は部隊の左第一線となり永定河右岸の敵に對し攻撃を開始するや所屬小隊は第六中隊後方に陣地を占領し第一線中隊の渡河に協力した。永定河は河幅三百米もあり急にして水深胸にも達し且兩岸濕地にして我が軍の行動上苦しき障碍であつた。而して敵は我が前進を拒止すべく此の障碍を利用し其の右岸に堅固に陣地を占領してゐた。氏は通信手として村上伍長と共に大隊本部に位置し本部小隊間の連絡に專任し彈雨の下常に進んで戰線を駈け廻り大隊長の命令意圖を歩兵砲小隊長に傳達し又小隊の戰況を大隊長に報告し小隊長の戰闘指揮を容易ならしめつゝ大隊本部の前進に伴ひ勇敢に前進し一進一止逐次敵に近迫し左岸近く進出せしが大隊本部愈々渡河せんとする頃大隊長より歩兵砲小隊は第一線中隊に附隨して速かに渡河し爾後の戰闘に協力すべき旨小隊長に傳達せよとの命令を受けた。此の頃敵は我が軍渡河の機に乘じ極力拒止すべく一層熾烈なる銃砲火を浴びせ來り殊に本部小隊間の如き横行連絡は頗る危險なりしにも拘はらず氏は毫も之を意に介せず勇躍其の任に就き雨か霰の如く注ぎ來る敵彈を冒して疾驅し幸に微傷だも負ふことなく小隊長の位置に到達し確實に大隊長命令を傳達し重き使命を果した。斯くて氏は再び高粱畑内を歸途に就きしが其の途中惜しくも敵の一彈臀部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし氏の剛膽勇敢なる命令傳達により小隊は直ちに分解搬送の上敵岸に到着し機を失せず第一線歩兵に協力することを得驍て永定河右岸の敵を撃退することを得た。

氏鄕に在るや孝子出でゝ戰陣に立つや忠良なる兵士であつた。而して選ばれて至難且重要なる傳令勤務に服するや熾烈なる彈雨の下剛膽勇敢克く積極的に活躍し歩兵砲の威力を適切有效に發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは忠孝一道家を忘れ一身を君國に捧げ斃るゝまで其の重任に邁進せる盡忠至誠の發露にして正に傳令の鑑と謂ふべきである。參戰日ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級　黑田久男

小寨村に大敵の奇襲を受け奮戰死闘自動車を燒却して之と運命を共にす

氏は京都府與謝郡養老村の人にして亡父を長吉母をシユウと云ひ大正二年二月三日に生れ妻キヨミとの間に健治。正利及博の三兒を擧げた。資性快活溫良孝心深く家業に熱心にして尋常小學校當時より未明に起き日沒に至るまで通學の前後寸暇を惜しみて父を扶け營々として働き不屈不撓の氣概旺盛であつた。昭和二年三月宮津小學校高等科を卒業し昭和八年

徴兵檢査の結果第一補充兵役輜重兵に編入せられ同年自動車運轉手の免許證を受け郷里及長崎市に於て自動車運轉に從業してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召兵姑自動車隊新庄部隊中西中隊に屬し第二小隊自動車手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し南口南方山地附近より行動を起し敵の堅壘と恃む八達嶺を突破し泥濘地帶或は山岳地帶を運轉强行し近代機械化輜重の眞價を發揮した。此の間氏は有ゆる困難を克服し粉骨碎身克く其の任を完うした。次で九月二十三日所屬中隊は三浦部隊に配屬せられ同部隊が敗敵を追擊するに當り其の先遣隊の兵員輸送に任じ將兵一同意氣衝天の勢を以て長城線に程近き小寨村に向け出發した。然るに其の使用自動車は徴發車にして十分點檢整備の暇もなく行動を起せる爲途中衰損破損等事故頻發し非常に困難せしが氏は不眠不休の努力により之を整備しつゝ遂に輸送を完うし先遣隊の追擊に遺憾なからしめた。

九月二十五日所屬中隊は矢島中隊と共に至急靈邱に到り新鋭の步兵部隊を輸送し來るべき命を受け早朝行軍序列を整へ午前九時靈邱に向ひ同地を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き寒氣身に沁む朝であつた。露營地を後にして進むこと約二粁其の先頭が谷間の道に差懸るや敵は昨夜の雨を衝いて竊かに遠く後方に迂廻せるものと見え午前九時十五分俄然敵と遭遇するに至つた。依つて部隊は直ちに之に應戰せしが敵は迫擊砲重機關銃を有する正規軍にして千五百を下らざる大部隊なるに我は新庄中佐以下僅かに七百七十六名殊に其の大部分は輜重兵である。加之敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及兩側の三面より攻擊し來り忽ち我は全く敵の重圍に陷るに至つた。氏は僅少の人員にて自動車の直接警戒に任じ迫擊砲機關銃彈の集中火により自動車の破損續出する中に毫も怯まず自若として警戒を嚴にし居りしが愈々敵が近迫し來るや克く沈着正確なる射擊を爲し逐次之を射殺しつゝ奮戰せしも敵は其の優勢を恃みて益々我に肉薄し來り氏等一同は白兵を揮つて之を擊退すること數次斯くして惡戰苦鬪大敵を支へて奮鬪實に約三時間半愈々敵の包圍線を突破して血路を開かんとするに當り其の直前敵彈により破損して運行不能となれる自動車を敵手に委せざる爲燒却するに決したが此等自動車の附近は敵彈雹霰の如く飛來し其の燒却は容易の業ではなかつた。之が爲中司伍長を長とする決死隊を編成せらるゝや氏は西浦戸本福岡の三氏と共に欣然として之に加はり敵彈雨飛の下を疾驅し或は携行燃料を用ゐ或は油槽の蓋を脱して火を放ち所命の如く燒却して其の重任を果せしが無念頭部に貫通銃創及手榴彈の破片創を受け戸本其他の戰友と共に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより約三時間半に亘り寡兵克く十倍の敵を支へ且自動車を敵手に委することなく午後零時四十分其の包圍線を突破し三浦部隊に合することを得た。

氏郷に在るや稀に見る精勤の人であつたが戰場に臨むや惡路嶮難加ふるに皇軍破竹の進擊に伴ふ晝夜兼行の急追隨と後方敗殘兵の出沒や衰損多き徴用自動車の操縱等其の辛苦は想像以上なりしにも拘はらず終始一貫粉骨碎身優秀なる伎倆と相俟つて有ゆる困難を克服し近代輜重の全能を發揮せしめ常に前線の戰力を培養した。實に第一線快勝の裏に隱れたる此の涙ぐましき功績は沒すべからざるものである。而も俄然不測の大敵と遭遇するや彈雨の下沈着勇敢身を以て軍用物件を死守し尙且勇躍決死燒却の重任を果した。氏素と軍隊教育を受けあらざるに壯烈實に斯くの如きは我が邦古來繼承尊重せる盡忠至誠の發露にして正に皇軍輜重の鑑と謂ふべきである。參戰幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛恨

盡きざるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に銘き其の芳名は武人の華として後世不朽に讴はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日輜重兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　里崎一男

羅店鎭敵陣地前に決死鹵獲自動車を收容して重傷を負ひ遂に其の職に殉る

氏は德島縣板野郡撫養町の人にして父を霜吉母をエツノと云ひ大正四年十一月十四日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして情誼に厚く兩親亡き後は專ら祖父勘三に孝養を盡し又事に當るや熱心勉勵遂げずんば息まざるの氣概を有し世人の信用を受けて居た。鄕里の小學校を卒業後は神戸市某貿易雜貨店に勤務し誠意業務に勉勵し店主を初め諸人の愛敬を受け其の前途を囑目されて居た。昭和十一年徵兵檢査の結果補充兵輜重特務兵に編入せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月中旬應召大河原部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月早々上海戰場に到着し直ちに重要任務に就き或は泥濘クリークに行動を妨害され或は晝夜間斷なき敵の亂射亂擊の下に曝され乍ら上官の命に從ひ勇敢に其の職分に邁進し所屬中隊の任務遂行に寄與せる所多大であつた。當時揚子庄方面より進擊せる我が先遣部隊は水田中に白兵戰を交へて頑敵を擊破し八月二十八日には早くも羅店鎭近傍の重要據點を占領し後續部隊の來着を待ち一部は九月五日羅店鎭の西北方約二粁なる揚家樓周宅に於て敵兵約一千名を包圍殲滅して砲數門を鹵獲した。然れども羅店鎭は敵に取り重要鎭鑰點であつた爲敵は飽くまでも之を死守し連日連夜に亘り血戰を展開するに至つた。所屬部隊は斯かる狀況下に我が第一線に彈藥糧食を補給したが其の勞苦と危險たるや附近の地形が平坦なるとクリークの爲行動の自由を缺き第一線部隊と大差はなかつた。同月十二日我が第一線は羅店鎭の市街に近く肉薄して激戰を交へ敵は自動車十二輛を遺棄して城內に後退するの已むなきに至つた。されど此の自動車は彼我の中間地區たる市街の西北端より外方約

三百米の間に點在し我が軍が之を收容せんが爲には大なる危險を冒さねばならなかつた。敵は之を我が軍に利用させぬ目的を以て連日連夜遺棄せる自動車を破壞すべく銃砲彈の集中射擊を加へて居た。所屬中隊は遺棄自動車の收容並に其の修理作業の重任を擔任し氏は隊員一同と共に敵彈下を匍匐前進し一輛宛牽引し之を敵眼に遮蔽する位置に收容し時には熾烈なる敵の集中火を冒し時には夜暗を利用して九輛迄收容し九輛中六輛までの修理を略々完成するを得た。九月十九日も朝より修理作業に從事したが此の日敵は早朝より砲擊し來り氏の身邊には猛烈に敵砲彈が落下炸裂し土砂爆煙を吹きあげて物凄き光景であつた。されど氏は泰然自若自己の職分に邁進して居た。不幸其の際迫擊砲彈の破片創を受けて打倒れ遂に內地後送となり病院船あめりか丸に乘船したが惜しくも九月二十六日船內に於て護國の華と散つた。

氏は志操堅確にして職務に忠實の人今次聖戰に參加するや未だ正規の軍隊敎育をも受けあらざる氏が克く軍人精神に透徹し行動極めて困難なる地形と敵彈雨飛の上海戰場に拘はらず一意上官の命に隨ひ其の職分を全うし遂に聖戰の尊き犧牲

となつた。蓋し盡忠報國の赤誠に燃ゆるの士にして初めて能くし得べき處天晴れ軍民の鑑と謂ふべきである。今や氏が壯容に接すべくもなく痛歎哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の尊き功績は皇軍戰史に牢記せられて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に老いたる祖父等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山口一義

正太線南障附近の夜戰に將兵一體の教訓を殘して玉碎す（戰場美談）

氏は香川縣高松市福田町の人にして亡父を芳太郎母をトクと云ひ大正五年十二月一日に生れ未だ獨身であつた。性明朗快活にして眞摯孝心深く弟を愛護誘掖し事に當るや熱誠にして不屈不撓の氣概を有し人に接するや溫情親切を盡し諸人の愛敬を受けて居た。昭和三年三月同市築地小學校尋常科を優秀なる成績を以て卒業し直ちに高松商業學校へ入學常に良成績を擧げて居たが昭和六年三月父死亡の爲自ら進んで退學し母を慰めて孝養を盡し家業を手傳ひ乍ら青年訓練所へ通學し第一位の良成績を以て所定の課程を修了した。昭和十一年年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に精勵し中隊内第一位を以て上等兵候補者に採用せられ又第一位を以て精勤章を附與せらるゝ等模範兵として推賞せられ中隊長の當番をも命ぜられて居た。

北支の風雲愈々險惡を告ぐるや昭和十二年七月中旬森本部隊梶原中隊に編入せられ中隊指揮班員として勇躍北支警備の爲出動した。斯くて所屬部隊は七月十九日北寧線唐山に到着し同地附近に在りて警備に任じ同月二十九日には天津を攻撃して敵部隊を掃蕩し九月上旬には良鄕附近に位置し第一線の警備に就いて居た。涿州會戰の戰機熟するや所屬大隊は九月十四日夜半良鄕を出發し馬各庄田各庄四世庄夏村双柳樹等房山近傍の諸戰鬪に參加したが氏は敵彈雨飛の中に傳令勤務の重任を果し中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。涿州會戰に勝利を得たる所屬部隊は爾後京漢線西側の高地帶を猛追したが約一週間後には糧食も缺乏し路傍の芋大根茄子等に飢を凌ぎ高粱の韋をかぢりて渴を醫し時には連日連夜不眠不休の强行軍を續けつゝ保定西方地區の敵陣地を突破して京漢線方面の戰勝獲得に重大なる素因を與へ更に石家莊西北方に當る靈壽方向に急進し十月初旬石家莊附近敵陣地の西北鎖鑰たる靈壽附近の堅壘を奪取して滹沱河畔に於ける敵陣地帶の崩壞に重要素因を與へた。

所屬部隊は十月下旬に入り正太鐵道沿線に轉進し山西省方面の戰鬪に參加するに方り所屬中隊は十月二十二日右側支隊の尖兵中隊となり井陘南方南障城より主力部隊と分れて前進し二十三日南障城の南方約六粁の山岳に到着せる時此の附近の小部落たる栄々蘭の南方標高一一三八高地に於て優勢なる敵が天險を利用して支隊の進路を扼しあるを知り中隊は午後四時二十分頃より敵の猛射を浴びつゝ之を攻撃したが薄暮頃氏の中隊は遂に敵陣地に突入して其の第一線陣地を奪取し山上を確守した。然れども其の後方約百米に堅固なる陣地あり敵は之に據て頑强に抵抗しありし爲午後十一時を期し敵の側背より之を夜襲するに決した。然るに此の陣地に接近する爲には唯一條の嶮路あるのみで左は絶壁の岩山屹立し右は懸崖數十丈の谷足下に迫り身の毛もよ立つ天險であつた。其の夜月未だ昇らず空一面靜夜の星明り

であつた。中隊は一列側面縦隊を以て息を殺し地を這ひつゝ敵陣地に肉薄した。それと覺りてか敵の機關銃は突如氣たゝましく火を吐いた。續いて敵火線の小銃機關銃も眩ゆきまでに火焰を吐いて必死の猛射、敵彈岩角に中りては火花を散らして岩石を崩し銃聲山谷に谺して物凄き事云はん方もなかつた。中隊長梶原大尉は突擊號令一下軍刀一閃飛鳥の如く駈け出した。決死の中隊將兵は我おくれじと之に續き右に擴がつて敵陣地に突入した。氏は影の形に伴ふが如く中隊長の直後に疾驅したが地幅を得るや右前方に駈けぬけて忽ち二名の敵を刺殺し獅子奮迅中の中隊長を守つた。憎くや此の時敵彈蝟集中隊長は胸部を射貫かれて撞と打倒れ次の瞬間には氏も胸部に數彈を受け中隊長の右前方に倒れた。中隊長は苦しき息の下から「敵陣地は取れたか山口はどうか」と尋ねた。氏は我が身の苦痛も打忘れ「中隊長殿は／＼は」と叫び續けて居た。今や白兵戰酣にして銃聲手榴彈の爆音の間より裂帛の掛聲が聞えて居た。約十分の後「敵陣地占領！」の報を聞きたる中隊長　「しつかり頼む」「天皇陛下萬歳」の聲もかすかにて滿足の微笑を湛へて瞑目した。同時に氏は「中隊長殿のお供をする」「天皇陛下萬歳」と奉唱して息を引取つた。銃聲絶えて月さし昇り草葉にすだく蟲時雨、此の尊き將兵の遺骸を取り捲いた部下一同は萬感胸迫り誰一人言葉もなく地に跪いて唯すゝり泣きの聲のみ聞えて居た。

氏は至誠一貫に生くるの人、今次聖戰に參加するや選ばれて中隊指揮班員となり俊敏豪膽克く彈雨の中に中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ毎戰戰勝の礎石をなし又中隊長の身邊を案じて片時も忘るゝことはなかつた。而して中隊長と枕を並べ瀕死の重傷を負ひ死期を自覺するや「中隊長のお供をする」の一語を殘し一言私事に及ばなかつた。蓋し此の勇將の下に此の部下あるの感を深くせるは勿論稀に見る戰場美談と謂ふべきである。今や斯かる至誠にして豪膽の士を喪ふ痛歎哀悼の情を禁じ得ざるも氏の功績は其の崇高なる人格と共に皇軍戰史に輝きて其の芳名は百世の下に讃美せられ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山畑義治

勇敢なる機關銃手靈壽附近の戰鬪に決死奮鬪し戰勝の端を開く

氏は和歌山縣日高郡寒川村の人にして父を佐吉母をキヌエと云ひ大正五年一月十一日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして孝心深く人に接して親切圓滿世人の愛敬を受け又事に當るや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和五年三月寒川第一小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて日稼をなし父母の勞力を輕減して家計を助けて居た。昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し上等兵候補者として選拔され又翌十二年六月千葉陸軍歩兵學校へ分遣された。

北支の風雲急を告ぐるや間もなく原隊へ復歸を命ぜられ森本部隊家森機關銃中隊第七分隊二番銃手として勇躍北支平津地方へ出動した。而して七月二十九日天津附近の戰鬪に於ては火葬場方面の戰鬪に參加し沈着周到なる着意に依り聊かも機關銃に故障を起さしめず適切有效なる射擊を以て敵を壓倒し以て友軍第六中隊の戰鬪を有利に進展せしめた。越えて九月十五日馬各庄附近の戰鬪に於ては熾烈なる敵彈を物ともせず果敢なる行動を以て友軍第六中隊の迂回運動に協力し以て所屬大隊の敵陣地包圍の企圖を遂行せしむるの動機を作り翌十六日夏村附近の敵陣地攻擊に方りては所屬小隊は前記第六中隊に配屬せられた。此の際氏は分隊長の意圖に基き最も機敏に活躍して同中隊の第一線陣地の奪取に協力し又敵の逆襲企圖を破碎し尚敵の側背に對する第六中隊の突擊を適切機敏に支援する等重機關銃の卓越せる戰鬪威力を最高度に發揚せ

しめた。

涿州會戰に勝利を得たる所屬部隊は敗敵を猛追して保定附近に進出し更に晝夜兼行石家莊西北方地區に向ひ猛追擊を續行し十月七日靈壽附近北崗上の敵陣地を攻擊するに至つた。敵は北崗上部落の圍壁を堅固に守備せるのみならず地形を利用して部落の西北方地區及部落の西南高地脚に沿ひ重輕機關銃及迫擊砲を配置して頑强に抵抗を試みた。我が第一線部隊は午前九時四十五分より先づ北方地區より攻擊を開始し之に連繫して部落の南方地區に對する攻擊に移り午前十一時過ぎ突入するに至つたが所屬機關銃中隊は終始歩兵戰鬪の骨幹となり其の重任を全うしたのである。氏は其の間克く分隊長を輔佐し敵狀の變化を機敏に觀察して有效適切に敵を制壓し又その退却するを發見するや分隊長の指揮に從ひ敵彈雨飛の中を挺進して適切なる射擊陣地を占め敵に殲滅的の打擊を與へた。

所屬部隊は息をもつかず敗敵を追擊し第二の抵抗線であつた尹凡同高地の敵陣地前に殺到した。敵は部落の圍壁に多數の機關銃を配置し其の圍壁の前方には堅固なる散兵壕を設け我が第一線部隊の近づくを待ちて一齊に火蓋を切つた。我が歩兵砲及砲兵は地形困難の爲追及意の如くならず其の協力を缺くに至つたが敢然として猛攻擊を開始した。敵は豫め周到なる射擊準備を整へありしものの如く其の射彈は正確にして地を這ふ如く薄氣味惡くも氏等の身邊に蝟集して來た。又敵の迫擊砲彈は附近山野の空氣を震はせ乍ら落下炸裂し附近は土砂爆煙渦卷きて物凄く友軍は照準動作さへも不能となつた。此の時氏等の所屬機關銃小隊は全軍の爲犧牲を覺悟して敵前百乃至百五十米に挺進し憎むべき敵機關銃を索め猛射を開始した。彼我の銃砲戰は正に白熱化して來た。やがて敵線に動搖の徵見ゆるや友軍歩兵も敢然として突擊陣地を占領し相前後して猛射を開始せる瞬間突如側方より擊ち出した敵の側防機關銃の爲射手奥村上等兵斃れ裝塡手たりし氏は左頭部より右頭部にかけ貫通銃創を受けて壯烈なる戰死を遂げた。次で銃側に在りし内藤一等兵上鹽上等兵相次で死傷した。時に午後四時二十五分であつた。然れども我が第一線諸隊は氏等の尊き犧牲に依り夕陽將に西山に沒せんとする午後六時怒濤の巖に決する勢を以て敵陣地に突入し接戰格鬪頑敵を粉碎して敵陣地を占領し茲に石家莊陣地帶の一鎖鑰たる靈壽附近の堅壘を奪取し爾後作戰の爲重大なる戰果を收むるを得た。戰場は全く銃砲聲絶えて虫の音繁く此處彼處に茶毘の煙が立ちのぼつて居た。將兵は氏等の尊き遺骸に最後の默禱を捧げ誰からともなくすすり泣の聲起り居並ぶ將兵の涙は徒らに篝火に光るのみであつた。

氏は幼時より具さに艱難辛苦の中に天禀の美德を長成し更に軍隊教育に依り至誠報國の赤誠を玉成した。今次聖戰に參加するや大義の前に私情を去り一意專心必勝の信念を以て超人的の奮鬪を續け皇軍機關銃隊の眞價を發揚して玉碎した。今や其の壯容肇咳に接すべくもなく痛恨哀悼を禁じ得ずと雖も氏の赫々たる武勳は皇軍戰史に輝き其の芳名は傳へて愈々芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勲八等功七級　柳田清忠

後備兵北大容の敗殘兵討伐に傷つくも屈せず尚奮戰玉碎す

氏は北海道函館市大森町の人にして實母(亡)を日角ミワと云ひ明治三十四年八月十日に生れ柳田イシ(亡)の養子となり妻ソメとの間に克之、敬三、進及征子の四子がある。資性溫厚篤實交際圓滿にして大事に臨みては沈着剛膽であつた。氏は又業務に頗る熱心勤勉にして且社會公共の觀念に厚かつた。大正二年三月函館東川小學校尋常科を卒業したが入校以來六年間毎學年共の成績は優等であつた。小學校卒業後は晝間は函館市商報社印刷工として勤務し朝夕は新聞配達を爲し大正十年十二月徴兵として旭川歩兵聯隊に入營翌十一年十月一等兵にて歸休除隊した。除隊後は前職に復職し前後通じて勤續十年遂に職工長となつた。此の間四回に亘り函館市印刷組合より勤續表彰狀及紀念品を附與せられ又在鄕軍人分會大森班役員次で副班長に推され昭和十二年には在鄕軍人會長井上大將より模範會員として表彰せられ又自警隊役員として公共に奉仕し昭和十一年御親閲の際は警備係として奉仕し御下賜金を拜受し且北海道廳より感謝狀記念品を附與せられ同八年皇族殿下御渡道の際も亦同樣の記念品を授與せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召堀越後備歩兵大隊佐野中隊に編入角田小隊水間分隊小銃兵として八月十七日勇躍征途に就いた。而して北支に到着し九月十二日より北寧線鐵道警備に服務中九月二十日午後六時半角田小隊の二個分隊氏等二十六名は臨時第一中隊上田隊に配屬せられ松崎准尉の指揮に屬し河北省北大容附近を占據せる敗殘兵を討伐すべき任務を受け午後八時十五分塘沽驛を出發軍糧城驛に下車し鼓に松崎准尉の指揮下に入り二十一日午前一時軍糧城を出發該地を距る二里半北大容に向つた。此の附近一帶は甚しき濕地にして道路は泥濘膝を沒し實に二里半を突破するに六時間を要せし程であつた。氏等は其の難行軍を續け途中敵の小斥候を驅逐し又土匪を捕へて敗殘兵の巣窟を確かめ目的地に達せしは實に午前七時三十分であつた。而して直ちに此の敵を攻撃すべく準備せんとするや忽ち敵より猛射を浴びせ來つた。敵は兵力約百五六十名にして我に二倍し自動小銃手榴彈等を有し占據地直前には滿々と水を湛へたる幅約四間の川を控へしかも此の川は僅かに二條の橋梗を有するのみで之を障碍に利用し堅固に陣地を占領してゐた。討伐隊は直ちに攻撃を開始し

氏は左分隊内にありて敵彈雨や霰と注ぎ來る中を分隊長指揮下に躍進又躍進し其の停止するや沈着正確なる射撃を以て敵に逐次損害を與へて制壓しかくして敵の左翼に向ひ攻撃前進せしが敵は頑强に抵抗して容易に怯む狀態もなかつた。討伐隊は益々火力を發揚し遂に困難なる敵陣地直前の橋梗を勇敢に突進して敵に肉薄した。然るに氏は敵前二十米に於て右腕に貫通銃創を受けた。併し剛毅の氏は更に屈することなく此の頃漸く敵兵動搖の色あるを見戰友と共に銃劍を揮つて率先敵陣に突入せんとして發進せる刹那更に胸部に貫通銃創を受け遂に其の場に昏倒するに至つた。軈て收容せられ軍病院に入院衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく同日午後八時十分遂に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。しかし氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより約二倍の敵に對し二時間に亘る激戰後之に多大の損害(遺棄死體三十六捕虜十六)を與へ午前九時三十分敵根據地を覆滅することを得たのであつた。

氏鄕にあるや家計裕かならざる中に克く公共の爲に盡し今次召されて戰場に臨むや北寧線の警備に日夜萬難を排して努

力奮勵し其の敗殘兵討伐に際しては彈雨の下率先勇敢傷つくも屈せず奮戰力闘以て寡兵克く衆敵を潰滅し鐵路の警備を完うして遺憾なかつた。實に此の如きは家を忘れ身を棄て斃るるまで任務に邁進せんとする盡忠至誠の發路と謂ふべきである。參戰日ならずして北支の華と散りしは惜しみて尙餘あるも一戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は萬世に亘り皇軍戰史を飾り其の芳名は千載に謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護し且愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　山下市次郎

忠孝兩全の勇士津浦戰線に活躍し遂に李家寨の華と散る

氏は兵庫縣赤穗郡相生町の人にして父を市之助母を小初と云ひ明治四十五年一月五日に生れ妻君枝との間には未だ愛子がなかつた。性温良着實にして孝心深く克く業務に精勵し人に接して親切丁寧であつた。大正十三年三月相生尋常小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひ孝養怠りなく昭和七年一月徴兵として姫路歩兵聯隊へ入營し誠意軍務に勉勵して良成績を擧げ翌八年二月滿洲事變に從軍して各地の警備討伐の重任を全うし功を以て勳八等に叙せられ翌九年二月凱旋の上滿期除隊となつた。歸鄕後は一家の柱石となり家業に精勵し着々良兵良民の實を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊森本中隊に編入せられ第三小隊第一分隊兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し所屬大隊は八月二十一日より二十八日にかけ天津南方運河地區を固守しありし潮宗橋及趙連庄附近の敵陣地を擊破し以て馬廠本陣地攻撃の爲重要據點を占領するに至つたが當面の敵は堅固なる掩蓋陣地に依り各種火器を以て我が軍を猛射し其の陣地前は堤防の決潰に依り大汎濫となり極めて困難なる戰鬪であつた。氏は其の間率先難局に當り敵の彈雨を冒して活躍し所屬中隊の任務遂行に寄與する所大であつた。其の後九月初めより三間房方面へ轉戰し陳官屯方面へ南進した。而して馬廠本陣地の總攻撃に於ては夜襲を以て運河西方地區の堅壘丁莊附近の敵陣地を奪取し赫々たる武勳を奏した。敵兵總退却に移るや機を失せず猛追撃に移り先づ青縣附近に蠢動する敵を一蹴し九月十三日興濟鎭附近の敵を撃破して同地を占領し爾後滄州會戰を準備するに至つた。然るに戰場一般の地形は到る所泥濘膝を沒し高粱繁茂して指揮連繫甚だ困難であつたが氏は克く分隊長を輔佐し分隊の中堅となり分隊の團結を鞏固ならしめた。又敵は到る處既設陣地に據りて頑强に抵抗し晝夜を論ぜず小銃機關銃並に迫撃砲の亂射亂撃を浴びせ來りしが氏は歴戰の勇士として克く戰機を捉へ率先範を垂れて分隊長の指揮を容易ならしめ且戰友の攻撃前進を誘起する等沈着豪膽滿洲事變以來

同一分隊の戰友たりし所屬分隊長の爲には眞に其の片腕であつた。

九月十七日所屬部隊は滄州陣地帶の前進陣地の一角たる高官屯を奪取し續いて翌十八日には同一大隊内の野條中隊が李家寨を奪取せんが爲力攻したが敵は地形を利用し且優勢なる兵力を以て執拗に反撃を加へ來り危殆に陷つた。玆に於て所屬大隊長は氏の所屬中隊に之が救援を命じた。玆に於て所屬中隊は同日午後四時二十分行動を起し午後九時三十分頃漸

く李家婁の西側を流るゝ運河に達し之を渡河した。李家婁部落の南側及其の東北方よりは激烈なる銃聲が聞えて來た。敵は我が救援隊の來着を知りてか李家婁の北方地區にも小銃、チェッコ機關銃の銃聲起り運河東側の堤防線卽ち中隊の進出點に猛射を浴びせ來り全く氏の所屬中隊も半圓形の包圍圈内に進入したのであつた。氏は率先運河を渡り堤防の斜面を攀ぢ登り所命の堤防線を占領した。氏は先づ所屬中隊の堤防線に進出する動作を容易ならしむる目的を以て李家婁東北方の最も活躍中の敵輕機關銃を索め正確迅速なる射擊を以て瞬く間に之を壓倒した。次で他目標に射向を變換せんとする一刹那無念！　一彈飛來左胸部に貫通銃創を受け微かにも「天皇陛下萬歳」と奉唱し壯烈なる戰死を遂げた。然れども氏等の勇戰奮鬪に依り所屬中隊は困難なる運河を渡河して堤防線に取りつき以て迅速に攻擊の態勢を整へ激戰の後取敢へず第七中隊の危急を救ひ九月二十日午後七時李家婁の堅壘を奪取するに至つた。

氏は孝行息子として近隣の敬愛を受け軍に從ふや義には滿洲事變に參加して赫々たる武勳を奏し今次聖戰に參加するや終始泥濘に惱まされ又飢渴に苦みつゝも默々として自己の職分に邁進し而も劍電彈雨の中に從容自若克く中堅人物として分隊に重きをなし適切機敏に其の卓越せる射擊技能を發揮し以て中隊戰力の尊き礎石をなして居た。寔に是良兵良民の鑑とすべきであつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛惜の情を禁じ得ずと雖も氏が隱れたる累次の功績は天晴れ皇軍戰史を飾りて芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　山本隆

毎戰身の危險を顧みず勇戰奮鬪惜しくも唐官屯の陣前に散る

氏は岡山縣勝田郡河邊村の人にして父を方之助母を政江と云ひ大正三年四月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性正直眞面目にして氣概に富み家業に熱心忠實であつた。昭和四年三月河邊小學校高等科を卒業引續き同村公民學校に入校同六年三月同校を卒業し尙續いて青年訓練所に通ひ同八年一月入營の爲退所した。同年十二月現役志願兵として岡山歩兵聯隊に入營機關銃隊に編入せられ間もなく同月滿洲に派遣間島省局子街に駐屯して警備の任に服し翌九年五月内地に歸還し事變の功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はり同十年十月滿期除隊した。其の後は農業に從事し傍河邊青年團支部長及更生團員として村青年の指導と居村の更生に靈瘁し又消防手として公共に貢獻せる所尠くなかつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊第一機關銃中隊に編入第四小隊第八分隊六番銃手として同月十日勇躍征途に就いた。而して北支戰線到着後八月二十一日畢庄子の攻擊には彈藥手として猛烈なる敵火の下勇敢に彈藥の補充に活躍し次で二十二日東邊庄の攻擊には當初彈藥補充に任じ戰鬪半ばにして上野上等兵戰死するや代りて裝塡手となり死傷續出する慘烈の中に在りて克く沈着正確なる操作により聊かも射手の猛射擊に支障なからしめ更に二十九日陳官屯の攻擊に際しては一番銃手として敵彈雨飛の下長距離に亘り勇敢迅速に銃を搬送し機を失せず所命の陣地に進入して適時機關銃の威力を發揚せしむる等此の間死傷其の他の關係上任務の交代變換ありしも每戰危險を顧みず其の時々の任務に全力を傾倒して奮鬪し以て所屬隊の任務達成を容易ならしめた。

九月三日所屬小隊は大隊の右第一線たる第四中隊に配屬せられ唐官屯攻擊の爲午後一時攻擊準備の位置に就きしが第四

中隊は午後六時より三百米前方の獨立家屋附近の敵に對し攻撃を開始した。小隊は第四中隊の攻撃開始の瞬間を逸せず現在地の前方制高地點に不意に陣地進入し其の攻撃に協力せんとするや氏は引續き一番銃手として小隊長意圖の如く一擧に銃を搬送して迅速に銃を据ゑ其の疾風迅雷的猛射撃を以て遺憾なく敵陣地を制壓せしめ其の結果第四中隊をして敵の一彈をも蒙ることなく敵陣地前の要點獨立家屋に突入之を占領することを得せしめた。又此の猛烈なる連續射撃間氏は灼熱せる銃身に多大の危險を冒して持來りたる水を注ぎ之を冷却して其の射撃をして支障なく繼續することを得せしめた。所屬小隊は第四中隊が該地を占領すると共に之に追隨して同地に進出するや時既に暗く百米を隔てゝ敵と激烈なる夜間戰鬪を演じたるも克く奮鬪之を撃退し翌四日第四中隊は唐官屯の堅固なる敵陣地に對し午前八時より攻撃前進を開始し此の際第八分隊は之が支援の爲獨立家屋南側の陣地に進入すべく分隊長は敵彈熾に飛來しつゝある中を前進して獨立家屋圍壁の門を押し開くや氏は之を待ち受け敢然猛烈なる敵彈下に銃を据ゑしかも之を終るや挺身して勇敢にも敵火の下に敵情を監視しありしが無念右側銃眼より飛來せる敵彈氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし所屬部隊は氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより敵に多大の損害を與へ午前十一時三十分さしも頑強なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏や素と正直にして敢爲の氣概に富んで居たが其の戰陣に臨むや彈雨の下に有ゆる危險萬難を排して彈藥の補充に裝塡に或は銃の搬送に殊に篠つく雨の如き敵彈の中に突進して銃を据ゆる等常に身の危險を顧みず唯々機關銃の威力發揮に全力を傾倒して已まなかつた。かくの如きは畢竟一身を君國に捧げて斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして津浦沿線に散りしは洵に痛惜に堪へざるも氏が奮戰力鬪して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　安井良一

斥候として勇敢敵陣地前に活躍奮鬪して人合庄に散る

氏は兵庫縣宋粟郡山崎町の人にして亡父を辰次郎母をそよと云ひ明治四十一年二月十日に生れ妻ユキとの間に愛兒良治を擧げた。資性溫順而も處事積極的にして爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。大正十三年三月神戸瀧川中學校第二學年修了後家事の都合にて退學し爾來母を扶けて家業に從事し傍青年訓練所に通ひ昭和二年十二月其の課程を修了した。昭和四年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵十一月には一等兵に進級し同五年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊岩田中隊に屬し輕機關銃彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し爾後連日連夜泥濘膝を沒する惡路を冒して前進を續け九月七日より十二日に亘る馬廠附近の戰鬪に際しては部隊豫備隊として戰鬪に參加したが其の追撃に際しては所屬部隊は其の健脚を發揮して敵を猛追撃し以て滄州附近の攻撃開始せらるゝや九月廿日所屬中隊は大隊の第一線となり高官屯に於て諸準備を整へ同夜十一時同地を出發し逐

次敵に近接して人合庄の敵陣地前四百米に到着した。當時氏は中隊の豫備隊たる小隊内にありて明日の攻撃を準備すべく敵情地形の偵察に活躍中敵は數次に亘りて夜襲し來りしも其の都度率先奮闘して之を撃退した。翌廿一日も所屬中隊は引續き敵情地形の細部に亘り偵察を續行せしが敵の歩砲火は熾烈にして其の偵察は容易ではなかつた。併し日没頃漸く攻撃準備を完了するや午後五時友軍の砲撃開始と同時に攻撃前進を開始した。敵は其の陣地前に幅四米深さ二米の水濠と其の後方に網形鐵條網とを繞らし堅固に陣地を占領してゐた。氏の小隊は此の時尚中隊の豫備隊として熾烈なる敵火を冒して第一線の後方を屈身或は匍匐しつゝ前進し遂に敵前二百米にまで到達することを得た。時恰も第一線小隊は右側方よりする敵の側防機關銃火熾烈なりし爲攻撃前進は素より水濠渡河の爲の架橋作業を必死となりて實施せんとせしも到底不可能の狀態なりし爲此の敵側防機關銃を制壓し兼ねて右第一線中隊たる第六中隊との連絡並に敵陣地の左翼を偵察せしむべく中隊長は豫備隊の小野山小隊長に命じた。小野山小隊長は直ちに部下若干を率ひ將校斥候として出發せんとするや氏は進んで此の斥候に加はらん事を申出で許されて勇躍出發した。當時敵彈は愈々烈しく而も此の附近の地形は遮蔽すべき小地物すらなく敵前至近の距離に於ける横行行動は極めて危險なりしにも拘はらず斥候長以下身を屈し或は匍匐して一進一止遂に敵前四十米附近の地點に進出した。然るに第六中隊は人合庄部落を右に迂回して攻撃中なりし爲所屬中隊との間隔は逐次擴大し爲に斥候は敵の唯一の目標となりて其の猛射を受け行動愈々困難に陷りしが氏は敵彈身邊に集中するも之に屈

せず分隊長指揮下に活潑に彈藥を運送して輜機の火力を最高度に發揚せしめ遂に敵の側防機關銃を制壓し當面の敵をして抵抗を斷念して後退するの已むなきに至らしめ爾後必死となり敵陣地の狀態を詳細に偵察し又第六中隊との連絡をも確保し其の重任を完うして二十二日の未明を利用し歸還せんとするや無念敵彈前頭部を貫き遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戰奮闘と尊き犠牲とにより爾後の戰闘容易となり午前九時頃には敵に多大の損害を與へてさしも頑強なりし人合庄の敵陣地を奪取することを得た。

氏は元來諸事に熱心積極的にして遂行せざれば已まざるの人であつたが其の戰陣に臨むや斥候として或は輜機關銃手として彈雨の下率先勇敢萬難を排して克く其の任を完うし中隊戰勝の因を爲して遺憾なかつた。實に斯くの如きは家をも身をも打忘れ君國の爲其の本分に邁進し斃れて後息む靈忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。聖戰幾何もなくして氏の如き勇士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に讃はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　山本繁雄

温良忠實の勇士津浦沿線に活躍し遂に臨邑郊外の華と散る

氏は兵庫郡加西郡北條町の人にして亡母をかねと云ひ明治四十五年三月八日に生れ未だ獨身であつた。幼にして兩親に

別れ叔父由松氏に養育せられて人と爲つたが性溫良にして而も大膽沈着事に當るや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。大正十三年三月北條尋常小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひ拾九歲の時大阪に出でメリヤス商店に入り勤續し昭和八年一月徵兵として姫路步兵聯隊へ入營し滿洲事變に從軍して滿洲各地の警備討伐に從事し功を以て勳八等白色桐葉章を賜はり輝かしく滿期除隊した。歸鄕後は再びメリヤス業に從事し誠實勤勉良成績を擧げ諸人の厚き信賴を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月上旬應召沼田部隊森本中隊に編入せられ第三小隊兵員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し所屬安永大隊は先づ天津南方運河地區の敵を掃蕩すべき命を受け八月二十一日より二十七日にかけ潮宗橋趙連庄及小王莊の敵陣地を攻擊し苦戰の後之を奪取し任務を完了した。當時北支は數十年來稀有の豪雨降り續き到る處道路泥濘膝を沒し又氏等の作戰地域は高粱密生水流多く尙敗殘部隊所在に出沒し行動極めて困難であつたが氏は克く各種の困苦缺乏を克服し一意上官の命に從ひ豪膽機敏に活躍し所屬中隊の任務遂行に寄與せる所多かつた。

其の後所屬大隊は九月二日以後津浦沿線三間房方面に轉進し陳官屯に於て爾後の行動を準備して居た。九月七日以後馬廠本陣地に對する總攻擊を開始せらるゝや所屬部隊は馬廠陣地の一鎭鑰たりし丁莊の堅壘を奪取すべき命令を受けた。氏の大隊は部隊主力に屬し北方正面より之を攻擊し東方正面よりの攻擊成功と相俟ち見事に此の堅壘を突破し其の後同月十一日靑縣へ向け追擊前進するや有力なる敗殘部隊尙附近各所に出沒する中を物ともせず頗る勇敢に行動して之を驅逐し十三日には興濟鎭附近の敵陣地を占領して之を確保した。所屬部隊は更に津浦線上敵が最後の抵抗線と恃める滄州附近の敵主陣地に對し九月十八日先づ李家婁の前進陣地を奪取し次で馬落坡及張新庄の本陣地を攻擊した。將兵一同は連日連夜追擊の疲勞と給養の粗惡に加へて泥濘と高粱畑の障碍の爲指揮連繫極めて困難なる狀況下に夜襲を行はれたのであつたが氏は常に志氣旺盛克く上官の命令指示に基き一意職分に邁進し以て所屬中隊の戰鬪に甚大なる貢獻を致し爾後德州への追擊戰鬪に移り伯頭鎭附近に勇戰して驍名を馳せ十月上旬德州へ入城し同月下旬まで同地の警備に就いて居た。

所屬部隊は其の後黃河北岸の掃蕩戰に參加するに至つたが敵は濟南方面より增援隊を得て臨邑方面へも有力なる敵の救援隊が北上中であつた。所屬中隊は十一月十三日同方面に進出しある友軍救援の爲德州を出發し先づ夏口鎭に向ひ前進した。午後四時半頃三官庄に到着するや山砲及追擊砲を有する約一箇聯隊の敵部隊に衝突した。此の時所屬中隊は敵の右側背を包圍攻擊する任務を以て斷乎之を攻擊したが氏は敵砲兵の猛烈なる集中火を意とせず勇敢に前進を續け敵の輕機關銃を制壓して所屬中隊の攻擊前進を容易ならしめ更に攻擊前進中不幸敵の榴霰彈は頭上に破裂し左胸部に砲彈破片創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併し所屬中隊は此の日戰鬪夜に入つたが遂に敵に多大の損害を與へて之を潰亂敗走せしむるに至つた。氏は溫厚にして而も沈勇の人、今次聖戰に參加するや終始泥濘氾濫の戰場に於て常に上官の命に從ひ幾多の辛酸を克服し敵の彈雨を冒して勇戰し突破戰線實に一百里黃河北岸地區に於ける掃蕩戰の中途遂に臨邑郊外の華と散れるは痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏が忠誠は累次の功績と共に天晴れ皇軍戰史に輝き其の芳名は永く後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　谷口純一

猛火の下進んで彈藥補充を完遂し遂に姚官屯の華と散る

氏は鳥取縣八頭郡智頭町の人にして父を辰治母をまさと云ひ大正三年十月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして孝心深く弟妹を慈しみ且報恩感謝の念厚く又事に當り頗る熱心にして爲し遂げざれば已まざる氣概を有してゐた。昭和四年三月智頭小學校高等科を卒業し其の後神戸市に出でブリキ職工として斯業に勵むこと七年雇主の信賴厚く同輩の敬慕せる所であつた。昭和十年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵在隊間精勤章を授けらるること二回同十一年十一月善行證書を附與せられて滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊坂口機關銃中隊に屬し第一小隊第二分隊五番彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し九月馬廠附近の戰鬪に際しては九日夜攻擊前進の命下ると共に氏は暗夜而も泥濘の惡略を不屈不撓膂力搬送して前進し愈々射擊開始となるや彈丸雨飛の中を疾驅して彈藥補充に任じ遺憾なく機關銃の威力を發揮せしめ其の追擊に當りては疲勞困憊にも拘らず堅忍不撓勇敢に猛進し中隊の任務達成を容易ならしめた。次で九月二十一日より愈々滄州附近の攻擊開始せらるるや所屬中隊は二十一日午後四時より人合庄の敵陣地に向つて行動を起し午後五時より攻擊を開始した。此の附近の地形は到る所溫潤にして機關銃の行動頗る困難なりしも氏は之に屈せず巧に地形を利用して銃を搬送敵に近接し轟て小隊は右第一線として第十中隊正面より攻擊前進を命ぜらるるや雨飛する敵彈の中を勇敢に所命の方面に前進して陣地に進入し分隊が射擊を開始するや活躍奮鬪機を失せず彈藥を補充して機關銃の猛烈なる射擊に支障なからしめ且積極的に目標の發見並に陣地の警備に任じ以て分隊の射擊威力を遺憾なく發揮せしめ翌二十二日朝には人合庄の敵陣地を奪取することを得せしめた。

續いて二十三日早朝より我が砲兵の支援射擊下に姚官屯に向ひ攻擊を開始せらるるや敵は我が前進を阻止すべく猛烈なる射彈を集中し來り爲に戰況容易に進展しなかつた。斯くて對戰夕刻に及びし爲機關銃彈藥の射耗甚しく而も其の補充は敵火猛烈にして容易に出來なかつた。此の時氏は進んで之が補充の任にあたらん事を申出でた。當時敵彈は一層烈しく恰も篠つく雨の如くであつたが氏は今彈藥を補充せざればと身の危險も顧みることなく戰友三名を連れ勇敢に出發約八百米後方の彈藥集積所の位置に到り重き彈藥箱を一箱宛抱へて銃側に運び斯くの如くすること數回其の最後の彈藥を携へ陣地に歸るや其の時恰も午後五時頃無念敵彈左胸部を貫通し其の場に倒れた。軈て收容せられて天津陸軍病院に入院衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく遂に翌二十四日午後三時惜しくも護國の華と散つた。併し氏の決死的補充により分隊は射擊を繼續し遺憾なく其の威力を發揮してさしも頑强なりし敵陣を翌朝奪取することを得たのであつた。

氏は在鄉在隊間を通じ終始一貫精勤模範的の人であつたが其の戰陣に臨むや有ゆる危險困難を克服し每戰彈藥手の任を完うして遺憾なかつた。殊に姚官屯に於ける彈藥補充の行動に至りては旺盛なる責任觀念の軌範と謂ふべく實に斯くの如きは一身を君國に捧げ斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑とすべきである。征戰幾何もなくして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮鬪以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武

人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山本秋義

斥候の重任を果して馬廠攻撃の華と散る

氏は鳥取縣八頭郡佐治村の人にして亡父を甚藏母をきぬと云ひ大正五年十一月七日に生れ未た獨身であつた。資性温順眞摯にして責任觀念强く村内の模範青年として其の將來を囑目されてゐた。昭和四年三月佐治第一尋常小學校を卒業し爾後專心家業に精勵し同十二年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入隊只管軍務に精勵上下の信望を蒐めて居た。

支那事變勃發するや長野部隊中川中隊に編入せられ八月上旬勇躍征途に就いた。斯くて北支戰線到着後馬廠攻撃準備のため所屬中隊は九月一日南孫屯に派遣せられ該地を捜索據點として專ら敵情偵察に任じて居たが同月四日氏は小林少尉の指揮する將校斥候の一員に選拔せられ揚莊子及康莊子附近の敵情地形特に水濠の偵察任務を受けて午後一時過ぎ南孫屯を出發した。此の揚莊子、康莊子附近敵前一帶の地は氾濫地帶にして往々水深腰に達し剩へ高粱高く繁茂して行動頗る困難而も敵は巧に陣地を僞裝せる爲其の偵察の困難は想像以上のものであつたが氏は克く斥候長の意圖を體し萬難を排して偵察を遂げ有利の報告を提供した。斯くて揚莊子の偵察を了へ續いて浸水地帶を康莊子に向つて潛行し豪膽にも敵前四十米の地點に迄侵入し敵陣地特に重機關銃等の配置を偵察して將に斥候長の許に歸らんとせる時惜しくも敵の發見する所となり數百の敵は俄然猛射を浴びせて來た。氏等は一刻も早く偵察事項を報告せんとして高粱に遮蔽しつつ漸く敵より約百五十米を離脱せし頃無念氏は胸部に數彈を受けて壯烈なる戰死を遂げた。併し斥候長は氏等の勇敢熱心なる偵察に依り貴重の報告を爲すを得其の結果は所屬隊の戰闘計畫立案に甚大なる貢献を爲したのであつた。

氏の軍務に服するや眞摯着實日夜精勵其の成績優秀であつたが今次聖戰に臨むや重要なる將校斥候の一員に選ばれた。氏は之を無上の光榮とし有ゆる困難危險を冒して豪膽にも敵前至近の距離に到り仔細に偵察を遂げ斥候長に貴重なる報告を呈した。之實に任務の爲には斃れて尚息まざる旺盛なる責任觀念の發露にして畢竟盡忠至誠の顯現である。參戰幾何ならずして此の忠誠勇敢の士を喪ひし事は惜しみて尚餘りあるも氏が萬難を排して死地に偵察したる事項は馬廠攻略の一素因ともなり其の活躍は職責尊重の龜鑑として千載に亘り皇軍戰史に輝き芳名は千古に傳へらるべく英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尚も皇國を守護し一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。因に氏の長兄益藏氏も同じく北支に出征奮闘中である。斯く一家より兄弟揃つて報國の至誠を拔んづること家門の榮譽は申すまでもなく國民亦齊しく感謝と讃仰に堪えない次第である。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（OS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山本秋造

外長城線の各戦闘に奮戦し惜しくも張家口郊外に玉砕す

氏は東京市荒川區日暮里町の人にして實母を横田うめ養父（亡）を才次郎と云ひ大正五年十月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして實行力に富み又責任觀念强く遂げずんば息まざるの氣概を有し人に接しては明朗快活にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和三年三月日暮里第二尋常小學校を卒業し其の後は川崎市堀川町の仁上自轉車店に入り精勤七箇年實直なる青年として再三表彰せられた。昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營し間もなく渡滿の壯途に就き二月上旬新京着同地の警備に任じ乍ら初年兵の教育を受け誠意軍務に精勵して良成績を擧げ上等兵候補者を命ぜられた。五月上旬に至り新京警備の任を解かれ齊々哈爾の主力部隊に合した。六月下旬滿蘇國境カンチヤヅ島事件突發の爲氏の所屬大隊は事態最惡の場合に對處せんが爲孫吳方面に出動したが氏は第一線部隊として大黑河附近に出動し異常の緊張裡に赤軍の行動を監視して居た。幸に其の後事件も落着し七月中旬齊々哈爾へ歸還した。

然るに其の後北支に於ける物情は日を追ふて險惡を加へ來り七月下旬氏は湯淺部隊谷中隊に編入せられ第二小隊第二分隊輕機關銃手として硝煙渦捲く北支方面へ出動するに至つた。斯くて所屬部隊は八月初旬以來天津附近の警備に任じ優勢なる支那軍を掃蕩して不逞の企圖を挫折せしめ速かに警備地域の治安を維持するを得た。

八月中旬所屬部隊は特別任務に基き天津を出發し熱河省多倫を經て同月十七日張北に到着暫らく同地の警備を擔任して居た。二十日長城線の敵陣地に對する攻撃命令下るや所屬中隊は午後五時行動を起した。夜に入り冷雨そぼ降りて軍衣を透し將兵は寒冷に震ひながら前進を續けた。敵は山岳險峻の長城線に蟠踞しトーチカ壕壕地雷及鐵條網などを設けて鬪志滿々抗日意識に燃えて居た。翌二十一日天明と共に我が砲聲一發濕氣を帶びた曉の空氣を震はせながら嶺また谷に轟き渡つた。是我が砲撃開始の合圖である。續いて殷々たる砲聲爆煙と共に土砂材料を中天に舞ひ揚げ乍ら一彈又一彈陣地の要點が破壞されて行く、敵砲兵も之に應戰して猛射を浴びせて來た。所屬中隊は所屬山本大隊の第一線として午前八時より攻撃前進を起した。中隊は地形を利用して躍進午前十時激戰の後長城の一角を占領した。夕刻より降り出した山雨は遂に風雨雷鳴の物凄き荒天となつた。されど既に命を授げ出した氏等には馬前の塵程にも値しなかつた。氏は所屬小澤小隊の決死隊に加はつて午後七時頃前面のトーチカ目がけて突入し見事に之を占領した。だが敵は長城線の南側地區に尙幾つかのトーチカ陣地に據り頑强に死守して居た。夜陰に乘じて敵の側背から急襲するに決した氏の中隊は峻坂を攀ぢ溪谷を渡り戰車壕を跳び越えて午前十時敵陣地の背後二百米に兵力を集結し夜襲の準備を整へた。黑影の一隊は忍び足に敵線に近づけば忽ち敵歩哨の誰何！　あわてふためく敵部隊は銃口火を吐いて亂射亂撃を初めた。之に屈せず怒濤の如く突入した我が將兵は疾風迅雷的の接戰格鬪遁げ惑ふ敵を芋刺し袈裟斬り死屍累々たる中に小癪にも掩蓋陣地より猛射を浴びせる敵を發見した氏等は憤然として其の入口に殺倒し之を殲滅した。附近に地響きをあげて爆發する地雷も一入悽愴を極めて居たが氏の小隊は逸早く午前零時には最高所の敵陣地を占領し更に息つく暇もなく敗敵に尾して萬全方向に猛追撃に移つた。明くれば二十二日午前七時夜來の山雨全く晴れ渡り水魁附近に差しかゝつた。突如山上の敵兵數百名より猛射を浴びて

死傷續出するに至つた。已むなく陣地を構築して夜襲するに決した。夜に入りて敵兵約一千名の逆襲を受けたが氏等は近寄るを待ちて之に殲滅的打撃を與へ直ちに追擊戰に移つた。然るに山上に圖太くも雜草にかくれて居た敵機關銃は間斷なく我を掃射し敵砲彈は何處からともなく身邊に落下炸裂して居た。戰友の若林射手は萬歳と唱へ打斃れた。「射手は自分が代ります」と輕機を執り上げた氏は「若林仇は俺がとつてやるぞ」と銃を据え敵の重機を索めて撃ちのめし同夜午前一時敵中深く侵入して同高地を突破し二十三日午前五時萬全を占領した。八月二十五日所屬部隊は敗敵を掃蕩しつゝ張家口を距る數里に進出し茲に北京と大同を繋ぐ京綏線を完全に遮斷した。翌二十六日朝高所に登りて東方を眺むれば張家口の城壁は陽光を浴び墨繪の如く浮んで居た。將兵の胸は躍りて尙も前進を續け城壁を距る約二里の沈家屯附近に差しかゝつた。突如前方部隊が敵と遭遇したらしく前面の高粱畑の中に氣たゝましき銃聲が起つた。敵は永定河上流の合流點附近に堅固に陣地を占領し且巧に僞裝を施し我が軍の現出と共に各種銃砲を以て釣瓶撃ちの猛射忽ち我が第一線の死傷續出するに至つた。時を移さば友軍との連絡は斷たれてしまふ。部隊長は意を決して積に迂廻するやう命じたが其處にも敵陣地ありて戰鬪は膠着した。所屬中隊は敵の最左翼より包翼を命ぜられ一進一止移動を初めた。特に氏の小隊は右第一線となり最外線を迂廻したが此の時敵は所屬中隊を目がけて猛射して來た。氏は輕機關銃手として數名の戰友と共に敢然積の小高き處に取りつき銃身も焼けん許りの猛射を加へ要點の敵に大なる損害を與へし一刹那無念！　一彈飛來腹部貫通の銃創を受け打倒れた。「山本どうした確かりせい」と戰友が勵ませば「うん大丈夫だ」と其の手はふるへ乍らも尙銃把を握つて居た。衛生兵は彈雨を冒して氏を收容した。中隊長が懇ろに見舞へばかすかにも「天皇陛下萬歳」と唱へ同日午後二時半頃惜しくも戰場の華と散つた。併し所屬部隊は氏等の尊き犧牲に依り翌朝當面の敵を粉碎して同日中に張家口に入城した。

氏は滿洲警備の重任を完うし更に外長城線の山岳地帶に於ける聖戰に參加し幾多の辛酸と危險とを意に介せず一意君國の爲に身命を捧げて勇戰奮鬪し每戰赫々たる戰勝に尊き素因を與へ遂に張家口郊外に玉碎した。是至誠一貫攻撃精神横溢の士にして初めて能くし得べき所眞に皇軍精兵の鑑と謂ふべきである。今や斯かる忠勇の士を喪ふ痛歎哀悼禁じ難しと雖も氏の功績たるや天晴皇軍戰史に輝きて芳名を後世に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に養家實家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山田久三郎

勇敢なる通信手克く其の任を果し遂に拒馬河畔北相夜襲に玉碎す

氏は茨城縣結城郡名崎村の人にして父を芳藏母をせいと云ひ大正三年十一月六日に生れまだ獨身であつた。資性温良にして而も難事を斷行するの氣概に富み且父母に仕へて至孝弟妹に對して慈しみ深く模範青年として村民一般の敬愛を受けて居た。昭和四年三月名崎高等小學校を卒業し爾後家業を手傳ひ十年一月徴兵として水戸歩兵聯隊に入營熱心軍務に勉勵し成績優良であつた。特に銃劍術に長じ屢々賞狀を附與された。氏は又休日には自宅に歸りて終日農事を手傳ひ在隊間は八十圓を貯金し大いに父母を悦ばしめ十一年七月滿期除隊となり益々家業に精勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月中旬應召石黑部隊に編入され堀江通信班に屬し通信手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は降雨泥濘飢渇の難行軍を續けて永定河北岸地區に進出し同河對岸の敵に對し渡河攻撃の準備に着手した。此の時氏は第一有線班に屬し部隊本部を起點とし上級兵團司令部間に電話網を構成し不眠不休の活動を續けて重要

なる通信連絡に遺憾なからしめた。斯くて九月十四日所屬部隊が永定河を敵前渡河して對岸敵陣地を攻略するや氏は敵火を冒して敏速撤收部隊本部に追及し所屬部隊をして敵陣攻略後の急追に支障なからしめた。續いて所屬部隊は敵を猛追し十六日拒馬河畔に進出した。當時敵は拒馬河對岸一帶に縱深陣地を堅固に構築し配するに優勢なる兵力を以てし其の勢侮り難き狀況であつた。又拒馬河は川幅約百米剩へ連日の豪雨に依り一時に增水し濁流滔々として水深一米六〇内外に達し敵は之を利用して我を陣地前に擊滅すべくいきまいて居た。之より先我が坂西部隊は十五日晝間に渡河を强行し對岸の敵陣を攻擊中であつたが此の日屢々優勢なる敵の逆襲を受けて苦戰に陷り爲に所屬部隊本部並第二大隊は之を救援すべく十六日夜二時より渡河を開始し敵火を冒して第二大隊主力は坂西部隊の右方に展開して當面の敵を攻擊し部隊本部通信班並に第八中隊は部隊長自ら指揮し第二大隊の左翼方面より北相北方敵の第一線陣地の一角に向つて夜襲することゝなつた。氏は此の夜襲に依然通信班に屬し小銃手として參加したのであるが敵は迫擊砲及機關銃等を以て切りに亂射した。然し部隊長の率ゆる部隊は猛火を冒して敵に肉薄し不意に手榴彈を投擲して敵を震駭せしめ其の瞬間一擧敵陣に突入した。此の時氏は猛虎の勢を以て率先敵陣に突入し銃劍を振つて奮戰格鬪次ぎ〳〵に敵を刺殺し其の得意の銃劍術は實に目覺しきものであつた。斯くて部隊長以下氏等は第一線陣地を奪取し息をもつがず所在の殘敵を掃蕩しつゝ第二線陣地に向つて攻擊前進した。然るに間もなく敵は小癪にも優勢を恃んで逆襲に轉じて來た。氏等は好き敵御參なれとばかり忽ちにして之

を擊攘し更に猛進を續行中憎くや敵の一迫擊砲彈は部隊の中央部に落下炸裂し無念一時に十數名の死傷者を出し氏も亦咽喉部に重傷を負つて倒れた。軈て氏は後送されて天津病院に入院し有ゆる治療を受けたが九月十八日惜しくも護國の華と散つた。併し氏等の奮戰と尊き犧牲に依り敵は大損害を受けて敗走しさしもの堅陣も我が攻略する所となつたのであつた。

氏は今次聖戰に參加するや軍の命脈たる通信機關の要員として幾多の危險困難を克服して其の重責を完うし以て部隊長の指揮掌握を容易にし戰勝の獲得に寄與する所甚大であつた。特に夜襲に方りては得意の銃劍術を以て頑敵を刺殺し其の勇猛果敢なる奮戰は步兵の精鋭を發揮して遺憾なかつた。是畢竟氏が一死國に奉せんとする靈忠至誠の顯現である。斯かる忠誠勇武の士を參戰幾何もなくして喪ひたるは洵に痛恨の情禁じ得ざる所である。然りと雖も氏の樹てたる赫々の武勳は皇軍戰史に輝き芳名は千古に謳はれ不滅の英靈は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。(TM)

陸軍步兵上等兵勳七等功七級　矢口一夫

忠勇なる通信手正太線長凝鎭に孤軍奮鬪分隊長と折重つて玉碎す

氏は和歌山縣西牟婁郡中芳養村の人にして父を淺吉亡母をちよと云ひ明治四十三年十月二十三日に生れ妻みねとの間に治、賀子の一男一女を擧げた。性溫良着實にして孝心深く又妻子を善導誘掖して一家平和の中堅となり又體力衆に勝れ地

方草角力には玉手山と稱し花形相撲として名聲を擧げて居た。大正十四年三月中芳養小學校高等科を卒業し其の後は家庭にありて家業に精勵傍中芳養青年訓練所へ通學し熱心勉勵良成績を擧け昭和四年三月其の課程を修了した。昭和六年六月徴兵として平壤歩兵聯隊へ入營し同年九月以來滿洲事變に從軍して勳八等白色桐葉章を賜はり翌七年十二月滿期除隊となつた。歸鄕後は再び家業に就き父を慰めて孝養怠りなく又青年團の幹部として同團に盡力せる所大にして諸人の愛敬と信賴とを受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召平泉通信隊に編入せられ通信手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月四日長辛店に到着し良鄕附近に於て通信網の構成徹收並に警戒勤務に服し常に率先勞苦を厭はず迅速確實に作業を完うし以て永定河畔の戰鬪準備に甚大なる貢献を與へた。

所屬部隊は更に九月十五日より二十七日にかけ涿州及保定の會戰に適時重要通信網を構成して作戰を有利ならしめ又九月二十八日より十月中旬に亘り石家莊及滏陽河附近の會戰に當り完縣附近の通信網を構成し續いて滹沱河々畔の攻擊準備間有線通信手として第二小隊長の指揮下に重要通信連絡に任じ顯著なる功績を樹て所屬隊は時の兵團長より表彰狀を授けられた。其の後十一月中旬に亘り正太線に沿ふ天險地帶に險山幽谷を踏破して迅速確實なる通信網を構成し作戰に著大なる貢献をなし所屬部隊は時の軍司令官より感狀を授けられた。其の間氏は疲勞困憊其の極に達しあるにも拘はらず常に進んで難局に當る等全く衆兵の模範となり將兵の信賴益々厚きを加へて居た。

正太線を前進せる我が軍は十一月中旬楡次地方を確保するに決し十一月二十日には長凝鎭にも歩兵一中隊を派遣し警備を嚴にする事になつた。此の時所屬通信隊は此の警備隊と部隊本部間との連絡を命ぜられ二十一日朝所屬米田分隊は渡邊小隊長の指揮下に通信作業を開始した。午後一時米田伍長は氏等四名の部下を隨へ電話線を延線しつつ逸早く長凝鎭に到着した。其の際警備歩兵隊はトラックの都合にて著しく前進が遲れ小隊長も車輛を誘導せんが爲稍おくれて前進中であつた。勿論長凝鎭に敵兵が侵入しあらんとは夢想だもせぬ處であつた。所屬分隊が長凝鎭の部落中央に差しかかるや突如數十名の敵兵現はれ至近の距離より猛射を浴びせて來た。敵は次第に其の兵力を增して百餘名に達し味方は僅かに五名然れども勇敢決死の氏等は後方への連絡處置を講じ敢然として應戰した。敵は多勢を恃んで前面より殺到せるのみならず部落を瀘過して氏等の後方に出で包圍して來た。不幸分隊長は遂に敵彈に斃れた。終始分隊長の傍に在りて奮鬪中の氏は憤然として分隊長の仇敵に對し猛射を浴びせ多大の損害を與へたが無念敵の投げつけた手榴彈の爲頭部に爆創を受け分隊長の遺骸に折り重つて壯烈なる戰死を遂げた。部隊本部は事の急を知り直ちに一大隊を急派し憎むべき敵を粉碎して氏等の無念を晴らしてやつた。

氏は曩きに滿洲事變に從軍して赫々たる武勳を奏し今次聖戰に參加するや過去歷戰の體驗を以て克く分隊長を輔佐し日夜軍の命脈たる通信連絡の重任に向ひ心血を注ぎ奮勵努力し幾多の險難を冒して其の本分を全うするを得た。誠に是皇軍通信兵の模範と云ふべきであつた。不幸長凝鎭に不測の大敵に遭ひ孤軍奮鬪遺憾なく皇軍精神を發揚して玉碎するに至りしは痛恨哀悼の情に堪えずと雖も氏の功績たるや部隊の功績と共に赫々として皇軍戰史に輝き芳名は永く後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途殊に愛子等の將來に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　山形國

暗夜敵の潜伏斥候を刺殺し夜襲奏功の端を拓きて衛河々畔に散る

氏は栃木縣芳賀郡逆川村の人にして亡父を丈次郎亡母をキヨシと云ひ大正二年十月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚眞面目にして沈着。父母なき家庭に於て弟妹を慈しみ又事を爲す積極的にして頗る熱心爲し遂げざれば已まざる氣概を有し近隣の賞讃を受けてゐた。昭和三年三月逆川小學校高等科を卒業し引續き茂木公民實業學校に入り同五年三月同校卒業其の後は家庭に在りて農業に從事し入營時に至つた。昭和九年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營在隊間滿洲事變に出動し警備治安に任じ其の功により勳八等に叙し瑞寶章を賜はり翌十年十一月滿期除隊し其の後は名古屋三菱飛行機製作會社に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊補充隊に編入約一ヶ月の後第一次補充要員として勇躍征途に就き北支に到着の上十月二十九日郜鄆に於て所屬部隊に合し細島部隊に編入第三小隊小銃手として爾後の戰鬪に參加した。斯くて十月三十日郜鄆より磁縣を經て臨漳に向ひ敵を追擊し十月十一日は大名の攻略戰に勇戰奮鬪して以て中隊の戰勝に貢獻し爾後十二月十一日まで大名附近の警備に服し奮戰努力克く所命の勤務を完うした。此の頃出征前の舍主に一書を寄せ「早や二回の戰鬪に參加しましたが何等得る所もなく殘念ですが身體は至極壯健です今後の戰鬪には必ず武士の本分を盡します」とあり牢固たる決意を披瀝してゐた。

十二月十二日衛河畔范河堤及龍王廟附近の戰鬪に際しては所屬中隊は衛河の架橋點を奪取すべく十三日午前三時より行動を開始した。當夜夜半まで不氣味に冴え渡りし寒月も此の頃既に沒して眞の暗となつた、此の機に中隊は接敵前進を起すや氏は選ばれて其の前方警戒兵となり中隊の前方五十米を前進した。暗夜未地の地形なるに拘はらず斥候長指揮下に勇敢に接敵中敵の潜伏斥候を發見するや機を失せず而も沈着して敵に察知せらるることなく斥候長に報告し然る後潜行肉薄して不意に銃劍を揮つて之を急襲し見事其の敵を刺殺し次で尙敵の主力陣地を發見すべく剛膽にも一意前進を繼續し敵陣地の前方十五米附近に近づきたる際無念敵より手榴彈を投擲せられ右背部に其の破片創を受け遂に其の場に倒れ再び起つ能はざるに至つた。氏は其の死を自覺し「天皇陛下萬歳。山形國は名譽の戰死をする。皆サン後は頼む」と言ひ昏倒した。軈て大名野戰病院に收容せられ衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく同月二十七日遂に護國の華と散つた。併し中隊は氏の勇戰奮鬪により至短時間に所命の地點を奪取確保することを得た。

氏郷に在るや良民其の戰陣に臨むや終始奮鬪克く小銃兵たるの任務を完うせしのみならず殊に衛河畔の戰鬪に際しては積極活躍其の沈着勇敢なる行動により中隊夜襲奏功の端緒を拓くに至つた。實に斯くの如きは陣中心境披瀝の如く且又戰傷時の態度の如き素より名譽の戰死を覺悟し武人の本分を果さんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮鬪して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史を飾り其の芳名は萬世不朽武人の華と謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山口治安

上海齊家宅の堅陣に突入陣内に奮戰中身に數彈を受けて散華す

氏は宮崎縣北諸縣郡高城町の人にして亡父を竹田角助母をフキと云ひ明治三十四年八月二十八日に生れ山口家を嗣ぎ妻テイとの間に未だ子はなかつた。資性温順諸事に熱心にして不屈不撓の氣概があつた。大正元年高城小學校尋常四年修業中家事の都合上退學して他家に奉公し爾來勤續約十年入營時に至つた。大正十年十二月徴兵として豪灣歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵して同十二年一月一等兵に進級し且精勤章を授けられ同年十一月善行證書を附與せられて滿期除隊した。其の後は自宅に於て農業に從事し且農事實行組合長及納税組合長を勤むること各四年組合の成績向上に寄與せし所尠くなかつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召郡司部隊沼口中隊に屬し小銃兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬中支に到着し十月九日東周宅を占領し次で西唐宅南方無名部落を攻撃せしが此の際氏は第一線として勇敢に敵を攻撃し所屬隊の同部落占領に寄與せし所尠くなかつた。次で十月十四日所屬中隊が齊家宅の敵を夜襲して之を占領せんとするや氏の所屬小隊は高田少尉指揮下に午後八時三十分行動を起し逐次敵の堅固なる陣地に近迫した。然るに十五日午前二時頃唐家宅方面より猛烈なる側射を受け我が前進頗る困難に陷りしも躍進又躍進して遂に紀家橋より齊家宅の北端に達することを得た。而して午前三時半愈々夜襲を決行せらるゝや氏は分隊長指揮下に第二突撃隊員となり分隊長に從ひ率先勇敢敵陣に突入し奮戰格闘の後數十名の敵を撃退し以て先づ北部齊家宅の堅陣を占領し續いて中部齊家宅の堅陣を突破占領し尚勇猛果敢に追撃して敵の最後方の堅陣に向ひ突入せんとするや其の直前のクリーク及生垣鹿柴等の障碍に阻まれ前進頓挫するに至つた。しかも前方及側方より敵の重火器の集中火を受け忽ちにして死傷續出するに至つた。しかし氏はかゝる惨烈の戰況にも屈せず益々勇奮分隊長指揮下に障碍を越へて前進せしが敵は頗る頑強にして止むなく敵前僅々二十米に掩體を作り一旦占有せる此の地を確保すると共に雨後の突撃を準備すべく彈雨を冒して眞の闇夜に必死となりて散兵壕を構築しありしが其の作業中無念氏は腹部其の他に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して本夜襲に於て中隊は戰死二十名負傷二十二名を出したるも氏等の勇戰奮闘と尊き犧牲とにより敵の最後方陣地直前を確保することを得爾後の戰勝を容易ならしむることを得た。

氏や忠實勤勉の人、今次召されて戰陣に立つや彈雨の下率先勇敢克く戰闘の惨烈に耐へ不屈不撓奮戰し歩兵の本領を發揮して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして江南の野に散りしは痛惜極まりなきも奮戰力闘遂に玉碎して以て皇軍の威武を發揚したる抜群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尚も皇國の前途を守護し且一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　矢吹誠一

擲彈筒手馬廠河敵前强行渡河戰に奮戰惜しくも陣前に散る

氏は岡山縣倉敷市阿知町の人にして亡父を良造母を政と云ひ大正二年九月七日に生れ未だ獨身であつた。資性温順業務に忠實勤勉にして不屈不撓の氣概があつた。昭和四年三月倉敷小學校高等科を卒業其の後家業に從事し昭和九年一月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し在營一年にして歸休除隊した。在隊間は滿洲に派遣せられ間島省局子街附近に駐屯警備に任じ同年五月內地に歸還し事變の功により勳八等に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊第二中隊に屬し第一小隊第四分隊擲彈筒手として四月十日勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支戰線に到着し八月二十一日より逐次畢庄子徐庄子東淺庄官屯の戰鬪に參加し九月三日より唐官屯の攻擊に際しては氏は第一大隊臨時擲彈筒小隊長笠原准尉の指揮に屬して奮戰し九月七日靜官屯南端寺院高地の攻擊には第一線火線分隊內に在りて擲彈筒彈藥手として奮鬪克く其の任を完うした。

九月十日馬廠河敵前渡河に當り當初部隊の豫備たりし第三中隊が渡河部隊たる第二大隊に增援を命ぜらるゝや氏は擲彈筒手として第三中隊に臨時配屬せられ午後四時後屯東側より工兵隊の發動艇に分乘し我が砲兵の掩護射擊下に白晝猛烈に敵彈飛來する河中を急速力を以て運河を遡航し運河分岐點より上流三百米に達して敵岸に上陸した。敵は其の陣地の總てに掩蓋を設備して河岸に直接配備し各種火砲を備へて堅固に死守してゐた。從つて上陸前我は既に相當多數の死傷者を生ぜしが其の上陸するや敵前百五十米正面は勿論特に靜官屯附近よりの敵の猛射は全く我を側射ししかも河岸據るべき地物とて無く忽ちにして死傷者續出するに至つた。此の際氏は之を物ともせず突擊援助に適する擲彈筒の射擊位置を索めて彈雨の下勇敢にも敵の遺棄せる河岸の壕內に躍進し我が突擊を阻止する敵特に我が砲火の及ばざる死角等に着眼して之に有效なる射彈を浴びせ一意第三中隊の突擊を容易ならしむる事に奮鬪努力しありしが依然側方にありて猛射を繼續しつゝありし敵は我が擲彈筒陣地に其の火力を集中し來り爲に午後六時頃無念氏は前胸部に其の一彈を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とによりさしも頑强なりし敵に多大の損害を與へ午後七時此の敵陣地を占領することを得た。

氏の戰陣に臨むや歩兵の重要火器たる擲彈筒手に選ばれ彈雨の下毎戰勇敢適時的確なる射擊により其の威力を發揮して敵の重火器を制壓し小隊戰勝の因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで重任を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何ならずして馬廠河畔の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも氏が奮戰力鬪して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山口勳

武技優秀彈雨の下率先奮闘惜しくも姚官屯の陣前に玉砕す

氏は兵庫縣城崎郡城崎町の人にして父を鶴太郎母をいゑと云ひ大正三年十月五日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實にして孝心深く又克く弟妹を慈しみ事に當り熱心負け嫌ひの氣魄があつた。昭和二年三月城崎尋常小學校を卒業引續き豐岡商工學校に入り同四年三月同校を卒業し其の後は家業に從事してゐた。昭和十年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營熱心軍務に勉勵して精勤章を授けられ九月には一等兵に進級し翌十一年七月上等兵勤務を命ぜられ同年十一月善行證書を附與せられて滿期除隊したが氏は特に武技に長じ在隊間射撃に於ては射撃徽章の外師團長聯隊長より夫れ〳〵賞狀を又劍術に於ては聯隊長より賞狀を授けられた。除隊後は神戸三菱重工業株式會社に入社し第二機械工場に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊篠原中隊に屬し第三小隊第四分隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し爾後連日泥濘飢渇と戰ひつゝ言語に絶する難行軍を續けて津浦沿線を南進し九月上旬には馬廠西側の諸要地を逐次席卷して滄州に向ひ敵を猛追した。此の間氏は不屈不撓惡路を克服し其の戰闘に際しては彈雨の下奮戰克く其の本分を完うし中隊の任務達成を容易ならしめた。次で滄州附近の戰闘開始せらるゝや所屬中隊は二十一日午後六時より人合庄北端の敵陣地に向ひ攻撃を實施した。此の時氏は彈雨の中を物ともせず分隊長指揮下に前進又前進して逐次敵に近迫し愈々突撃に際しては率先勇敢に敵陣に突入し夜を徹して部落内の敵を掃蕩し二十二日午前九時完全に之を占領することを得た。

九月二十三日所屬中隊は大隊の第一線となり午後四時友軍砲兵の支援射撃終ると共に姚官屯の敵陣地に向つて攻撃を開始した。敵は長日月を費して堅固に陣地を構築し掩蓋機關銃座を多數に設備し其の陣地より數十米の前方には鐵條網を更に其の前方には幅六米深さ三米の水濠を繞らし極力我が前進を拒止すべく待ち構へてゐた。中隊攻撃前進を起すや敵は恰も篠つく雨の如く銃砲火を浴びせ來りしが氏は第一線火線分隊内にありて之を物ともせず分隊長指揮下に勇敢に前進し其の停止に際しては優秀なる射撃技能を發揮して敵を制壓し斯くして高粱大豆等の畑を一進一止遂に敵前百米水濠の線に達し之を泳いで前崖に取り着きしが其の前方には鐵條網あり敵彈烈しく容易に破壞し得ず午後十二時頃漸く突撃路の開設を完了するに至つた。當夜は下弦の月物凄く冴え渡り其の月光の下全身濡れ鼠となりて突撃時刻の到來を待ちしが愈々午前四時鐵條網の突撃路に煙幕を展張し之に蔽はれて突撃を開始するや敵は死者狂ひとなり猛烈に手榴彈を投擲し爲に我が死傷續出するに至つた。併し氏は更に屈せず分隊長と共に猛烈果敢に陣地の一角目掛けて突進したが其の途中無念敵の手榴彈を胸部に受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

而して中隊は本夜襲に於て多數の死傷者を出したるも氏等の勇戰奮闘と尊き犧牲とにより惡戰苦闘の後東天白む頃さしも頑強なりし敵陣地を奪取し日章旗を翻すことを得た。

氏は生來孝心深く又弟妹を慈しみ人情厚き温厚の人であつたが軍隊に入りては熱心勉勵射撃に劍術に優秀の技能を發揮するに至り今次召されて戰陣に臨むや彈雨の下毎戰其の特有の技能を揮て勇戰奮闘克く歩兵の本領を發揮し中隊戰勝の因を爲して遺憾なかつた。實に斯の如きは忠孝一道一身を君國に捧げて斃れて後已まんとせる壽忠至誠の發露にして正に軍

人の鑑と謂ふべきである。征戰中途にして氏の如き忠烈有爲の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　安田豐虎

輕機彈藥手衆敵の逆襲に對し奮戰以て中隊の危險を除き東花園に玉碎す

氏は兵庫縣宋栗郡山崎町の人にして亡父を作太郎母をすめと云ひ大正三年十一月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして孝心深く事に當り不屈不撓爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。昭和四年三月山崎小學校高等科を卒業し其の後は大阪市に出で太田仙次郎方に在りて表具師徒弟となり入營時に至つた。昭和十年一月徵兵として鳥取步兵聯隊に入營在隊間熱心軍務に精勵し翌十一年十一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊藤井中隊に屬し第一小隊輕機關銃彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着したが當時北支一帶は稀なる連日の豪雨に到る所出水し道路は泥濘膝を沒し其の間に處し所屬隊は名狀し難き苦難の行軍を續けて津浦沿線を南進し九月上旬馬廠附近の攻擊には敵陣の西北鎭鑰たりし小王莊流河鎭の堅壘を屠り續いて馬廠西側の諸要地を逐次席卷して敵を猛追し續いて九月十三日より滄州附近の戰鬪開始せらるるや先づ姚庄子魏庄子李家婁及人合庄の敵を攻擊して之を占領した。此の間氏は輕機彈藥手として連日連夜克く困苦に耐へ敵の猛火の中に每戰勇戰奮鬪し以て中隊の任務達成を容易ならしめた。

九月二十三日所屬中隊は大隊の右第一線となり敵主陣地の一部たる東花園附近の敵を攻擊することとなつた。東花園附近は敵が津浦沿線上の主抵抗線として長日月を費し半永久的の陣地を構築し不落の堅陣と誇つて居た所である。而して中隊の攻擊正面たる運河東側地區には其の堤防上に五個の掩蓋機關銃座を併列し其の前面には二條の鐵條網と二條の水濠とが繞らされてあつた。中隊は午後六時三十分南部人合庄より行動を起し此の堅陣に向つて前進するや攻擊地區は濕地にして行動頗る困難なりしのみならず敵は十字砲火を集中し來り我が死傷續出するに至つた。併し氏は之に屈せず分隊長指揮下に率先して勇敢に前進し逐次敵に肉薄し陣前至近の地點に達し火力を最高度に發揚して敵を制壓し愈々突擊命令下るや泥深き水濠を越え鐵條網破壞班の突擊路の開設終るや時を移さず敢然之を通過し更に第二鐵條網に向つて前進した。然るに其の途中突如敵は侵勢なる兵力を以て堤防上を逆襲し來つた。此の際氏は衆敵を前に見て毫も周章することなく敵の肉薄と其の猛射に屈せず勇敢に活躍して彈藥の遞送に任じ射手をして支障なく群がる敵を猛射せしめ遂に之を擊退して中隊の危險を除くことを得た。而して引續き第二鐵條網を通過して突入遂に第一線陣地を奪取し尙も續いて敵の猛射を冒し第二陣地に向つて躍進又躍進遂にトーチカ陣地に突入して之をも奪取せしが敵の死物狂ひの射擊は愈々烈しく其の一彈は遂に氏の腹部を貫通し中隊長及曹長以下戰友若干名と相前後して遂に其の場に倒るるに至つた。戰友駈け寄り氏を介抱せん

とせるに自己の負傷を忘れて早く中隊長を介抱せよと促し麾て　天皇陛下の萬歳を奉唱し午前零時十分壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は中隊長以下氏等の勇戰奮闘と尊き犧牲とにより午前六時にはさしも頑強なりし東花園の堅陣を占領することを得た。

氏生來溫順にして頗る親孝行であつたが其の戰陣に臨むや勇猛剛膽有ゆる困難危險を冒し彈雨の下常に勇戰奮闘克く其の本分を完うして遺憾なかりしのみならず東花園に於て突如群敵の逆襲に會するも更に懼れず又狼狽せず沈着奮戰以て中隊の危險を除去した。實に斯くの如きは忠孝一道一身を君國に捧げ斃るるまで其の任務に邁進せる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。征戰中途にして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力闘して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍輜重兵上等兵勳八等功七級　山中繁

忠誠有爲の勇士外長城及山西方面に活躍し寡兵衆敵を支へ戰勝の途を拓く

氏は佐賀縣杵島郡江北村の人にして父を鶴一母をイチと云ひ大正七年二月十一日に生れ未だ獨身であつた。性溫順明朗にして孝心深く舊師舊友並に同輩に對して情誼に厚く又事に當るや熱誠眞摯にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和九年三月江北小學校高等科を卒業し其の後は江北村役場の給仕として雇はれたが父母及長上の命令指示には絶對に服從したとへ夜中或は荒天たりとも欣然直ちに所命の任務に就き如何なる勞苦をも厭はなかつた。又出勤前の寸暇をも利用し自家の水車作業を手傳ふ等全く模範少年として近隣の褒め者となつて居た。氏は又劍道其の他の諸運動にも勝れて居たが天禀と云ふにはあらで氏の熱心練磨の結果であつた。昭和十二年三月關東軍獨立輜重兵隊へ入營し誠意軍務に精勵し常に良成績を擧げて居た。

北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月中旬塚本部隊に編入せられ逸早く北平方面に出動し輓馬小隊の班長として清河鎭の戰闘に參加し敵砲彈の雨飛する中を物ともせず敵前五六百米に前進して第一線部隊に彈藥及糧秣を補給して其の戰力を培養し續いて西苑及北苑の戰闘に方り適時適切に軍需品を補給する等目覺しき活躍を續けた。其の後は次期作戰の爲連日の降雨泥濘を冒し西苑附近に彈藥糧秣の馬積に貢獻せる所甚大であつた。超えて八月十一日より月末にかけては冀察省境山岳地帶の戰闘に參加し南口鎭居庸關八達嶺の天險を突破し又敵火を冒して我が第一線部隊に彈藥糧食を補給し其の重任を果した。九月一日以後は延慶及張家口附近に兵力を集結したが氏の所屬部隊はそれ等部隊の爲軍需品の集積を命ぜられ連日連夜不眠不休任務を續行したが氏は克く部下班員並に輓馬を愛護激勵して運動能力を發揮し其の任務を遂行した。九月九日より十六日にかけては軍直轄部隊となり張家口より天鎭大同の戰闘に參加し東條部隊及篠原部隊本部の糧秣補給を擔任し更に豐鎭平地泉への猛追擊に伴ふ彈藥糧秣を追送して第一線部隊への補給を圓滑ならしめた。時恰も鐵道未

開通にして所屬部隊は實に不眠不休の努力を要したが氏は克く奮勵努力勇敢にも敵の猛射を意とせず第一線部隊の位置に進出して補給の重任を全うした。十月初旬氏等は綏遠及忻口鎭方面の戰鬪に參加を命ぜられ補給業務に任ずる外大同附近の警備に服し其の後第一車輛中隊に編入替となつた。

十一月二日よりは椎橋部隊第三中隊長寺田大尉の指揮下に入り大同の南方約三十五里陽明堡の南方地區に於ける戰鬪に參加する事となつた。當時寺田中隊は大同—原平鎭間に於て糧秣輸送に任じて居たが氏は其の際斥候長土屋軍曹の指揮下に先頭の自動貨車に乘車し中隊主力の前方四五百米を前進して警戒中陽明堡の南方約二里半の橋梁にさしかゝるや前方及側方より急射擊を受けた。土屋軍曹は直ちに車輛を停止せしめ左側方の土手蔭に下車散開し先づ左側方の敵を攻擊する決した。同方面の敵は重輕機關銃及迫擊砲を有する約二百名の兵力にして二線に配置されて居た。又右前方約三四十米の凹地には五六十名の敵兵ありて我に向ひ逆襲する氣構も見え又前方本道左側の墓地附近にも五六十名の敵兵あるものゝ如く氏等の自動車は實に三方向に容易ならざる敵に直面する狀況となつた。斥候長土屋軍曹は掩護分隊長たりし本松上等兵に氏等掩護兵三名を指揮せしめ本道墓地の右側背より當面の敵を攻擊すべく命じた。然るに此の時右前方凹地の敵は我自動車の位置する橋梁方向に逆襲し來るを發見し氏等は之に猛射を加へて其の前進を阻止すれば敵は凹地の一側に姿を沒した。本松上等兵は敵が凹地を潛行し中隊の背後に進出すべきを察し「橋を守れ」と大聲を以て命令した。氏は此の時最右翼に在りて射擊中であつたが直ちに橋梁守備に就いた。敵は早や橋から十四五米に近迫して居た。氏は憤然として戰友と共に手榴彈を投げつけて之を爆殺し更に猪突し來る敵をば戰友山下一等兵と協力して小銃射擊を以て之を阻止した。然るに頑敵は數名宛地形を利用しては躍進して來た。氏等は其の都度狙擊して之を打倒した。然るに其の後敵は迫擊砲及小銃を以て橋梁附近を亂射し來り勢に乘じて一部の敵は橋梁に突進して來た。氏等は豪膽沈着手榴彈を以て之を擊退し苦戰實に一時間に及んだ。此の時中隊主力は敵の側背に進出し鐵槌的猛射を加へて敵に大損害を與へ赫々たる戰捷を得るに至つた。併し氏は其の間無念にも右側胸部に手榴彈の破片創を受け壯烈なる戰死を遂げて居た。時に同日午後七時頃であつた。

氏は幼より圓滿なる智情意を具備し幾多の辛酸勞苦も鐵石の決意と明朗熱誠の努力とに依りて解消し强く明るく人生を生きぬいた。今次聖戰に參加するや既に生死を超越し君國の爲に淸く身命を捧げ皇軍輜重の本領を最高度に發揚して玉碎するに至つた。眞に軍民の鑑と謂ふべきである。あゝ斯かる忠誠にして有爲の士を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の赫々たる功績は皇軍輜重の華と謳はれて皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は十月十六日一等兵に進級したが戰死の日更に輜重兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　山川初男

皇軍輜重の華、山西省七亘村に奮鬪し遂に玉碎す

氏は大阪府豐能郡池田村の人にして亡父を普吉母をチヱと云ひ大正二年二月十七日に生れ末だ獨身であつた。性溫厚寡默にして母に事へて極めて柔順殊に祖先を尊び朝夕禮拜を缺きたることなく月に一回以上は必ず神社に參詣しては日常の修養に努め事に當るや熱誠眞摯にして稀に見る模範青年であつた。昭和二年三月細河小學校高等科を卒業し其の後阪急電

鐵株式會社運輸課に就職し眞面目の乘務員として信望厚かつた。昭和八年徴兵檢査の結果第一補充兵役輜重兵特務兵に編入せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召加藤部隊藤本中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。氏は應召に際し召集令狀を佛壇に供へ嚴肅に之を祖先に奉告し又出發時にも祖先に暇乞をなし且家族に對し祖先の祭祀に關し後事を托する等敬虔眞

摯聞く者をして襟を正さしむるものがあつた。斯くて所屬部隊は北支到着以來京漢沿線を南進し九月中旬より下旬にかけては涿州保定の會戰に參加し所屬中隊長の指揮下に泥濘汎濫地帶に名狀すべからざる苦難を克服して適時第一線部隊に彈藥を補給し引續き十月中旬にかけては石家莊及滏陽河畔の會戰に參加し不眠不休の難行動を續け第一線部隊に彈藥を補給し以て皇軍の神速なる作戰に偉大なる貢献を與へた。氏は其の間克く疲勞困憊に堪へ常に上官の命令意圖を體し積極的に活躍して班長を助け馬匹を愛護し又道路補修に任ずる等一意專心其の職分に邁進した。所屬部隊は其の後時の軍司令官より最高名譽の感狀を授與せられたが是全く所屬隊長以下第一線部隊に劣らざる堅忍奮鬪の結果であつた。

所屬中隊は十月二十六日更に山西省方面に作戰すべき兵團の左縱隊に糧秣補給の重任を帶び石家莊より山岳重疊の山西省境に向ひ前進し先づ南障城に到り糧秣を第一線部隊に交付した。茲に於て氏の所屬小隊は之が補充の爲小隊長土肥少尉の指揮を以て微水鏈に引き還し更に糧秣を滿載して再び中隊主力に追及すべく强行軍を行つた。所屬小隊は同日正午七亘村河原に達し小休止を行ひ慌しく食事を攝つた。小隊は連日の活動に人馬の疲勞其の極に達して居たが一般の情勢は所屬小隊に大休止を與ふるの餘裕もなかつた。午後零時三十分には早くも七亘村西方の坂路を攀登中であつたが先頭を行進中の自衛隊は突如前方に二三の敵影を認めた。と思ふ間もなく急霰の加き猛射を浴びた。前面の敵情を視察すれば豈圖らんや約一大隊の敵部隊が大牙を擁して待伏せて居たのであつた。更に右側方の山上に約一大隊左後方の稜線上にも約二三中隊の敵部隊現はれ三方面より我が小隊を目がけて小銃機關銃並に迫擊砲の猛射を浴びせて來た。あゝ左は數十丈の斷崖屹立し右は千尋の谷脚下に迫り進路の前は爪先上りの岩盤道であつた。銃砲聲は山又谷に谺し其の射彈は附近に落下炸裂して岩角を粉碎し軍馬は狂奔して坂路を駈登るもの或は斷崖より墜落卽死するもの路上に斃るゝもの凄愴悲慘言語に絕する光景を呈するに至つた。此の時氏は沈着機敏に先づ愛馬を七亘村部落に誘導し更に敵彈雨飛の中を物ともせず斃馬の駄載荷物を卸下集積して馭兵の本分を完うせる後敢然拔劍隊に加はり眞先かけて我が自衛隊奮戰の間を縫ふて前方に進出し群がり襲ひ來る敵と接戰格鬪して之を打斃し激戰實に四時間將に群敵を擊退せんとする一刹那壓崖上に占據せる憎むべき敵兵より投げつけたる手榴彈の爲氏は頭部及胸部に爆創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併し所屬小隊は氏等の尊き犧牲に依り夕闇迫る頃全く敵を掃蕩するを得た。小隊一同は氏を初め尊き遺骸を收容して之を取圍み篝火の下に悄然として佇み萬感胸迫り唯感謝の涙に暮れ默禱を捧げて其の冥福を祈つたのであつた。

氏は人格高潔にして敬虔の人、克く孝に克く友に良民の範を垂れ今次聖戰に參加するや一死報國の赤誠に燃え幾多の辛酸に堪へ皇軍の本領を發揮し遂に七亘村に不測の難戰苦鬪に遭ひ未だ正規の軍隊教育をも受けあらざる身を以て壯烈鬼神を哭かしむる奮鬪を續け遂に聖戰の華と散つた。あゝ今や氏が慈眼壯容に接すべくもなく痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや部隊の功績と共に皇軍戰史に光彩を放ち其の名は傳へて愈々芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇

國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戦死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松本新吉

剛膽挺身危險を冒して戦車を誘導し戦勝の端緒を拓いて大名城に散る

氏は栃木縣宇都宮市大黒町の人にして父を留吉亡母をテルと云ひ大正三年十一月三十日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚誠實業務に熱心にして進んで難局に當るの氣魄があつた。昭和二年三月宇都宮市東尋常小學校を卒業其の後は石工に從事し入營時に至つた。昭和十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し同年七月には早くも精勳章を附與せられ九月には一等兵に進級し同十一年十一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊田口中隊に屬し第三小隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し所屬中隊は約二旬の間滦縣の警備に任じ九月二十三日部隊主力に復歸の上翌二十四日小朱寨附近の戦闘に參加し爾後敵を急追して滹沱河畔に達し十月十日同河の渡河戦闘に參加して石家莊を占領するや引續き敵を追撃して元氏附近及瀦流河に敵を撃破し順德邯鄲滋縣を經て臨漳に到達した。此の間氏は連日不眠不休の急行軍にも屈せず志氣益々旺盛其の敵と戦闘を交ふるや勇戦奮闘克く歩兵の本領を發揮し中隊の任務達成を容易ならしめた。

十一月八日より大名城の攻撃開始せられ所屬中隊は大名西方約六里敵の第一線陣地たる院堡集の敵に對し同日午前十一時半より攻撃前進を開始した。氏は第一線小隊の火線分隊内にありて分隊長指揮下に克く勇戦奮闘し夕刻頃までには約三里の縱深を突破し翌九日には中隊の第二線部隊として岸上附近の攻撃に參加し同夜は敵前至近の位置に於て下士哨となり嚴重警戒裡に夜を徹し翌十一日は愈々大名城西側の城壁に向つて午後零時二十分より攻撃を開始した。氏は中隊の右第一線小隊火線分隊内にありて敵の猛射を物ともせず分隊長指揮下に率先して勇敢に前進し其の停止に際しては毎發必中の射撃を爲して敵を制壓し斯くして逐次一進一止敵に近迫して午後三時頃遂に敵前四百米の地點にまで到達した。此の時小隊の左側より友軍の攻撃に協力の爲前進し來れる戦車が本道を離れて畑地に入らんとするや道路右側の濕地に陷入し行動の自由を失ふに至つた。斯くと見たる氏は當時敵は我が戦車の近迫を阻止せんとして其の附近に集中火を浴びせ來り危險極まりなかりしにも拘はらず進んで戦車の側に到り猛火の下身の危險を冒し敵火に暴露して其の行動容易なる地形に戦車を誘導しつゝありしが其の間無念敵彈顔面を貫き遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し氏の剛膽なる行動により戦車は爾後滞滯なく行動し中隊は之と協力猛進して同日午後八時には宋哲元軍最後の本據を覆滅することを得た。

氏素と誠實の人、其の戦陣に立つや毎戦勇敢克く小銃兵たる本分を完うして遺憾なかりしのみならず中にも大名城攻撃に於ける剛膽挺身危險を冒して戦車を誘導せし如き是畢竟一身を君國に捧げ死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべく聖戦中途にして氏の如き勇士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮闘以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戦史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に讃はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國

並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松井俊雄

率先勇敢彈藥補充に任じ死期迫るも其の補充を叫びて行宮の一戰に散る

氏は兵庫縣神戸市神戸榮町通の人にして父を俊藏母を民と云ひ大正五年二月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして志操堅確諸事勤勉にして特に至誠奉公の念厚かつた。昭和三年三月神戸尋常小學校を卒業引續き神港中學校に入り同七年三月第四學年にて中途退學し其の後は家業に從事してゐた。昭和十一年十二月徴兵として平壤歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや鎧登部隊第二機關銃中隊に屬し第二小隊第三分隊五番銃手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着し七月二十七日午後二時黄村出發南苑に向ふ途中行宮附近に敵あるを知り先づ此の敵を攻撃することゝなつた。敵は土壁及墓地等有利なる地形地物を利用し銃眼掩蓋等を堅固に構築し重輕機關銃迫擊砲等を配備して頑强に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく殊に當日は無風にて炎熱百四十度に達して灼くが如く加ふるに丈餘の高粱繁茂し我が行動は頗る困難であつた。所屬中隊は第一線の前進に伴ひ攻擊前進して敵前五百米附近に達するや敵は機關銃迫擊砲彈を雨か霰の如く浴びせ來りしが更に猛火を冒して敵前二百米附近に達して陣地進入し一齊に猛射を開始した。氏は雨下する敵彈と灼くが如き炎熱を冒し高粱畑を疾驅して勇敢に彈藥補充に活躍し分隊が猛射擊に伴ひ射耗彈頗る多きに拘はらず再三往復搬送して銃側に彈藥を充實し以て其の射擊に支障なからしめ更に又我が猛射に伴ひ彈藥補充を命ぜらるゝや氏は躊躇する事なく勇躍敵火を冒し高粱畑の中を縫ふて疾走し彈藥を搬送し來りて將に銃側に達せんとするや敵前三百米に於て無念咽喉部に貫通銃創を受け彈藥箱を手にしたる儘其の場に倒れた。併し豪氣の氏は尚も其の補充を完遂せんとして起ち上らんとせしが力及ばず「彈藥々々」と聲も微かに呼ばはりつゝ遂に絶命し鼓

に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより機關銃の最大威力を發揮して第一線歩兵に協力し午後七時十分行宮の一角を奪取し同七時三十分敵を撃滅することを得た。

氏や至誠一貫勤勉の人、其の戰陣に臨むや彈雨の下率先勇敢適時機敏に其の彈藥を補充し機關銃の特性を發揮せしめて遺憾なかりしのみならず死期迫るも唯々一念彈藥を思ふのみであつた。實にかくの如きは旺盛なる責任觀念の發露にして軍人の鑑と謂ふべきである。參戰日ならずして敵彈に斃れしは洵に痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て樹てたる拔群の功績は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松村　隆

忠誠豪膽の勇士北滿敦化縣下の討匪戰に奮闘し職に殉す

氏は長野縣南安臺郡安臺村の人にして亡父を兼藏母をたかと云ひ大正六年七月五日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして義務心厚く事を行ふや熱誠勤勉遂げずんば息まざるの氣概を有し動作亦機敏であつた。昭和七年三月安臺高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳つて居たが昭和十一年に入り東京市本郷區に於て自轉車製造工場の職工として勤務して居た。翌十二年三月現役志願兵として關東軍獨立守備歩兵隊に入營し熱心軍務に精勵して良成績を擧げ所屬第三中隊の模範兵として其の將來を囑目されて居た。

昭和十二年七月九日京圖線南溝驛北方約一里の地點に匪賊現はれ掠奪中なる情報に接せる所屬神保部隊長は部下戸田中尉に其の隷下小隊を指揮せしめ直ちに之が討伐を命じた。當時氏は戸田中尉の指揮に屬し南溝警備に服して居たが是非共討伐隊に加へられ度旨申出で小銃手として勇躍守備地を出發した。斯くて討伐隊は翌十日午後六時半頃吉林省敦化縣黄泥河子岩山北方約五粁の地點に到着するや突如前方高地の密林内に潜伏せる約二十名の敵より一齋射撃を受けた。氏は所屬分隊の左翼に散開したが巧に地形地物を利用して左方高地方面より敵の右翼後方の退路を遮斷する如く攻撃前進し有效適切なる射撃を浴びせ敵をして潰亂敗走するの已むなきに至らしめた。此の機宜に適する獨斷行動は全く討伐隊長の意圖に合せるものにして氏の豪膽機敏の動作は將兵一同の賞讃の的となつた。討伐隊は引續き追撃に移つたが豪雨と密林に惱まされ年らも氏は分隊長の命令に基き勇敢に追撃前進した。隊長は午後八時頃三角標高八二七高地の西南方約二千米の地點に於て一先づ兵力を集結し爾後の行動を計畫した。此の時氏は左側方の警戒を命ぜられ服務中午後八時二十分頃暗中に約二三十名の足音の近づくを發見するや氏は機を失せず之を討伐隊長に報告すると共に直ちに之を射撃した。此の時敵は亂射を浴びせて來たが氏は冷靜防戰に努め且刻々變化する敵情を隊長に報告し以て機宜に適する處置を取らしめた。氏はそれまでに左腕に貫通銃創を受けたが毫も之に屈せず更に敵火次第に加はり氏は其の包圍火に包まれたるにも拘はらず豪膽不撓任務の重大なるを自覺し當面の敵を支へて小隊主力の突入を容易ならしめた、憎むべし此の時一彈飛來氏は左胸部に貫通銃創を受け一旦地上に打倒れたが氣丈の氏は尚も銃を放たず二、三發を發射して敵を支へ苦しき息の下より切れ〳〵に敵情を叫びつつ遂に壯烈なる戰死を遂げた。併し所屬部隊は氏の勇敢なる奮闘に依り激戰數十分の後敵に殲滅的の大打撃を與へて之を掃蕩するを得た。

氏は志操堅確進んで現役兵を志願し北滿警備の重任に服したる心境は既に澄刺たる氣魄の一端とも見るべきであつた。時恰かも北支の風雲日に〳〵險惡を加へ滿洲國内に於ても反滿抗日の不逞匪が共産匪の使嗾を受けて北滿各所に滿洲の攪亂を企圖し且滿ソ國境の情勢亦一觸卽發の危機を藏して居た。此の時に當り氏等の駐屯地近傍に於ける不逞匪の討伐は暴支膺懲の聖戰と密接不可分の關係に在つた。氏は克く警備の重任を自覺し克く上官の意圖を體し慧敏戰機に投合して戰勝の途を拓き豪膽衆敵を支へて小隊の戰闘準備を完了せしめ瀕死の重傷に尚自己の職責に邁進して息まなかつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛歎哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績は天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ

神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　牧知來

剛膽圓匙を以て鐵條網を亂打破壞せんとし黃村の陣前に散る

氏は長野縣上高井郡高井村の人にして父を爲吉母をにのいと云ひ大正四年三月九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚而も剛膽にして事に當り積極動勉爲し遂げざれば已まざる氣概があつた。昭和四年三月高井小學校高等科を卒業引續き實業補習學校に入り同八年三月同校卒業尙續いて靑年訓練所に入所し同十年三月同所の課程を修了した。昭和十一年一月徵兵として松本歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵して翌十二年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遠山部隊久保中隊に屬し小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月中旬永定河畔の敵を擊破して京漢沿線を追擊し九月十六日南泊附近に於て敵の抵抗に會し之を攻擊するや所屬小隊は中隊の豫備隊として戰鬪に參加し更に十七日大石橋の攻擊にも豫備隊であつたが翌十八日には中隊の左第一線小隊として奮鬪涿縣を占領した。

九月二十一日所屬部隊は大冊河右岸黃村附近の敵陣地に對し夜半之を攻擊して奪取するに決した。大冊河は河幅百數十米水深一米五六十に達し敵は其の右岸に堅固に數線の陣地を構築し其の主陣地には鐵條網を張り繞らし頑强に抵抗すべく準備してゐた。所屬中隊は大隊の左第一線渡河部隊となり午後十一時行動を起し午前零時十分攻擊前進を開始するや當夜

皎々たる月明と且は渡河部隊の流れを渡る騷音の爲早くも我が渡河を發見した對岸の敵は一齊に小銃重輕機關銃の猛射を浴びせ來り恰も篠つく雨の如くであつた。氏は率先胸に達する河中に躍り込むや猛烈なる敵火を物ともせず第一の流を渡りて中洲の敵を擊退疾驅して更に第二の流をも越え遂に對岸に取り着き全身ズブ濡れ砂塗れとなり爾後我は射擊することなく默々として一進一止敵の猛火を冒して前進した。かくして敵の第一線陣地前百米に達し一擧突擊に移るや氏は先頭に立ちて勇敢に突進し斜右の敵輕機關銃に肉薄し手榴彈を投擲して之を撲滅し次で午前零時五十分第二線陣地に突入するや小隊長に續いて猛進し一擧に突入せんとせる際突如鐵條網に遭遇し突擊頓挫するに至りしが第二陣地の直前僅々十五米の地點に於てしかも猛烈なる敵火の下剛膽にも氏は圓匙を揮つて數回鐵線を叩きて之を破壞せんと企てつつある時無念敵彈腹部を盲貫し堂とばかりに其の場に打倒れた。豪氣の氏も致命傷に再び起つ能はず軈て衛生隊に收容せられ衛生部員の手厚き看護を受けたるも其の甲斐なく二十五日遂に護國の華と散つた。しかし中隊は氏等の勇戰奮鬪により益々勇奮其の後數線に亘る敵の堅陣を逐次突破し二十二日午前六時にはさしも頑强なりし黃村の敵陣を奪取することを得た。

氏の戰場に臨むや彈雨の下積極勇敢皇軍特有の夜襲に於て克く歩兵の本領を完うして遺憾なかりしのみならず中にも圓匙を揮つて鐵條網を亂打破壞し突入せんとしたる行爲の如きは其の剛膽鬼神をも避けしむるものがあつた。實にかくの如きは一死奉公敵に勝たずんば已まざる旺盛なる攻擊精神の發露にして眞に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくし

て氏の如き勇士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るることであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳七等功七級　益倉長次郎

決死山巓の機關銃に手榴彈を投擲突入し敵を殲して玉碎す（紅士嶺）

氏は大阪府中河內郡大正村の人にして亡父を政次郎母をラクと云ひ明治四十一年十二月十日に生れ妻ヤスエとの間に一子勳を擧げた。資性溫順寡言實行の人であつた。大正十年三月太田尋常小學校を卒業し爾後專心農業に從事して入營時に至つた。昭和五年六月徵兵として大邱步兵聯隊に入營熱心軍務に精勵し翌六年九月滿洲事變に出動奉天吉林錦州方面の各地に轉戰し同七年五月原駐地に歸還功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり滿期除隊した。其の後は家事に從事しつゝ傍在鄕軍人分會役員及青年團副支部長に推され又消防組員を拜命し居村の中堅として鄕軍の發展青年の向上村の公共事業の振興に盡瘁し貢獻せし所尠くなかつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召鈴木部隊西田中隊に編入せられ小銃兵として勇躍征途に就き十月中旬石家莊に於て所屬隊長の隷下に入つた。十月二十一日所屬部隊は太原方面の敵を攻擊する目的を以て前進を開始し十月二十三日より紅士嶺の敵に對し攻擊を實施した。所屬中隊は二十三日午後三時展開を完了し午後四時より攻擊前進を起すや第一第三小隊を第一線とし氏の所屬小隊は當初中隊の豫備隊となり第一線小隊に追隨した。然るに敵は豫てより巧に地形を利用し堅固に山頂に陣地を構築し頑强に抵抗すべく準備してゐた。之が爲中隊前進するや三方より猛射を浴びせ來り二十三日午後六時頃より二十四日午前六時頃に至る間絕え間なく猛威を逞しふし我が第一線の前進は全く不可能となるに至つた。依つて中隊長は左翼方面より攻擊を進捗せしむべく午前七時頃豫備隊たりし氏の所屬小隊を第一線の左翼に增加し其の攻擊を命じた。小隊第一線に進出するや敵彈依然として熾烈を極めしも氏は

其の火線分隊內にありて猛火に屈せず分隊長指揮下に沈着每發必中の射擊に專念し且勇敢に一進一止して逐次敵に近迫し遂に突擊距離に肉薄するや其の火力を最高度に發揚して突擊を準備し尙且最も我か突擊に危險を與ふる敵機關銃を撲滅の爲其の突擊發起前決死隊員となり率先々頭に立ちて敵機關銃に對し手榴彈二箇を投擲し先づ敵を震駭せしめ其の機を利用して眞先に突入敵の機關銃手二名を刺殺せしが其の際右前方より敵の集中火を被り惜しくも腹部に貫通銃創を受け午後九時四十分遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は本戰鬪に於て小隊長以下二十數名の死傷者を生じたるも氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより敵に多大の損害を與へ二十四日正午さしも頑强なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏は義に滿洲事變に功を樹て今次再び召されて戰陣に臨むや彈雨の下頗る勇敢殊に紅士嶺東方山嶺の敵機關銃陣地に對し決死突入せる行動の如きは正に皇軍步兵の本領を發揮して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝ

まで任務を遂行せんとする盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして大行山中に散りしは洵に痛惜に堪へざるも決死奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國の前途を守護すると共に愛兒の將來に尊き加護を垂れ遺志繼承を照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　前田長美

勇敢機敏の輕機射手黃村攻擊に敵の逆襲を阻止して玉碎す

氏は長野縣上伊那郡河南村の人にして實父を春日孫太郎實母を同ためと言ひ大正五年五月十五日に生れ後前田きゆうの養子となり未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして養母に仕へて克く孝養を盡し近隣の風評良好であつた。昭和六年三月河南小學校高等科を卒業し次で高遠實業補修學校に入り昭和九年三月卒業爾後入營に至る迄家業の傍河南青年學校に通ひ熱心勉勵して居た。

昭和十二年一月徵兵として松本步兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し同年七月一等兵に進級したが支那事變勃發するや八月下旬遠山部隊齋藤中隊に屬し勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し九月十六日南泊附近の戰鬪に參加した。此の時氏は第二小隊長吉岡少尉の指揮に屬し初陣ながら第一線にあつて勇戰克く自己の任務を遂行した。續いて十七、十八日に於ける大石橋涿縣附近の戰鬪に於ては當初所屬中隊は軍旗護衛の任務を受けて豫備隊の位置に在つたが後敵の退路遮斷の任を受け揚五莊を經て拒馬河を涉り東沙溝を經て遂に涿縣城を占領した。此の時氏は尖兵にありて進路上の斥候となり危險困苦を排して活躍其の任を果した。

九月二十一、二十二日に於ける大册河畔黃村附近の戰鬪に於ては所屬中隊は加島大隊の左第一線となり攻擊した。當時氏は中隊の右第一線たる第二小隊第ノ分隊大池伍長の指揮下に輕機關銃手として參加した。而して二十一日日沒後行動を開始し大册河を徒涉して二十二日午前零時四十分同河中洲の敵を夜襲驅逐して敵岸に達し續いて敵の第一線本陣地に迫つた。當時大册河の水深一米四十に達せしも敵火の下能く困難と危險を征服して渡河し右岸の敵を擊退して敵の第二線陣地に突入し更に第三線陣地に向ひ前進した。然るに第三線陣地の敵は正面より我を猛射し就中其の掩蓋機關銃は大いに我が前進を妨害した。氏は直ちに其の輕機關銃を以て敵機關銃に急襲的猛射を浴びせたが射擊の爲銃座附近の土砂飛散し氏の輕機關銃は之が爲遂に故障を生ずるに至つた。氏は直ちに機關を分解し故障の排除に努めて居たが此の時左側方敵陣地にありし優勢なる敵は逆襲に轉じ來り小隊の危險は刻々に迫つて來た。而も頼みとする我が輕機關銃は尙使用に堪へず。氏は機敏にも附近にありし手榴彈をとり群がり來る敵中に投擲して多大の損害を與へ敵を混亂に陷らしめ之に乘じて小隊は敵を猛射し遂に其の企圖を挫折せしむるに至つたが其の際敵の手榴彈は氏の身邊に近く炸裂し氏は全身土砂を浴びたる瞬間敵機關銃彈は無念氏の胸部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂げた。而して此の戰鬪に氏の中隊は齋藤中隊長以下多數の戰

死者を出したが流石の堅陣も遂に同日占領したのであつた。

氏は參戰以來有ゆる困苦缺乏を克服して志氣益々旺盛又輕機關銃手として適時適切なる處置を講じて常に小隊の戰鬪を容易ならしめ殊に最後に於ける戰鬪の如きは機敏豪膽克く敵の逆襲を阻止して之を擊退し以て所屬小隊の危急を免がれしめたるは天晴れ軍人精神の精華を發揚せるものにして其の功績は正に皇軍戰史を飾るものである。今や其の人空しと雖も其の芳名は後世に語り傳へられ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（II）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松岡安造

慧眼剛膽の勇士屢々敵の逆襲を察知奮鬪し惜しくも滄州李家樓に散る

氏は兵庫縣多可郡杉原谷村の人にして父を捨藏亡母をこむめと云ひ大正四年一月二十一日に生れ未だ獨身であつた。性廉直にして孝心深く友情に富み事に當るや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和二年三月杉原谷尋常小學校を卒業し其の後は姫路市に出で半襟商の店員として勤續精勵し諸人の愛敬を受けて居た。昭和十一年一月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬沼田部隊安武中隊に編入せられ小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し直ちに天津南方運河地區の掃蕩戰に從事した。當時此の地方は豪雨の爲浸水地帶と化し水深往々腰に達し且高粱繁茂し行動頗る困難であつた。所屬大隊は八月二十一日潮宗橋の敵陣地を攻擊して之を擊破し續いて八月二十七日正午より趙連庄附近の數線陣地を攻擊するに至つた。敵は趙連庄の部落及其の兩側の運河を利用して堅固なる既設陣地を守備し其の大部の機關銃はトーチカ式掩蓋に收容され極めて頑強なる抵抗を續けて居た。されば我が第一線が勇猛果敢前進せるにも拘はらず敵前至近の位置に於て爾後の攻擊進捗せず携行彈藥も缺乏を來し止むなく敵と近く相對峙して夜を徹するに至つた。敵は此の狀況を見て取り翌二十八日午前四時半頃小癪にも大喇叭を吹きつゝ逆襲して來た。幸に我が第一線部隊の勇戰に依り之を擊退し所屬大隊は同日午後三時より攻擊を再興し猛攻に猛攻を續けて遂に縱深約六百米を突破して夜に入つた。此の時まで大隊豫備隊たりし所屬中隊は午後九時より第一線となり氏は敵情監視兵として警戒中であつたが敵は又もや執拗なる逆襲に轉じて來た。此の時氏は沈着剛膽正確迅速なる射擊を以て敵に多大の損害を與へ殊に敵兵二三名我が陣地に突入し來るや氏は率先飛鳥の如く之に襲ひかゝり悉く之を刺殺して敵の防毒面を分捕つた。

所屬部隊は其の後九月上旬には三間房陣官屯馬廠丁莊の諸陣地を攻略し九月中旬には靑縣興濟鎭附近の掃蕩に參加し九月十九日滄州の北方約二里の李家樓附近に進出して同地を守備し且滄州陣地帶の一角たる李家樓附近の敵陣地に對する敵情搜索に着手するに至つた。李家樓附近の敵陣地は趙連庄と同樣部隊及其の兩側を通ずる運河を利用して堅固なる陣地を

構築しありて其の機關銃は悉く掩蓋下に在つた。而して我が追擊部隊の左右連繫の整はざるに乘じ動もすれば部分的に攻勢を採らんとする氣配を示して居た。所屬中隊は第一線として九月十九日敵前近く進出し當面の敵に對し警戒中氏は選ばれて敵情監視兵となりしが翌二十日夕刻敵は氏等の占據せる部落に對し約五百米の地點より迫擊砲及列車砲を以て猛烈なる集中射擊を加へ來り同時に逆襲に轉じて來た。此の際氏は逸早く敵情を報告して所屬部隊の戰備を整へしめ殊に敵が隣接家屋に潜入して放火し其の火焰に乘じて先づ我が左翼陣地を席卷せんとするの企圖を感知するや機を失せず之を報告せしが其の瞬間轟然として敵砲彈身邊に落下炸裂し爲に氏は右下腹部及右大腿部に致命的重傷を負ひ數名の戰友と共に其の場に打倒れた。されど氣丈の氏は尙も奮鬪を續けんとしたが力及ばず後送された。時に午後五時五十分頃であつた。其の後所屬隊は敵を擊退し所屬小隊長が氏を假繃帶所に見舞へば氏は「小隊長殿殘念です。きつと良くなつてもう一度戰線に出て敵をやつけます」と力强く述べたが同夜七時五十分頃惜しくも遂に護國の華と散つた。

氏は誠實剛毅の人、鄕に在りては溫情人に接し忠實事に從ひ諸人の愛敬を受けて居た。今次聖戰に參加するや泥濘飢渴に堪え劍電彈雨の裡に從容其の任務に邁進し殊に慧眼克く戰機に投合して貴重なる報告を提出し以て所屬中隊の任務遂行に至大なる貢獻を致した。寔に是皇軍將兵の龜鑑たるものである。今や其の壯容に接すべくもなく痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　前田毅

小王莊夜襲に偉功を樹て更に東花園に奮戰して玉碎す

氏は鳥取縣岩美郡本庄村の人にして父を金太郎母をわいと云ひ大正五年十月五日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順頭腦明晰にして事に當り積極勤勉而も不屈不撓爲し遂げされば已まざる氣概があつた。昭和六年三月本庄小學校高等科を卒業其の在校八年間每學年級長に推され操行學業優等にして尋常高等兩科卒業時には池田侯督奬學資金による賞品を縣知事より授けられ教育勅語渙發四十年記念に際しても模範兒童として知事より表彰せられた。高等小學校卒業後は引續き本庄農業補習學校に入校し同七年一月より村役場に書記補として勤務し同九年大阪鐵道局採用試驗に合格せしも都合により就職せず四十年三月補習學校を卒業續いて青年學校に通學し同十一年三月本科五學年を優等にて卒業し賞狀を授けられ更に同十二年一月同校研究科を卒業した。氏は又文部省專門學校入學者檢定試驗國語漢文に合格した。昭和十二年一月徵兵として鳥取步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして四月には上等兵候補者に選ばれ七月には精勤章を附與せられて一等兵に進級した。

支那事變起るや長野部隊田卷中隊に屬し第二小隊第四分隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し九月七日より馬廠附近の戰鬪開始せらるゝや所屬中隊は九月九日小王莊の敵陣地を夜襲奪取すべき命を受け九日午後十一時四十分姚家庄を出發し肅々として敵陣地に向ひ幸に損害を受くる事なく陣地に近迫し陣地前身を沒する大水濠を勇敢に徒涉し一擧猛烈果敢に第一線陣地に突入して之を奪取した。然るに敵は我が中隊の奇襲的夜襲により該陣地を奪取せらるゝや本陣地方向より猛烈なる火力を集中し來り爲に我が死傷續出するに至りしが氏は毫も之に屈せず分隊長

指揮下に引續き敢爲前進して第二陣地に突入奮戰格闘の後之をも奪取し餘勢を以て更に其の後方小王莊部落の一角をも占領した。爾て敵は優勢なる兵力を以て之を奪回すべく逆襲し來りしも氏は沈着正確なる射擊を以て奮戰之を擊退し遂に小王莊を確保して中隊爾後の戰闘を容易ならしめた。氏は日誌に本戰闘の狀況と感想を認めて居るが其の一節に「(前略)輕裝し腕に白布を附し劍鞘に布を捲き物々しき準備を爲した。決死隊となりさながら四十七士の討入をする如し。夜襲に成功して喜ぶ。併しながら命を捨てる覺悟の反動か何となく心身に疲勞を感ず。そして口に表はせない複雜な感激あり」と記してあつた。

九月二十三日大隊は午前六時砲兵の支援射擊の下に東花園北方敵の主陣地に向つて一齊に攻擊前進を開始し所屬中隊は人合庄より東花園に通ずる道路上機關銃を收容せる掩蓋陣地を奪取すべく此の敵に向つて近迫した。此の時氏は第一線小隊の火線分隊内に在りて雨下する敵彈を冒し歩行至難なる泥濘而も水濠縱横に走れる地帶を分隊長指揮下に率先して勇敢に前進し其の停止に際しては沈着克く正確なる射擊を以て敵を制壓し斯くして一進一止し死傷續出する狀況にも屈せず敵に近迫遂に突擊距離に達した。夕暗迫る午後六時三十分愈々突擊の命令下るや勇猛果敢に第一陣地に突入之を奪取し息をもつかず逐次其の後方に點在する第二第三線の陣地に突擊又突擊し此の間我が死傷相次で生じたるも之に屈せず躍進し遂に堅固に設備せられたる敵の本陣地前約五十米に達した。時恰も下弦の月光は物凄く戰場を照しトーチカよりする射擊は一層猛烈を極めしも益々勇奮猛威を逞しふするトーチカに向つて奮戰を續けありしが敵の手榴彈と機關銃火は猛烈を極め無念氏は右胸部に貫通銃創を受け午前一時遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戰奮闘と尊き犧牲とにより二十四日午前一時三十分には敵の第一陣地を同日朝には敵の全陣地を拔くことを得た。

氏鄕に在るや學業操行共に優等幾度も表彰を受けたる模範青年にして其の入隊するや亦優秀の兵であつた。而して今次戰陣に臨むや毎戰勇敢克く歩兵の本領を發揮して遺憾なかつた。實に斯くの如きは其の日誌に心境披瀝の如く「君國の爲命を捨てる覺悟」にて奮戰せる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾何もなくして氏の如き忠烈有爲の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　藤田助市

京漢線西方山地戰に活躍し更に寡兵敵の逆襲を破碎して娘子關方面に玉碎す

氏は廣島市豐田郡久友村の人にして父を繁太郎母をマツと云ひ明治四十四年四月十八日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして責任觀念强く事を行ふや熱誠眞摯遂げずんば息まざるの氣概を有し其の體力も絶倫であつた。大正十四年三月鄕里の久比小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて父母を助けて農業に從事し入營時に及んだが其の間約二箇年半

は久友村沖友産業組合書記として勤務し良成績を擧げた。昭和六年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊へ入營し滿洲事變に從事して勳八等瑞寶章を賜はり又在營間誠意軍務に精勵し同八年十月滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森本部隊藤永中隊に編入せられ第一小隊第二分隊兵として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月初め頃より北支良鄕附近の第一線に在りて警備に任じて居たが涿州會戰の戰機熟するや所屬大隊は九月十四日夜半良鄕を出發し同月十六日午前八時三十分敵陣地帶の一要衝たる竇店鎭の陣地前千米に攻擊準備を完了し所屬中隊は大隊の第一線となり午前十時三十分より攻擊を開始し猛攻三時間餘にして之を奪取し涿州會戰に於ける戰勝の端緒を開いた。氏は此の攻擊前進中三方面より集中射擊を受け上官戰友等犧牲者續出せる慘烈の情況下に於ても毅然として勇往邁進し正確機敏なる射擊に依り要點に於ける頑敵を制壓し以て中隊の戰鬪に大なる貢獻を致した。續いて敵を追擊し保定附近の攻擊となるや所屬部隊は京漢線西方の山間を前進し苦鬪數日間京漢線方面の作戰に策應して保定附近の堅壘を土崩瓦解せしむるに至つたが其の間糧道は絶え渴すれど飲料水もなく眞に不眠不休の難戰に遭遇した。併し氏は克く分隊長を輔佐し戰友を勵まし絶倫の體力氣力を以て健鬪を續けて居た。所屬部隊は其の後更に敗敵を猛追して石家莊附近に於ける敵陣地帶の鎖鑰たる靈壽（石家莊の西北方山地）附近に向ひ强行軍を行ひ十月七日には靈壽附近の北崗上及尹凡同高地の二堅壘を奪取し九日以來王母村の陣地攻擊には中隊は尖兵中隊として前進し氏は其の尖兵に屬して中隊との連絡に任じ迅

速確實に其の任務を達成し更に攻擊に方りては率先彈雨の中に果敢なる行動を以て中隊戰勝の一素因を與へた。

所屬部隊は更に山西省方面に作戰する兵團に屬し一意天險の山岳地帶に向ひ前進し十月二十三日夜遲く東石門村附近に到達して露營した。此の時所屬中隊は第一線警戒部隊として部落の南方高地を占領すべきを命ぜられた。中隊は警戒配備に就くに當り池田斥候を派遣して前方地區の敵情を搜索せしめた。此の際氏は戰友四名と共に選拔を受け池田斥候長に屬し午後十一時三十分行動を起し勇躍暗闇の中に消えて行つた。午前一時氏等の斥候は突如約五十名の敵部隊と山を隔てて遭遇したが氏は目ざとくも之を發見して斥候長に報告した。敵は忽ち亂射亂擊を浴びせて來りしも氏は分隊長の指示に從ひ速かに附近の地物を利用し沈着豪膽に應戰した。此の時敵兵數名は小嶺にも氏等を少數と侮り眼前十五米に猪突肉薄して來た、氏等斥候は憤然として之に向ひ突擊すべく氏も上體を起せし一刹那腹部に貫通銃創を受けた。豪膽にして體力絶倫の氏は之に屈せず尙敵中に躍り込み敵兵二名を刺殺した。然るに無念第二彈は氏の咽喉部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂げた。併し氏の慧敏勇敢なる行動に依り斥候等は遂に頑敵を見事に驅逐して敵の逆襲を破碎し中隊の警戒配備を完成せしむるを得た。

氏は志操堅確志氣亦旺盛の人にして今時聖戰に參加するや京漢線西方山地より更に支那三大難關たる娘子關方面の戰鬪に參加し粟或は芋にて飢を凌ぎ不眠不休の猛追擊に部隊の疲勞其の極に達せるにも拘はらず克く困苦缺乏に堪え數回の激戰にも敵の彈雨を冒して率先勇敢に奮鬪し常に所屬中隊の戰勝に貢獻せる所甚大であつた。不幸兇彈に斃れ此の忠誠勇武の士を喪へるは痛歎哀悼の情を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍精兵の鑑として皇軍戰史に輝き其の芳名は永く後世に傳へられ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　福原勝

戰鬪慘烈を極むるも不屈不撓奮戰戰勝の端を拓きて大冊河畔に散る

（兄も滿洲事變に戰死）

氏は栃木縣那須郡佐久山町の人にして父を巳之吉母をイクと云ひ大正二年十月三十一日に生れ妻シゲとの間に未だ子はなかつた。資性溫厚篤實孝心深く弟妹を慈しみ一家の柱石となり頗る勤勉常に鷄鳴に起き星を戴いて歸るを常とし不屈不撓の氣概に富み鄕閭の模範青年として衆の信賴厚かつた。昭和四年三月佐久山小學校高等科を卒業し其の後兄の許にありて川魚商に從事し昭和八年一月徴兵として岐阜歩兵聯隊に入營在隊間滿洲事變に出動して武勳を樹て勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり同九年十一月善行證書を附與せられて滿期除隊し其の後は農業に精進してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊成島中隊に屬し第三小隊第二分隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十五十六日は拒馬河畔北相附近の戰鬪に次で十八日日沒より十九日拂曉に亘りては南義安の戰鬪に參加し爾後敵を急追して九月二十一日大冊河左岸に到達した。

大冊河は河幅百米以上水深一米三、四十糎にして敵は此の障碍を利用して河中には水雷を敵岸には地雷を敷設し其の後方には鐵條網及水濠を繞らし其の陣地は數線に設けて掩蓋を設備し頗る堅固に占領して極力我が進擊を阻止すべく待構へてゐた。從つて此の堅陣に對する晝間攻擊は徒らに損害を多くするに過ぎざるを以て所屬部隊は夜襲を以て之を奪取するに決し直ちに渡河準備に着手した。此の時所屬中隊は部隊主力に先んじ王谷莊堡附近大冊河の渡河點を確保すべき任務を受け中隊長代理佐藤少尉以下一同襄に拒馬河畔の戰鬪に於て戰死せる成島中隊長の弔合戰を爲すべく決死の覺悟を未固めだ戰はざるに意氣衝天の概があつた。同夜午前二時恰も十七日の皎々たる月光を背に浴びつつ渡河を開始するや敵は逸早く我が夜襲を察知し果然猛烈なる射擊を開始せしが氏は分隊長指揮下に之を物ともせず率先して勇敢に濁流に躍り込み而も敵陣に近づくに從ひ所々頭を没する流線を押し切り對岸に取り着いた。然るに此の附近一帶は平坦なる砂地であり彼我の中間地區に僅かに柔畑があるのみ而も敵の陣地は百米内外にして正面及側面の輕機關銃掩蓋重機關銃の射彈及迫擊砲彈は恰も雨か霰の如く殊に左斜前方よりする側射の爲我が死傷續出するの狀態であつた。併し氏は更に屈せず中隊の左第一線小隊の火線分隊内にありて分隊長指揮下に河岸より約五十米前進して散兵壕を構築し且克く沈着して每發必中の射擊に專念しつつ寡兵を以て敵の出擊に備へ主力の渡河を掩護し軈て主力渡河を終り攻擊準備を完了して午前十時敵の第一線陣地に突擊の命令下るや敢然起つて突擊に移らんとせし時不幸臀部に盲貫銃創を受けた。併し氏は之に屈せず尙も前進せんとせしが敵前十五米又もや一彈左足背蹠を貫通し流石剛氣の氏も最早起つ能はず軈て隊編帶所に收容せられ衛生部員の手厚き醫療看護を受けたるもその甲斐なく遂に二十四日護國の華と散つた。而して中隊は惡戰苦鬪殘員僅か二十名となりたるも氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより午前十時敵の第一線を突破し同十一時には其の主陣地を奪取し全軍戰勝の端を拓くに至り時の軍司令官より光榮ある感狀を附與せられた。因に氏の一家は襄に滿洲事變に實兄も亦名譽の戰死を遂げたる譽れの家門である。

氏郷に在るや至孝勤勉業の模範と謂はれ義には滿洲事變に功を樹て今次亦召されて戰陣に臨むや每戰彈雨の下勇敢殊に大冊河畔に於ては戰鬪慘烈の極所に立つも不屈不撓而も傷つくも屈せず終始勇敢に奮戰し歩兵の本領を發揮して戰勝の端を拓いた。實に斯くの如きは忠孝一道良兵良民の軌範にして畢竟家を忘れ一身を君國に捧げ斃れて尙已まざる盡忠至誠の發露と謂ふべく參戰幾何ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き兄弟殉忠の芳名は萬世不朽に家門を飾り不滅の英魂は護國の神と仰がれ二柱の神靈は尙も皇猷を扶翼し奉ると共に遺族の前途に尊き加護佑助を垂れて措かぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　藤田義則

沈着勇敢克く奮戰して南苑の陣前に散る

氏は福岡縣嘉穗郡穗波村の人にして母をトルと云ひ明治四十四年一月五日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして孝心極めて深く殊に義に强く職分に勤勉にして郷閭青年の模範であつた。大正十四年三月稻葉小學校高等科を卒業其の後家業に從事し昭和五年三月現役志願兵として福岡歩兵聯隊に入營在隊間克く軍務に精勵し翌六年十一月滿期除隊し其の後朝鮮黃海道水口面筒洞鑛業所に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召鯉登部隊小橋中隊に屬し小銃兵として勇躍征途に就いた。かくて所屬部隊は七月中旬北支に到着同月二十六日郎坊の戰鬪に參加し翌二十七日團河村の戰鬪には氏の中隊は第二線たりし爲直接戰はざりしも第一線同樣困難下する敵彈に曝されつゝ勇敢に前進し勃々たる勇心を押へながら時期の到來を待ち夜に入つた。

翌二十七日所屬部隊は南苑攻擊の爲午前五時より行動を起し拂曉までに攻擊準備を整へ午前八時三十分より戰鬪を開始した。敵は高さ五米の土壁に據り幅五米深さ三米の水濠を繞らし堅固に陣地を占領して頑强に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく而も當日は前日同樣無風にして氣溫百四十度に達し炎熱灼くが如く渴すれど水はなく加之丈餘の高粱連續繁茂して我が戰鬪行動は頗る困難であつた。

此の攻擊に待望の第一線となり攻擊前進に移るや氏は第一線小隊の火線分隊內にありて高粱畑中をしかも勇敢に前進又前進遂に敵前五六十米の地點に進出した。此の時漸く敵陣地を目視し得るに至るや氏は分隊長の指揮に從ひ篠つく雨の如き敵彈下に沈着克く每發必中の射擊に專念し逐次敵を殪し奮戰中機熟して愈々小隊突擊を發起するや氏は分隊長と共に率先して勇敢に前進し先づ手榴彈を敵陣地に投擲して敵を震駭せしめ且多數の敵を殪し其の機に乘じ將に銃創を埋つて突込まんとせし際敵前僅かに五米の地點に於て惜しくも頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより午後一時さしも頑强なりし敵に多大の損害を與へて南苑の兵營を奪取することを得た。

氏郷に在るや至孝にして郷閭青年の模範と謂はれ出でゝ戰陣に立つや不屈不撓有ゆる困難を克服し彈雨の下或は沈着正確なる射擊により敵を制し或は率先勇敢に突擊し克く小銃兵たる本分を完うして遺憾なかつた。實にかくの如きは忠孝一

道一身を君國に捧げて斃るゝまで任務に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして河北の野に散りしは痛惜極まりなきも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國の前途を守護し且一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　藤森仙吉

中隊長傳令活躍奮鬪克く其の重任を果して南苑に散る

氏は岡山縣御津郡長田村の人にして祖父を國太郎母を千賀と云ひ大正五年七月八日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして孝心深く事に當り積極勤勉不屈不撓遂行せざれば已まざる氣概を有し鄉土青年の模範であつた。昭和六年三月長田小學校高等科を卒業引續き實業補習學校に入り同九年三月同校を同十一年三月青年訓練所本科を卒業し尙續いて研究科の課程を修めてゐた。又青年團支部長に推され團發展の爲盡瘁してゐた。昭和十一年十一月徵兵として龍山步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵翌十二年七月一等兵に進級した。

支那事變起るや南雲部隊第六中隊に屬し中隊傳令として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は七月中旬北支に到着し同月二十六日まで唐山附近の警備に任じたが當時北支は戰雲低迷し頗る緊張裡に氏は日夜各種の勤務に精勵し克く其の任を完うした。次で七月二十七日國河村附近の戰鬪に際しては敵彈雨飛の中而も氣溫百四十度灼くが如き炎熱を冒し迂視行動共に困難なる高粱畑中を或は步兵砲隊及速射砲隊との間の連絡に或は第一線小隊長との間の連絡に終始縱橫に活躍奮鬪し中隊の三春莊附近に於ける敵の右翼包圍の企圖遂行を容易ならしめ以て戰勝の端緒を拓き更に突擊に當りては第一小隊と共に勇敢に突擊し午前七時敵陣地を占領することを得せしめた。

七月二十八日所屬部隊は南苑攻擊の爲午前五時三十分より行動を起し拂曉までに攻擊準備を整へ午前八時四十分より攻擊を開始した。敵は高さ四米の土壁を利用し深さ三米の水濠を繞らし重輕機關銃迫擊砲等多數の火器を配備して頑强に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我が攻擊地區は利用すべき地形地物とてなく丈餘の高粱連續繁茂して通視行動共に頗る困難なりしのみならず當日は前日同樣無風にして氣溫百四十度に昇り炎熱灼くが如くしかも渴すれど水はなく本攻擊の困難は眞に想像以上のものであつた。而して中隊が攻擊前進に移るや敵は我が飛行機の爆擊野砲の砲擊にも怯まず頑强に抵抗し機關銃迫擊砲彈を猛烈に浴びせ來りしが氏は各部隊間の通視不可能なりし爲篠つく雨の如き敵彈の下勇敢にも高粱畑を駈け廻り中隊長と部下小隊長間の連絡に將た又隣接中隊との連絡に活躍大いに努め常に其の連絡を確保し中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ又中隊長の側近に在りては陰蔽地の警戒に油斷なく、斯くして前進又前進して敵に近迫し遂に敵前二百米附近にまで達した。然るに此の頃第一線小隊との連絡杜絕するに至りしを以て氏は高粱畑中を彼方此方と其の所在を搜し廻り漸くにして小隊の位置を發見し之を中隊長に報告するや此の時無念敵の一彈は下腹部を盲貫し遂に其の場に倒る

丶に至つた。しかし豪氣の氏は之に屈せず「何之れ位の事が」と叫びつ丶起ち上らんとせしが重傷の爲身體の自由を失ひ驟て收容せられて衛生部員の手篤き看護を受けたるも其の甲斐なく七月三十日黄村驛に於て遂に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮鬪と尊き犧牲とにより午後二時さしも頑强なりし敵陣地を奪取することを得た。

氏鄕に在るや孝子勤勉の人であつたが其の戰陣に臨むや選ばれて中隊長傳令となり毎戰彈雨の下地形天候の困難を克服し至難且重要なる部隊間の連絡命令意圖の傳達等に任じ終始勇敢奮鬪中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて任務の爲には斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮鬪玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳七等功七級　深谷專壽

勇敢なる機關銃彈藥手拒馬河畔北相夜襲に奮戰して玉碎す

氏は茨城縣那珂郡前渡村の人にして父を長次郎母をさきと云ひ大正元年十一月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして而も進んで難局に當るの氣魄を有し又至孝の人で村內一般の信賴を受けて居た。昭和元年三月前渡高等小學校を卒業し其の後は專心家業を手傳ひ昭和八年一月徵兵として水戶步兵聯隊留守隊に入營間もなく滿洲に出動中の所屬部隊に編入され爾來日夜軍務に熱心勉勵しつ丶各地の警備及匪賊討伐に參加し九年五月所屬部隊と共に內地に歸還して七月歸休除隊し功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり除隊後は芝浦製作所に勤務して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月中旬應召石黑部隊に編入され加倉井機關銃隊の彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後所屬部隊は降雨泥濘飢渴の難行軍を續け永定河北岸地區に進出し同河對岸の敵陣に對し渡河攻擊の準備に着手した。斯くて九月十四日愈々敵前渡河攻擊に際しては所屬隊は兵團の豫備隊となり將兵一同骨肉の歎に堪へなかつたが我が第一線が敵陣を突破するや原隊に復歸を命ぜられ勇躍追擊に參加し敵を猛追して十六日拒馬河畔に進出した。然るに敵は對岸一帶に頗る堅固なる陣地を構築し配するに優勢なる兵力を以てし其の勢侮り難き狀況であつた。殊に拒馬河は川幅百數十米到へ連日の豪雨により河水著しく增水して水深一米六〇內外に達し濁流滔々として一大障碍を呈し敵は此の地の利を利用して皇軍を陣地前に擊滅すべくいきまいて居た。之より先我が坂西部隊は十五日晝間渡河を强行し當面の敵を攻擊中にして此の日屢々優勢なる敵の逆襲を受け苦戰中であつた。之が爲所屬部隊本部並に第二大隊は十六日夜二時より拒馬河の濁流を渡河し第二大隊の主力は坂西部隊の右方に展開して當面の敵を夜襲し部隊本部並に第八中隊と氏の所屬機關銃小隊は部隊長自ら指揮して第二大隊の左翼方面より北相の北方敵の第一線陣地の一角を强襲した。然るに敵は迫擊砲機關銃等を亂射し我が近接に伴ひ其の火力は益々熾烈となつた。部隊長以下氏等は決死猛火を冒して逐次敵に近迫し愈々敵

陣近く肉薄するや一齊に手榴彈を投擲して敵を震駭せしめ其の瞬間猛烈果敢に敵陣に突入した。此の時氏は率先突入猛虎の勢をもつて奮戰格闘敵を次ぎ〳〵に刺殺し其の活躍は洵に勇ましくも見覺ましきものであつた。斯くて直轄部隊は敵に大損害を與へ第一線の敵陣を突破し息つく暇もなく所在に殘敵を掃蕩しつゝ更に第二陣地に向つて攻擊前進を續げつゝあつたが敵は小癪にも側方より逆襲して來た。部隊長以下好敵來れかしと沈着之を近く引寄せ一齊に猛射を浴びせて多大の損害を與へて之を擊退し更に猛進中敵の迫擊砲彈は憎くや部隊の中央部に落下炸裂し小隊長以下十數名の死傷者を出すに至つた。此の時氏も亦全身數箇所に破片創を受けた。併し剛毅の氏は屈せず尙も起んとしたが出血甚しく遂に壯烈なる戰死を遂げた。併し氏等の奮戰と尊き犧牲に依りさしもの堅陣も我が攻略する所となり敵は大損害を受け敗走したのであつた。

氏は今次聖戰に參加するや有ゆる危險困難を冒して勇戰奮鬪克く其の責務を完うし所屬隊の戰勝に貢献する所甚大であつた。玉に拒馬河畔北相の强襲に方りては銃劍を揮つて敵陣内に奮戰格鬪し其の勇猛果敢なる活躍は鬼神をも避けしめ步兵の精鋭を發揮して遺憾なく其の功績は正に拔群であつた。參戰幾何もなくして斯かる忠勇義烈の士を喪ひたるは洵に痛恨の至りである。然りと雖も氏の樹てたる赫々の武勳は其の芳名と共に千載に亙り皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TM

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　藤田勝

重機裝塡手群敵を眼前に沈着克く其の任を果して張仕望に散る

氏は栃木縣那須郡東那須野村の人にして父を忠次母をヨシと云ひ大正八年一月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性温良謹嚴事に當り勤勉進取の氣象に富み衆の畏敬を受けてゐた。昭和八年三月大原間小學校高等科を卒業其の後は村内製板工場に雇はれて書記となり傍同十年四月東那須野青年學校に入校し入營時に至つた。而して小學校高等科青年學校共に其の成績優等にして模範生であり且日本通信大學法制會に入會して勉學し卒業證書を附與せられた。尙氏は夙に軍人たらんことを志し軍事に關する書籍に就き研究怠りなかつた。昭和十二年一月現役志願兵として宇都宮步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして同年七月には一等兵に進級し選ばれて下士官候補者となり專心修業中であつた。

支那事變起るや坂西部隊第一機關銃中隊に屬し第三小隊第二分隊二番銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月中旬は永定河畔楡垈鎭南方地區の戰鬪及同河畔南公由の戰鬪引續き拒馬河畔揚家屯附近の戰鬪及平漢線西側地區の戰鬪に下旬には東釜山附近の戰鬪及大冊河畔王谷莊堡附近の戰鬪に。十月上旬は滹沱河の渡河戰鬪に何れも參加し此の間每戰勇戰奮鬪克く其の任務を完うし部隊の戰勝に貢献せし所甚大であつた。十月十日所屬部隊は石家莊占領後敵を急追して元氏附近潞龍河に敵を擊破し引續き急行軍を繼續中十月十五日午前一時頃吳郭庄に於て退却し來れる敵の一縱隊は俄然部隊の左側面に現はれた。氏は暗夜咄嗟の際にも拘はらず分隊長指揮下に沈着剛膽迅速に陣地に進入し射手と協力して裝塡に任じ機を失せず猛射を開始せしめ敵に多大の損害を與へ中隊をして砲一門及若干の捕虜を鹵獲することを得せしめた。

爾後所屬部隊は十月十五日より順德郡郡滋縣を經て臨漳に向ひ追擊し十一月八日大名陣地の第一線陣地たる大名城西方約六里院集堡に對し午前十一時半頃より攻擊を開始し同日夕刻には約三里の縱深を突破して同夜所屬機關銃中隊は部隊本部と共に民家二、三十軒ある張化望部落に露營し至嚴なる警戒裡に夜を徹する事となつた。然るに同夜半午前三時三十分頃約二百の敵兵突如夜襲し來り氏の所屬機關銃小隊は第四中隊の下士哨を援助すべく命ぜられ急遽戰鬪準備を整へ將に出發せんとせし時敵は第四中隊北側より突擊し來り我が前方四五十米にまで肉迫して手榴彈を投擲しチェツコ機銃を亂射して來た。依つて小隊長は第二分隊に直ちに此の敵に對し射擊開始を命ずるや氏は群がる大敵を直前に見つゝ而も暗夜にも拘はらず沈着克く速かに裝塡し機を失せず其の一連を發射せるに群がり來れる敵は多大の損害を受け右往左往狼狽せしが窮鼠却つて猫を咬むが如く驀て我が銃口より噴き出す火光を目掛けて亂射を開始するに至つた。併し氏は身邊に集中する猛烈なる敵彈の中に在りて更に屈せず第二連目の彈藥を裝塡すべく伏姿の儘裝塡孔を注視して今や將に裝塡を終らんとせし時無念敵彈鐵軸諸共前額部より後頭部に貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午前八時であつた。併し部隊は氏等の勇戰奮鬪により敵の企圖を挫折し之を擊退せしのみならず十一日午後八時には大名城を占領することを得た。

氏や宿望の軍人となり其の入隊するや成績優秀將來の幹部として囑望せられて居た。而して今次偶々時運に際會し其の戰場に臨むや大小幾多の戰鬪に參加し射手と一體不可分の關係にある裝塡手として每戰勇敢に奮鬪重機關銃の威力を發揮し戰勝の因を爲して遺憾なかつた。殊に吳郭庄及張化望に於ては咽嗟の際眼前の群敵に對し泰然自若大敵たりとも懼れず沈着剛膽克く其の任を完うせしは是畢竟一身を君國に捧げて死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。聖戰中途氏の如き有爲の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも一死奮戰して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　藤田長吾

忠勇豪膽なる砲手正太線山岳地帶に奮鬪し部隊戰勝の礎石となる

氏は新潟縣中蒲原郡小合村の人にして亡父を長作亡母をユキと云ひ大正二年五月二十日に生れ藤田トクの養子となり未だ獨身であつた。性溫良着實にして氣概を有し事に當りては熱誠眞摯進んで難局に當るの美風を持つて居た。昭和二年三月新津高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひ入營時に及んだ。昭和八年十二月高田山砲兵聯隊へ入營し翌九年十一月歸休除隊となつた。歸鄉後は家業に精勵し養母及實家の祖母に克く事へ孝養怠りなかつた。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬召集令に接したが氏は欣喜雀躍「待つてゐました。亡父も日露戰役に從軍しましたが僕も父に負けずに戰ひます」とて九月上旬應召貴島野砲兵部隊渡邊中隊に編入せられ九番砲手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬北支へ到着し豐臨を經由し泥濘車軸を沒する京漢沿線の惡路を踏破しつつ石家莊方向に强行軍を行つた。氏は其の際騎銃手として中隊の先頭或は側方警戒に任じ特に九月二十二日には約四粁に亘る濕地帶に遭遇

し戰砲隊の前進極めて困難となるや氏は率先馭者に協力し全身泥まみれとなり疲勞甚しかりしに拘はらず不屈不撓車輛の推進を援助し難關を切りぬけた。所屬隊は十月初旬漸く第一線部隊に追及したが所屬中隊は正太線方面より太原方向に作戰する兵團の右縱隊に配屬を命ぜられ石家莊附近より山嶽重疊の山西省境に向ひ轉進する事となつた。斯くて十月十日には東嶺岩附近、十二、十三日には南關附近に於て約十倍の敵と遭遇するに至つたが氏は敵彈雨飛の中に陣地進入の爲橋梁の補修に彈藥補充に最も勇敢に活躍して中隊の戰鬪を有利ならしめ更に十六日より約十日間に亘り核桃園及舊關附近の戰鬪に參加するや氏は險峻寄るべからざる峻峰幽谷の地帶に熾烈なる敵の機關銃火を浴びつつ毅然として彈藥補給に任じ以て山砲隊の威力を遺憾なく發揮せしめて頑敵を擊破し井陘に向ひ追擊前進した。敵は此の附近にも天險を利用しトーチカ陣地を設けて頑强に抵抗したが小戰鬪三日間にして附近一帶の敵軍を掃蕩し赫々たる武勳を奏した。其の間所屬中隊は優勢なる敵より包圍せられ或は遂に白兵戰を交へ辛ふじて之を擊退せる事も數回あつたが氏等は克く將兵一體となり堅忍死鬪を續け其の重任を完うした。

十月二十七日省境の敵を擊破して追擊に移るや依然として山嶽嶮峻徒步兵の通過さへ困難であつた。連日連夜の戰鬪に引續き險坂幽谷を登降し人馬の疲勞甚だしかつたが氏は勞苦を厭はず積極的に馭者と協力し馬匹を扶けて難所を通過し又騎銃手として警戒勤務に服し十一月六日午前七時鳴李驛附近に到着した。此の時兵力約一千名の敵四周に現はれ突如小銃機關銃の猛射を浴びせて來た。此の時我が步兵部隊の主力は鐵道線路の北側に展開して西方の敵を攻擊し中隊は驛北側に放列を布置し一部を以て西正面の敵に一部を以て東正面の敵に對し砲擊を開始し有效適切に敵を制壓した。然るに驛東南より肉薄し來る敵の脅威を受けし爲中隊長は騎銃手を集めて之が直接警戒を行はしめた。氏は此の警戒部隊に屬し驛の東方約百米に位置して此の敵を警戒中鳴李村部落内に敵影を認めし爲機を失せず急射を以て之を報告し警戒隊長をして機宜に適する處置を採らしむるを得た。氏は更に慧眼克く敵狀監視中であつたが此の時氏等の警戒正面の敵機關銃は氣たたましく猛射を浴びせ來たり氏は無念にも其の一彈の爲胸部に貫通銃創を受け其の場に打倒れた。されど氣丈の氏は「なに、傷は淺い大丈夫だ、分隊確つかりやつて呉れ！」と叫びしが致命の重傷に息も絶え絶えに萬歲を奉唱して悲壯の戰死を遂げた。時に午前九時頃であつた。所屬中隊は氏等の勇戰奮鬪に依り敵の機先を制して危機を免がれ其の後主力步兵の戰鬪に緊密なる協力を與へ頑敵を粉碎して榆次方向への追擊に移つた。

氏は明朗沈勇の人、今次聖戰に參加するや支那三大難關の一と稱せらるる正太線沿道の山岳地帶に奮鬪し每戰豪膽不撓敵火を冒して砲手の本分を盡し堅忍持久千山萬岳を踏破して山砲隊の機動性發揮に貢獻し戰機に投じて警戒の重任を完うし遂に惜しくも玉碎した。今や斯かる有爲にして忠勇の士を喪ふ痛歎哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや砲手の鑑として皇軍戰史を飾り又其の芳名は永く後世に傳へられ不滅の英靈は護國の神と仰がれて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小林寅次郎

拒馬河可西務の敵前渡河に殊勲を奏し惜しくも護國の華と散る

氏は群馬縣邑楽郡大川村の人にして父を亦次郎母をじようと云ひ大正三年九月一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして氣概に富み事に當るや熱誠眞摯身を持すること謹嚴にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和三年三月大川小學校高等科を卒業し其の後は東京市北品川東燈電氣製作所に雇はれ入營時に及んだ。昭和九年一月徴兵として高崎歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して同十一年十一月滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊清水速射砲中隊に編入せられ第一分隊の彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し泥濘の難行軍を續け永定河胡家舖北方地區に進出した。此の時氏は選ばれて斥候要員となり敵彈を冒して渡河點の偵察に從事したが慧敏豪膽よく斥候長を輔佐し貴重の資料を提出して中隊長の爾後の戰闘計畫を容易ならしめ同月十四日所屬部隊が愈々敵前渡河を開始するに方りては所屬中隊は第一線近く放列を布置し所屬部隊の渡河動作の掩護に任じた。此の際氏は熾烈なる敵の銃砲彈を浴びつつも勇敢機敏に彈藥を補給し以て速射砲中隊の戰闘威力發揚に甚大なる寄與を與へた。

永定河畔の戰闘に勝利を得たる所屬部隊は爾後敵を急追して拒馬河畔に壓迫するに至つたが十五日拒馬河北岸の東茨村に差しかかりし時敵の一部は小癪にも西茨村附近の陣地に據り拒馬河右岸の敵と協力して我が前進を阻止した。所屬中隊は直ちに放列を布置し對岸の敵重火器を猛射して之を撲滅し以て我が第一線の攻擊準備を容易ならしめた。氏は此の際據るべき地物もなき地形に於て機敏に彈藥を砲側に補充し所屬中隊の任務遂行に禦も支障なからしめた。翌十六日には所屬部隊は望海庄附近に於て敵前渡河を敢行し可西務の堅壘を奪取すべき任務を以て正午頃より行動を起した。當時敵は其の陣地帶の左翼據點たりし房山を失ひ又中央據點たる固安方面も危殆に瀕しありし爲可西務附近の防禦は極めて重要性を帶ぶるに至り當面の敵兵力は實に一箇師と稱せられて居た。所屬中隊は前衛大隊並に部隊主力の渡河掩護を命ぜられたが敵陣地就中可西務の左翼陣地は突出して頗る堅固なるトーチカ陣地を成し其の北側拒馬河に泛水せる舟群と相俟ち望海庄附近の我が渡河點を側射し得る如く準備されて居た。午後零時半前後我が前衛部隊が渡河を開始するや手ぐすね引いて待ち構へて居た敵は果然篠衝く雨の如く猛射し來り忽ち死傷續出の悲境となつた。

此の時所屬分隊が取敢へず左岸地區に陣地占領を命ぜらるるや氏等は神速機敏に放列を布置し憤然として火蓋を切つた。一彈又一彈活躍中の頑敵を粉碎し以て前衛諸隊の渡河を初めとし中隊主力の渡河を掩護し以て分隊の重責を全うした。此の間氏は分隊の情況を明察し適切機敏に彈藥を補充し以て火砲の最大威力を發揚せしめたが其の協同動作の見事なる語るも聞くも涙の種であつた。而も氏は彈藥補充の間隙を利用しては敵狀の變化を確認し適時之を分隊長に報告して其の戰闘指揮を容易ならしめた。次で所屬分隊も敵彈下に右岸地區に陣地を變換して所屬中隊の隷下に入り引續き奮戰中憎くや一彈飛來臀部に貫通銃創を受けて打倒れ遂て野戰病院に收容せられた。然るに手厚き手當の甲斐もなく九月二十日傷狀革まり惜しくも護國の華と散つた。併し所屬部隊は氏等の尊き犧牲に依り十六日午後六時可西務の堅陣を奪取するを得た。

氏は誠實溫厚の人、到る所諸人の愛敬を受けて居たが今次聖戰に參加するや極めて重要なる戰局に際會し所屬部隊の敵前渡河の安危を双肩に擔ひ力戰苦鬪克く其の重任を全うせるは眞に輝かしき武勳にして洵に聖旨に副ひ奉り得たる大勇者と謂ふべきである。今や斯かる忠勇義烈の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて其の芳名を後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（MS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　高祖清太

居庸關平地泉魏家庄に偉勲を奏して護國の華と散る

氏は佐賀縣佐賀郡南川副村の人にして父を林三郎母をムラと云ひ大正七年六月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順にして寡默責任觀念旺盛にして難局に當るの氣概を有し又眞宗信徒として信仰心厚き人であつた。昭和八年三月川副村高等小學校を卒業し其の後は父母を扶けて農業に從事して居たが氏は五人兄弟中の二男にて長兄は小學校教員を奉職し弟は二人共に通學中なりし爲父は氏を自分の手助けに家事に專念せしむる考であつた。併し氏は其の頃より熱心軍人たらん事を父に迫つて息まなかつた。父は家事上同意ではなかつたが氏の烈々たる熱意に動かされて之を快諾し十九歳の折駐滿部隊の現役兵を志願し合格して翌十二年三月滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來日夜熱心軍務に精勵し優良の成績を擧げつゝあつた。

昭和十二年七月蘆溝橋事件勃發するや暫くして氏は既に北支に出動中の千田部隊補充員を命ぜられ勇躍出發して七月二十二日懐柔に於て同隊に合し機關銃隊彈藥手を命ぜられた。鄕里に於ける父は氏出征の報を受くるや自分等夫婦の頭髪を切り守袋に入れて愛する氏の許に送り「お前も頭髪を送れ而して君の御爲命惜しまず忠義を盡くせ」と申送り氏は戰地より之に對し「御守の御蔭で奮戰を續けて居ます。一死報國戰死すれば本望です」と返書したが此の手紙が氏の絶筆とならんとは知る由もなかつた。斯くて所屬部隊は同月二十八日清河鎭附近に歩兵約四大隊を基幹とする敵を擊壊し更に西苑附近殘敵を掃蕩して萬壽山附近に兵力を集結し爾後の戰鬪を準備した。然るに當時蔣介石直系の中央軍は京綏線を前進し八月に入るや長城線を越へて進軍を續け我が側背を衝かんとする行動に出て來た。玆に皇軍は之を擊滅するに決し八月九日所屬部隊は萬壽山附近を出發し南口に向ひ前進し十一日より該地附近山岳地帶の天險陣地に據る湯恩伯麾下中央第十三軍第八十九師に對し攻擊を開始し晝夜猛攻の上十二日午後八時南口鎭を占領し息つく暇もなく敵を急追し約七里に亘る山岳重疊嶮峻なる山嶺を扼守する敵を猛攻又は夜襲して逐次敵を長城線に壓迫した。然るに敵は支那三關の一たる天下の嶮居庸關附近の堅陣に據り我が前進を阻止し皇軍は連日連夜猛攻擊を續行して遂に八月二十三日居庸關を攻略したのであつた。此の間氏は彈藥手として炎暑百三十度の灼熱と飢渴を忍び雨か霰と降り來る敵彈の下に彈藥の補充陣地變換敵情監視等終始積極機敏に活躍勇戰し所屬隊の戰勝に寄與する所甚大であつた。次で所屬部隊は敗敵を追擊し二十五日八達嶺の堅陣を攻略して西進を續け八月末には張北より南下したる關東軍の兵團と連絡し九月十一日には棗樂保附近の敵を擊壊し

て十七日豐鎮を占據し二十四日より平地泉附近に陣地を占領する敵を攻撃することゝなつた。此の時所屬機關銃隊は第一線たる第三大隊に協力を命ぜられ午前二時西廟を出發し（イ）火點に向つて攻撃した。此の攻撃に氏は第二分隊射手として適時的確なる射彈を敵の要點特に其の重機關銃に集中して第一線歩兵の前進を容易にし遂に大隊が敵の（イ）火點を占領するや氏の分隊は陣地を推進して敗退する敵の集團に對し適時猛火を集中して大損害を與へ敵は累々たる屍體を遺棄して敗走し所屬隊は遂に平地泉を占領して其の北端に進出した。此の戰鬪に氏の活躍奮戰は勇敢機敏殊に其の適切なる處置行動と相俟つて頗る目覺ましく其の功績は拔群と認められたのであつた。

十月十六日所屬部隊は魏家庄附近を占領しある敵を攻撃する爲午前七時三十分代縣を出發し午前十時二十分魏家庄を距る二粁の地點に展開し直ちに攻撃前進に移つた。此の時所屬隊は第一線兩中隊間に陣地を占領して協力した。氏は當時二番銃手として克く射手と協力し猛烈なる敵火の下に沈着正確に裝填を實施し連續猛射に些の支障なからしめ機關銃の威力を遺憾なく發揮せしめた。斯くして所屬部隊は午後一時三十分魏家庄を奪取し敵を追撃して西進すること約二粁の地點に達するや突如左前方の部落より猛射を受け同時に右前方高地脚より約二百の敵は我が右側に迫り更に一部の敵は左側背よりも攻撃して來た。此の時所屬機關銃隊主力は左右前方の敵に對し一部は側背の敵に對し何れも直ちに射撃陣地を占領し氏の分隊は主力の陣地に在りて沈着隱忍敵を近距離に引き寄せて突如急襲的猛射を加へ敵は多大の損害を受けたが頗る頑強にして激戰數時に及び我が方亦死傷相次で生じ遂に氏の分隊の射手も戰死した。二番たりし氏は直ちに之れに代り敵を猛射したが無念同時に左頸部及右上膊部に二彈を受けて昏倒した。軈て氏は收容され後送の上大同野戰病院に入院し手厚き醫療を受けたが殘念にも十月二十一日惜しくも護國の華と散つた。併し十六日には氏等の壯烈なる奮戰と尊き犧牲に依り各方面の敵を撃退し赫々たる戰勝を博したのであつた。

氏は軍人たるの素志を貫徹して入營するや間もなく支那事變の勃發となり勇躍出征したが更に兩親より激勵の手紙に一死報國の決意を愈々固くし殊に日頃佛教信仰の念厚き氏は死を見ること歸するが如く戰鬪慘烈の極所に立つて從容自若克く其の責務を完遂して玉碎した。是洵に氏が信仰修養の結果と一死君國に報ぜんとする盡忠至誠の顯現にして軍民の龜鑑とするに足るものである。聖戰の初期斯かる忠誠の勇士を喪ひしことは眞に痛恨の至りであるが氏が居庸關平地泉魏家庄の激戰に樹てたる赫々の武勳は千載に亘り皇軍戰史に輝き芳名は萬古に謳はれ不滅の英靈は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護し一家殊に兩親の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TM）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小泉光男

輕機射手勇敢沈着毎戰奮鬪して大册河畔に散る

氏は栃木縣芳賀郡茂木町の人にして父を常治母をヨデと云ひ大正四年十月七日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚正直事に當り忠實勤勉爲し遂げざれば已まざる氣概を有してゐた。昭和五年三月茂木小學校高等科を卒業し其の後は專賣局茂木出張所に職工として勤務し入營時に至り昭和十二年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵同年七月には一等兵に進級し且精勤章を授けられた。

支那事變起るや坂西部隊猪野中隊に屬し輕機關銃射手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十三十四日永定河畔の戰鬪には所屬中隊は部隊の豫備隊として參加し爾後敵を追撃して十五日午前十時拒馬河の線

に達し午後二時半より强行渡河を開始せらるゝや敵火熾烈にして第一線渡河部隊たる第二大隊の渡河は意の如く進捗しなかつた。之が爲第三中隊は一部を河岸に進出せしめ之が掩護に任ぜしが氏は其の掩護部隊に屬し嵐の如き敵の猛火の下に沈着克く正確なる射擊を爲し我が渡河を妨害しつゝある敵を逐次制壓し其の勇戰奮鬪により克く渡河掩護の任務を完うした。次で中隊が同日夕刻渡河し夜に入り前進中敵より不意に猛射を受け之に向つて夜襲を敢行するや氏は分隊長と共に勇敢に敵陣に突入奮戰の上敵を擊退し次で十八日南苑義安の戰鬪に際しては彈雨の下勇敢輕機の射擊威力を發揮して中隊の戰鬪を有利ならしめた。

九月二十一日所屬部隊は保定攻略の爲敵を急追して同日夕刻王谷莊堡附近大冊河の左岸に達した。敵は大冊河の右岸に長年月を費し極めて堅固なる數線の陣地を構築し鐵條網戰車壕を繞らし掩蓋機關銃座を設備し加ふるに大冊河は河幅百數十米胸を沒する濁流にして敵は此の障碍を利用して我が進擊を阻止せんとしてゐた。此の時所屬中隊は大隊の左第一線として此の敵陣地を夜襲して奪取すべき任務を受け直ちに之が準備に着手し其の夜零時舫上部落を出發し河岸に攻擊準備を整へ午前二時三十分恰も十七日の月光を背に浴びつゝ大冊河の渡河を開始した。然るに敵は逸早く我が夜襲を察知し死物狂ひに我に猛射を浴びせて來た。しかし氏は之を物ともせず勇敢に濁流を渡り對岸に取り着くや敵陣地まで數十米、此の間に鐵條網あり水田あり戰車壕あり正面側面及後方には輕機及掩蓋機關銃を配備し一層猛烈に射敵を浴びせ來り我が死傷續出するの狀態であつた。しかし之にも屈せず鐵條網を破壞して突擊前進するや敵前至近の距離に於て腰を沒する水田に遭ひ前進全く不能となり一時同地に停止するの止むなき狀態となつた。加之此の際小隊長重傷を負ひ氏は逸早く自己の繃帶包を以て應急手當を施せしがかくする內中隊長の突擊の命令下るや勇敢に敵の第一線陣地に突入し奮戰遂に之を奪取して同地を確保し驀て天明となるや機を失せず敵の自動火器に對し猛射を開始し之を沈默せしめた。然るに其の際惜しくも敵彈後頭部を貫通し壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は本戰鬪に於て多數の死傷者を出したるも氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより敵に甚大なる損害を與へ十一時頃には完全に敵陣地を奪取することを得た。

氏や素と誠實の人、其の戰陣に臨むや每戰彈雨の下勇敢沈着克く的確有効なる射擊を以て輕機の威力を發揮し中隊戰勝の素因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ只管重任に邁進し斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑と謂ふべきである。參戰幾日ならずして氏の如き勇士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力鬪して以て樹てたる拔群の武勳は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護祐助を垂るることであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　小坂田國雄

勇敢決死の擲彈筒手每戰偉功を奏して馬廠攻擊の華と散る

氏は岡山縣英田郡巨勢村の人にして亡父を彌十郎母をともと云ひ大正五年十二月十七日に生れ未だ獨身であつた。責性

溫厚篤實にして孝心深く又業務に熱心忠實であつた。昭和六年三月巨勢小學校高等科を卒業し其の後商家の店員として勤め模範店員として表彰せられし事一再ではなかつた。昭和十二年一月現役志願兵として岡山歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し着々良成績を擧げつゝあつた。

支那事變起るや赤柴部隊第六中隊に編入せられ第二小隊第三分隊擲彈筒手として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し八月二十日より二十二日に亘り揚聊青南方地區の掃蕩戰に參加し次で所屬隊が二十三日午前五時四十分より西邊庄の敵を攻擊するや猛烈なる敵の銃砲彈下に克く分隊長の指揮に從ひ地形地物を利用しつつ勇敢に一進一止して逐次敵に近迫し沈着正確なる操作により有效なる射彈を以て適時敵の重火器を制壓し愈々突擊に際しては率先して勇猛果敢に敵陣に突入し午前八時三十分遂に西邊庄を占領するに至つた。而して所屬隊は息つく暇もなく更に東里庄を攻擊して之を占領し夕刻東窑に轉進するや二十四日午前二時數倍の敵は所屬隊目がけて夜襲し來れるも奮戰以て多大の損害

を與へ之を擊退した。斯くて二十九日より唐官屯附近の戰鬪開始せらるるや王官屯雙棲桃家庄馬辛庄林庄馬集曲庄陳庄等逐次之を攻擊して占領し九月五日午後二時より後屯の敵を攻擊した。此の時敵の銃砲火は頗る熾烈を極めしも氏は毫も之に屈せず一進一止勇敢に敵に近迫し擲彈筒の威力を發揮して小隊の攻擊を容易にし遂に率先敵陣に突入午後四時五十分該地を占領するに至つた。

九月十日馬廠附近敵陣地攻擊に當り所屬中隊は大隊の第一線決死中隊となり白晝敵前强行渡河して敵を攻擊することとなつた。敵は幅三十米の運河の後方五十米附近に直接配備を爲ししかも陣地には悉く掩蓋を設備し之に各種火器を配備して堅固に死守してゐた。所屬中隊は午後一時より行動を起し午後二時四十分曲庄にて第一番發動艇に分乘し砲兵掩護射擊の下に敵彈雨飛する運河を遡航して午後三時五十分陞官屯東方運河の對岸に一齊上陸した。敵の野砲機關銃等の射彈は我が上陸點に集中せられ眞に敵彈雨飛の狀態であつた。しかるに氏は之に屈することなく擲彈筒を携へ全く據るべき地形地物とてなくしかも行動困難なる泥地を一進一止し巧匿して敵に近迫し我に最も危害を加へて小隊の前進を惱ましつつある敵の側方掩蓋機關銃を發見し之に對して直ちに射擊を浴びせたが其の沈着剛膽正確なる操作による射彈は克く之に命中し遂に之を撲滅して小隊の前進は頗る容易となつた。氏は更に小隊の前進に伴ひ新に現出せし敵の機關銃に對し附近に居合はす戰友の手榴彈を集めて射擊を開始し第一彈の發射を終り第二彈を手に取り發射せんとせし刹那無念敵の迫擊砲彈身邊に炸裂し胸部に其の破片創を受けて遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午後六時十分頃であつた。しかし氏等の奮戰と尊き犧牲とにより中隊はさしも頑强なりし敵に多大の損害を與へ午後七時頃馬廠陣地を占領することを得た。氏の本戰鬪に臨まんとするに當り家鄉宛認めたる書面中「九月九日午後三時第〇師團の命により私の中隊は選拔せられ決死隊を命ぜられました。祖國の爲謹んで一身を捧げます、一家一門の名譽之に過ぎたるはないと御一同樣御喜び下さい（中略）今度こそは生きて歸りません何も言ひ遺すことはありません一家一門の名譽に對して我が家の繁榮を益々御はかり下さい其が最後の御願ですデハ最後の一通です」とあり氏の本戰鬪に於ける勇敢なる行動は此の決意の現はれであつた。

氏や鄉の良民であり出でて戰陣に臨むや良民卽ち良兵にして每戰彈雨の下勇敢沈着克く擲彈筒の威力を發揮し中にも馬廠攻擊に於ける活動は目覺しきものがあつた。實にかくの如きは陣中決意披瀝の如く一身を君國に捧げて生還を期せざり

し盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾日ならずして馬蹄河畔の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮戰力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國を守護し一家殊に母の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　近藤勝

忠烈勇敢の初年兵月明を利用して敵を狙擊中東邊庄の陣前に散る

氏は岡山縣赤磐郡石生村の人にして亡父を英男母を竹野と云ひ、大正五年四月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性質實剛健頭腦明晰幼にして父を喪ひ母に對し孝心深く家業に熱心にして一意家運の挽回を計り鄕閭の模範青年として村民の信望を集めてゐた。昭和六年三月石生小學校高等科を卒業引續き青年訓練所に入所し同十一年三月同所研究科を卒業したが小學校青年練訓所共に其の成績は優秀であつた。昭和十二年一月徵兵として岡山步兵聯隊に入營爾來一意專心軍務に精勵中數ヶ月にして不幸腎臟炎に冒され入院の止むなきに至つた。氏は之を頗る遺憾とし家鄕にも屢々其の心境を漏らして居た。

支那事變起るや未だ全快に至らざりしも强いて嘆願し退院の上赤柴部隊第一中隊に編入せられ第一小隊第二分隊小銃兵として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着するや惡天候と惡路に惱まされ健康者と雖も其の困難辛酸は堪へ難き程であつたが氏は堅忍不屈萬難を克服して其の行軍に堪へしのみか行軍駐軍の各種勤務に奮勵して克く之を遂行し中隊幹部及戰友等を感激せしめたのであつた。

八月二十一日所屬隊は良王莊を出發して畢庄子の敵を攻擊し同日午後三時三十分同地を占領し翌二十二日引續き東邊庄の敵に對し攻擊前進した。此の時所屬小隊は大隊の尖兵となり午前四時より行動を起して中隊の前方二百米を前進し遂次敵に近接し大隊が攻擊展開に移るや氏は中隊の右第一線小隊火線分隊内にありて攻擊前進を開始した。此の附近一帶は連日の豪雨により膝を沒する泥濘と化し剩へ高粱丈餘に繁茂ししかも敵は豫てより陣地を構築し戰場の地形に精通せる爲正面及側面より猛射を浴びせ來り爲に我が將兵は心焦れども行動頗る困難を極め其の攻擊は實に容易ではなかつた。しかし氏は此の至難の狀況下に於て之を物ともせず分隊長を輔佐し戰友を助け常に分隊の先頭に立ちて躍進又躍進遂次敵に近迫し其の停止に際しては沈着每發必中の射擊に專念し正面の敵に對して多大の損害を與へかくして敵前數十米の地點に到達するに至つた。然るに此の頃日は西に沒し鬱て夜に入るや敵彈愈々熾烈となりしも氏は一層沈着し第一線の最前方に在り

て月明を利用し敵の動靜を窺ひ頻りに之を狙擊し其の殪せる敵の數を數へつつある程沈着勇敢初年兵に似合はぬ目覺しき活躍をして居たが午後十一時三十分頃敵の迫擊砲彈は身邊に落下炸裂し無念左顎顴部に其の破片創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより益々勇奮敵に多大の損害を與へ翌二十三日午前七時三十分には敵陣地を奪取することを得た。

氏や至孝精勤鄕閭の模範青年であり出で〻入營するや不幸病を得たるも押して出陣し彈雨の下勇敢常に最前線に立ちて沈着克く敵を殪し初年兵にも拘はらず其の活躍眞に目覺しきものがあつた。實にかくの如きは忠孝一如盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも士は百戰功なき瓦全を愧づ氏が東邊庄に一戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國を守護じ一家殊に母の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　小林忠一

沈着勇敢なる指揮班員奮戰敵の逆襲を擊退して南苑に散る

氏は兵庫縣多紀郡城南村の人にして父を政藏母をこよしと云ひ大正五年十月十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚職分に忠實にして責任觀念强く不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和六年三月城南小學校高等科を卒業し其の後は大工職見習となり入營時に至り昭和十一年十二月徵兵として平壤步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや鯉登部隊第一步兵砲小隊に屬し小隊指揮班員として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着し七月二十六日には郎坊二十七日には團河村の戰鬪に參加し殊に團河村に於ては雨飛する敵彈下に小隊と大隊本部間の連絡に積極活躍克く其の任を完うした。次で翌二十八日所屬部隊は南苑攻擊の爲未明行動を起し拂曉まで に攻擊準備の位置に就いた。敵は高さ五米の土壁に據り深さ三米幅五米の水濠を繞らし堅固に陣地を占領して頑强に抵抗すべく準備して居た。之に反し我は利用すべき地形地物なく前日と同じ無風にして氣溫百四十度に達し炎熱灼くが如く加ふるに附近一帶丈餘の高粱繁茂し我が戰鬪行動は頗る困難であつた。午前八時より攻擊前進を起すや敵は我が飛行機の爆擊野砲の砲擊にも怯まず機關銃迫擊砲彈を雨か霰の如く浴びせ來り我が攻擊は容易ではなかつた。所屬小隊は午前九時四十分頃大隊第一線の最左翼敵前至近の位置に進出して陣地進入し戰鬪を開始するや氏は猛火の下之を物ともせず且炎暑を冒し高粱を分けつ〻小隊と大隊本部間の連絡に奮鬪し終始克く其の連絡を確保して大隊長意圖の如く適時適所に小隊の戰力を發揮せしめつ〻ありしが正午頃敵兵約五十名喇叭を吹き高粱畑中を我が陣地の左翼に向つて逆襲し來りしかも衆を恃みて逐次近迫し熾んに手榴彈を投擲するに至つた。此の際氏は小隊指揮班の位置にありしが此の敵に對し猛烈なる敵彈の下に沈着泰然として每發必中の小銃射擊に專念し逐次敵を殪し勇戰大いに努め遂に敵は退却を開始するに至りしも其の際敵の砲彈身邊に炸裂し右肘關節に其の破片創を受けて倒れた。軈て氏は收容せられ衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく七月三十日午前十時二十分南苑より天津に後送中輸送列車內にて遂に名譽の戰傷死を遂ぐるに至つた。併し小隊は氏等の奮戰により危機を免れ益々砲の威力を發揮して步兵に協力し午後一時にはさしも頑强なりし南苑の兵營を奪取することを得た。

氏は平素溫順なるも其の戰陣に立つや勇敢彈雨の下不屈不撓終始至難の連絡を確保し又其の敵襲を受くるや沈着奮戰小

隊の危機を脱せしめた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで任務を遂行せんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして河北の野に散りしは洵に痛惜に堪へざるも奮戰玉碎して以て開戰劈頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其の神靈は尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小坂田照雄

沈着勇敢の狙撃手重傷に屈せず奮戰行宮の陣前に散る

氏は兵庫縣神戸市湊區湊川町の人にして父を政市母をまさと云ひ大正五年一月十八日に生れ未だ獨身であつた。資性活潑孝心深く業務に忠實にして責任觀念旺盛の人であつた。昭和三年三月神戸市立楠小學校高等科を卒業其の後一年間家業に從事し爾後日本郵船株式會社野島丸乘組員として勤務し入營時に至り昭和十一年十二月徴兵として平壤歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵中であつた。

支那事變起るや鯉登部隊第三中隊に屬し第二小隊第三分隊狙撃手として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し七月十七十八日は裝甲列車警乘部隊に屬し山海關と天津間を歩兵車及防護車に乘つて徹宵警戒に任じ克く其の任を完うし七月二十七日郎坊附近の戰闘には所屬小隊は中隊の豫備として敵を攻撃し午前八時三十分敵兵退却を開始するや中隊主力と共に列車にて敵を追撃し爾後部落掃蕩に際しては氏は疲勞も顧みず勇敢に活躍して中隊の任務達成を容易ならしめた。

七月二十七日所屬小隊は尖兵となり午後一時三十分黄村を出發し南苑に向つた。然るに途中行宮附近に敵あるを知り午後三時三十分此の敵に對し攻撃を開始した。敵は土壁及墓地等有利なる地形地物を利用し銃眼掩蓋等を堅固に構築し重輕機關銃迫撃砲等を配備して頑強に抵抗すべく準備してゐた。之に反し我は利用すべき地形地物なく炎熱は百四十度に達して灼くが如く加ふるに丈餘の高粱繁茂して行動は頗る困難であつた。所屬小隊は中隊の左第一線となり攻撃前進するや氏は其の火線分隊内にありて機關銃迫撃砲彈の雨飛する中を物ともせず沈着して常に有利なる目標に對し毎發必中の射撃に專念し且一進一止率先して勇敢に前進し惡戰苦闘を續けて漸く敵前百五十米附近に達するや敵の集中火は一層烈しく前進愈々困難となりしが氏は之に屈せず益々志氣を鼓舞して奮戰中午後六時惜しくも敵彈胸部を貫通し其の場に倒るゝに至つた。しかし剛氣の氏は更に屈せず尚も任務を繼續中遂に氣力盡きて玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犠牲とにより午後七時十分敵に多大の損害を與へて行宮西北角を奪取することを得た。

氏は楠公忠死の地に育ち殉忠の精神固かりしはさもあるべしと頷かるゝのである。果して戰陣に立つや彈雨の下或は勇敢に率先前進し或は沈着正確なる狙撃を爲し小銃兵たる本分を完うして遺憾なかりしのみならず瀕死の重傷を負ふも屈せず尚も任務を繼續し斃れて後已む。其の壯烈勇敢洵に鬼神をも哭かしむるものがある。然るに此の勇士を喪ひしは痛恨盡

きざるも士の戰場に臨むや百戰功なくして瓦全を愧づ。實に氏が行宮の一戰に玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり其の神靈は尙も皇國の前途を守護すると共に一家の將來に尊き加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小林五郎

苦戰中見事敵の指揮官を狙撃し小隊戰勝の基を拓き寺溝村に敵る

氏は長野縣更級郡稻荷山町の人にして亡父を茂平母をつる養父亡を寅吉養母(亡)をきみと云ひ明治三十八年七月二十日に生れ妻はつ江との間に一雄、靜枝及芳枝の一男二女を擧げた。資性温厚寡言にして沈着事に當り頗る誠實勤勉爲し遂げざれば已まざる氣概を有し上下の信望厚かつた。大正九年三月稻荷山町小學校高等科を卒業し同十一年四月上諏訪町白作呉服店の店員となり入營時迄勤め大正十五年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營翌昭和二年四月滿洲に派遣柳樹屯に駐屯警備に任じ在滿八ケ月にして內地に歸還滿期除隊し其の後再び前記呉服店に復歸し精勵恪勤勤續十五年に及び同十二年一月推薦せられて諏訪郡富士見高原療養所事務員となり勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遠山部隊補充隊に編入月餘にして補充員となり勇躍征途に就き十一月二日在北支遠山部隊關中隊に編入せられ輕機關銃分隊員を命ぜられた。而して十一月三日愈々彰德城の總攻擊開始せらるるや當日はさしたる戰鬪もなく日沒となり敵と近く相對峙して至嚴の警戒裡に夜を明かし明くれば四日所屬中隊は大隊の右第一線となり拂曉砲兵の射擊開始と共に行動を起し間もなく午前七時三十分より戰鬪を開始した。氏の所屬小隊は鎌倉曹長の指揮下に當初豫備隊たりしが第一線陣地奪取後中隊の左第一線となり敵の第二線陣地たる寺溝村に向つて攻擊を開始した。此の頃より友軍戰車隊も亦戰鬪に參加し縱橫に活躍蹂躙して我が歩兵の戰鬪に協力せしが敵は尙も頑强に抵抗し其の歩砲火は依然として猛烈を極めた。氏は第一線火線分隊內にありて雨下する敵彈を物ともせず分隊長指揮下に勇敢に攻擊前進し又

停止に際しては克く沈着每發必中の射擊に專念して敵を壓倒し我が小隊の前進を容易ならしめかくして一進一止遂次敵に近迫し遂に敵前二百米附近にまで達した。然るに此の頃寺溝南端附近にありし敵機關銃は猛射を浴びせ來り加ふるに正面の敵は尙頑强に抵抗し我が小隊の前進は頗る困難となるに至つた。此の時氏は敵軍を指揮しつつある將校を發見し敵の猛火の中に沈着冷靜狙を定めて之を狙擊し見事一發にて之を殪した。敵は指揮官を失ふや指揮錯亂せしか狼狽して間もなく退却を開始するに至つた。玆に於て小隊は機を失せず同村落に突入するや氏は逃げ遲れたる殘兵を追ひ數人を殪し尙も奮戰中午前十一時三十分頃敵の輕機關銃の射擊を被り分隊長斃れ氏も亦胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより間もなく完全に寺溝村を占領し爾後の戰鬪を有利に進展することを得た。

氏や誠實勤勉の人、其の戰陣に臨むや彈雨の下率先勇敢射擊に突擊に克く奮戰歩兵の本領を發揮して遺憾なかつた。殊

に小隊苦境に際し敵の指揮官を殪して戰勝の基を拓き初陣に於て天晴偉功を樹てた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて家をも身をも打忘れ只管任務に邁進せんとする盡忠至誠の發露にして正に軍人の鑑とするに足るものである。參戰幾日ならずして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛惜極まりなきも一戰玉碎は百戰功なき瓦全に優る。氏の此の一戰に奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は武人の華として後世不朽に傳へらるべく不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の將來に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已まぬことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍輜重兵一等兵勳八等功七級　小金清次郎

壯烈重傷を冒し大敵と奮戰自動車を守護し小寨村に玉碎す

氏は東京市蒲田區本蒲田の人にして父を愛之助亡母をイシと云ひ明治四十二年十月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚業務に忠實熱心にして滅私奉公の精神に富み不屈不撓の氣概があつた。大正十一年三月蒲田尋常小學校を卒業し其の後大工職に從事し昭和四年徴兵檢査の結果第一補充兵役輜重兵特務兵に編入せられた。氏は社會公共の爲貢獻せし所頗る多く在鄕軍人會蒲田分會より精勤章及感謝狀を受くる事四回尙靑年團蒲田區第三支部長として分團長より表彰狀を東京方面委員聯盟より感謝狀を蒲田區防護團長及分團長より感謝狀及表彰狀を夫れ〳〵授けられた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召兵站自動車隊大島部隊矢島中隊に屬し第三小隊第十三分隊貨車運轉助手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月上旬北支に到着し直ちに豐臺北平南口北柳樹林附近に次で九月中旬迄南口懷來宣化附近の補給業務に從事せしが此の間惡路と過度の使用による自動車の手入保全に全力を傾倒し不眠不休の活躍を續け以て中隊の任務達成に支障なからしめた。

九月二十一日所屬隊は宣化を出發同日蔚縣に着し彈藥糧秣を積載し二十四日夕長城線附近靈邱の南方八里小寨村に到着して三浦部隊に之を交付し其の夜は同村附近に露營した。此の頃第一線は戰況刻々急を告げしを以て中隊は至急歸還靈邱より新鋭の歩兵部隊を前線に增加すべき兵力輸送の任務を受け二十五日早朝行軍序列を整へ午前九時靈邱に向ひ同地を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き寒氣身に泌む朝であつた。露營地を後にして進むこと二粁其の先頭谷間の凹道に差懸るや往路此の附近には敵影を見ざりしに敵は昨夜の雨を衝いて竊かに遠く後方に迂回せるものと見え午前九時十五分俄然敵と遭遇するに至つた。依て部隊は直ちに之と應戰せしが敵は迫擊砲重輕機關銃を有する正規軍にして千五百を下らざる部隊なるに我は新庄中佐以下僅かに百七十六名殊に其の大部分は輜重兵である。加之敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及兩側の三方面より攻擊し來り忽ち我は全く敵の重圍に陷るに至つた。氏は此の時第三小隊自衛隊に屬し小隊の右翼火線分隊內にありて隘路東南側の高地の大敵に對し雨下する敵彈の下沈着克く正確なる射擊を加へて多數の敵を殪し勇敢に奮戰中午前十一時頃左上膊に貫通銃創を受けた。併し氏は更に屈せず自ら繃帶し尙も射擊を續行せしも動脈出血

多量の爲遂に氣力も盡き惜しくも壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより約三時間半に亘り寡兵克く衆敵を支へ且自動車を敵手に委することなく午後零時四十分其の包圍線を突破し三浦部隊に合することを得た。

氏郷に在るや公に奉ずる事厚く各方面より表彰せらるゝこと數回に及び而して今次聖戰に從ふや惡路嶮難加ふるに皇軍破竹の進擊に伴ふ晝夜兼行の急追隨其の後方敗殘兵の出沒衰損多き徵用自動車の保全等其の辛苦は想像以上なりしに拘はらず終始一貫粉骨碎身此等有ゆる困難を克服し近代輜重の全能を發揮せしめて常に前線の戰力を培養した。實に第一線快勝の裏に隱れたる此の涙ぐましき功績は沒すべからざるものである。而も果然不測の大敵と遭遇するも沈着勇敢重傷を冒して衆敵と奮戰死力を竭して軍用物件を守護し斃れて後已むに至つた。氏素と軍隊教育を受けざるに壯烈實に斯の如きは平素より積溢せる滅私奉公盡忠至誠の發露にして正に皇軍輜重の鑑と謂ふべきである。征戰中途にして氏の如き忠勇の士を喪へるは洵に痛恨堪きざるも一死奮鬪玉碎して以て樹てたる拔群の武功は永遠に皇軍戰史に輝き其の芳名は軍民の華として後世不朽に謳はるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日輜重兵一等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（HS）

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　手島一彦

敵の指揮官を一發にして斃したる名射手遂に清河鎭に玉碎す

氏は大分縣東國東郡南安岐村の人にして母をキヅと云ひ大正六年四月十三日に生れ母親の手一つに育てられ未だ獨身であつた。資性溫厚にして事に臨み積極敢爲の人であつた。昭和八年三月南安岐高等小學校を卒へ爾來母を扶けて農業に從事し冬期には酒造家の倉子となりて働き又傍青年學校に通ひ十年十一月其の課程を修了した。氏は生來體格强壯にして小學校當初より運動競技の選手として優勝し特に相模は得意とする所であつた。同十二年三月徵兵として滿洲獨立守備歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し良好の成績を擧げつゝあつた。

昭和十二年七月七日北支蘆溝橋事件勃發するや千田部隊に編入せられ鈴木隊輕機關銃手として同月中旬出動し長城線古北口の國境を越へ北京東北方懷柔附近に到り待機警備に就いた。此の間所屬部隊は灼熱百三十度の炎熱を冒し連日連夜不眠不休の强行軍を續け人馬共に疲勞困憊其の極に達したが氏は常に元氣旺盛有ゆる辛酸艱苦を克服して其の難行軍を遂行せしのみならず警戒搜索等の任に服し克く其の重責を完うした。然るに北支の風雲は逐日嶮惡となり帝國の現地解決不擴大方針に基く隱忍自重に對し支那軍は益々暴戾なる挑戰行爲を敢てし遂に我が北支駐屯軍は獨自の行動をとるの已むを得ざる情勢に立至り七月二十七日夜此の旨支那側に通告すると共に聲明を發し翌二十八日拂曉より空陸相呼應して一齊に起ち北支周邊の第二十九軍に對する膺懲戰は開始された。當時千田部隊方面の敵は清河鎭北側より小營西側地區を經て清河鎭附近に亘り堅固に陣地を占領し其の兵力歩兵約四大隊を基幹とするものと判斷されて居た。又此の附近の地形は所謂北支の大平野にして丈餘の高粱繁茂し運動及通視を妨げ加ふるに豪雨の大小河川は一時に

氾濫し平野一帶は泥濘と化し人馬及車輛等の通過は至難の狀況であつた。此の日所屬部隊は清河鎭附近の敵を攻撃する爲午後一時三十分小營附近に展開した。所屬中隊は大隊の右第一線となり小營西方約四百米にある關帝廟の周壁に依る敵を第一次の攻撃目標とし中隊長は氏の屬する第一小隊に對し敵の左側に迂回し側防火點たる關帝廟を奪取すべく命じた。所屬第一小隊は高粱畑を敏活に通過して該火點の東北方約八十米の墓地附近に進出し輕機及小銃分隊を火線とし直ちに射撃を開始し且擲彈筒分隊は圍壁直後の敵に對し曲射を浴びせた。敵は周壁に銃眼を設けて自動火器を配備し一齊に猛射を始め又迫撃砲彈を集中して來た。而も其の射撃は正確で時間の經過と共に激戰其の度を加へ小隊爾後の前進は一時困難の狀況となつた。此の間氏は篠つく雨の如き猛火の下勇敢機敏に彈藥補充に任じ熾烈なる效力射の機續に遺憾なからしめた。斯くして逐次敵を制壓しつゝあつた際敵の一指揮官は大膽にも西側入口附近に姿を現はし戰勢を挽回すべく部下を激勵して居た。之を發見したる小隊長は氏に其の狙撃を命じた。氏は沈着冷靜狙ひを定め其の第一發を發射するや見事命中して敵の指揮官は斃れ明せずして小隊長以下萬歲を叫んだ。氏は更に續いて他の敵に第二發を發射せんとする刹那無念敵の一彈は氏の下顎部を貫通して壯烈なる戰死を遂げた。併し氏等の奮鬪と尊き犧牲に依り頑强に抗戰せし敵も大損害を受け夕刻稍々前敗退したのであつた。

氏は入營前「自分は願が叶つて軍人となることが出來た。此の上は君國の爲決死の覺悟を以て御奉公に專念し萬一の場合に家督は弟に讓るのである」と語つて居た。又出動後母親宛に「私は目下○○に到着して居ります。私は御母さん一人に育てられ人に笑はれない樣に一身を捨てゝ軍人の本分を盡します」と決意を披瀝して居た。果せる哉入營後に於ける成績は頗る良好であり事變出動後は率先難局にあたり有ゆる危險困難を克服し其の活躍は洵に目覺ましきものであつた。殊に一發克く敵の指揮官を斃したる射撃技能と其の功績は正に拔群と謂ふべきである。是氏が母に決意披瀝の如く一死君國に報ぜんとする盡忠至誠の顯現である。氏や參戰幾何ならずして華北の華と散りしは洵に痛惜の極みであるが氏が清河鎭の一戰に樹てたる赫々の武勳は千載に亘り皇軍戰史に輝き芳名は大和櫻と謳はれ不滅の英靈は靖國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し一家殊に母の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。（TM）

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　有木房吉

擔架兵彈雨の下勇敢に傷者を收容傷つくも尙搬送せんとして石板山に散る

氏は和歌山縣東牟婁郡明神村の人にして實母(亡)を下村きく養父を庄吉養母をはると云ひ大正三年三月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして而も事に臨みては不屈不撓の氣概を有し又養父母に仕へて孝心深く家業に眞摯勤勉一家の柱石であつた。昭和二年三月明神小學校高等科一年修業後山林を職場として勞働に從事し其の傍青年訓練所に通ひ同九年一月其の課程を修了した。昭和九年一月徵兵として和歌山步兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵して同十年七月歸休除隊した。其の後は再び家業に專念しつゝ消防組員を拜命し村の公共に盡瘁してゐた。